

二十四の瞳

壺井栄

青空文庫

一 小石先生

十年をひと昔むかしというならば、この物語の発端はつたんは今からふた昔半もまえのことになる。世の中のできごとはいえ、選挙せんきよの規則きそくがあらたまって、普通選挙法ふつうせんきよほうというのが生まれ、二月にその第一回の選挙がおこなわれた、二か月後のことになる。昭和三年四月四日、農山漁村のうさんぎよそんの名が全部あてはまるような、瀬戸内海せとないかいべりの一寒村へ、若い女の先生が赴任ふにんしてきた。

百戸あまりの小さなその村は、入り江の海を湖みづうみのような形にみせる役をしている細長い岬みさきの、そのとつばなにあったので、対岸の町や村へゆくには小舟で渡わたつたり、うねうねとまがりながらつづく岬の山道をてくてく歩いたりせねばならない。交通がすぐくふべんなので、小学校の生徒は四年までが村の分教場にゆき、五年になってはじめて、片道五キロの本村の小学校へかようのである。手作りのわらぞうりは一日でできた。それがみんなはじまんであった。毎朝、新しいぞうりをおろすのは、うれしかったにちがいない。じぶんのぞうりをじぶんの手で作るのも、五年生になってからの仕事である。日曜日に、だれ

かの家へ集まってぞうりを作るのはたのしかった。小さな子どもらは、うらやましそうにそれをながめて、しらずしらずのうちに、ぞうり作りをおぼえてゆく。小さい子どもたちにとつて、五年生になるということは、ひとり立ちを意味するほどのことであつた。しかし、分教場もたのしかった。

分教場の先生は二人で、うんと年よりの男先生と、子どものように若い女先生がくるのにきまつていた。それはまるで、そういう規則があるかのように、大昔からそうだつた。

職員室しよくいんしつのとなりの宿直室しゆくちよくしつに男先生は住みつき、女先生は遠い道をかよつてくる

のも、男先生が三、四年を受けもち、女先生が一、二年と全部の唱歌しょうかと四年女生の裁さいほ

縫うを教える、それも昔からのきまりであつた。生徒たちは先生を呼ぶのに名をいわず、

男先生、女先生おなせいといつた。年よりの男先生が恩給おんきゆうをたのしみに腰こしをすえているのと反

対に、女先生のほうは、一年かせいぜい二年すると転任てんにんした。なんでも、校長になれない

男先生の教師としての最後のつとめと、新米しんまいの女先生が苦勞のしはじめを、この岬みさきの

村の分教場でつとめるのだという噂うわさもあるが、うそかほんとかはわからない。だが、だいた

いほんとうのようでもある。

そうして、昭和三年の四月四日にもどろう。その朝、岬の村の五年生以上の生徒たちは、

本校まで五キロの道をいそいそと歩いていた。みんな、それぞれ一つずつ進級しんきゅうしたことが心はずませ、足もとも軽かったのだ。かばんの中は新しい教科書にかわっているし、今日きょうから新しい教室で、新しい先生に教えてもらうたのしみは、いつも通る道までが新らしく感じられた。それというのも、今日は、新らしく分教場へ赴任ふにんしてくる女生に、この道で出あうということもあった。

「こんどのおなご先生、どんなヤツじやろな」

わざとぞんざいに、ヤツよばわりをするのは、高等科——今の新制中学生にあたる男の子どもたちだ。

「こんどのもまた、女学校出え出えの卵じやいよつたぞ」

「そんなら、また半人前はんじんまえ先生か」

「どうせ、岬みさきはいつでも半人前じやないか」

「貧乏村びんぼうむらなら、半人前でもしようがない」

正規の師範出しはんではなく、女学校出の準教員じゆん（今では助教じよきょうというのだろうか）のことを、口のわるい大人おとなたちが、半人前などというのをまねて、じぶんたちも、もう大人になったようなつもりでいつているのだが、たいして悪気はなかった。しかし、今日きょうはじめて

この道を歩くことになった五年生たちは、目をぱちくりさせながら、今日仲間入りをしたばかりの遠慮えんりよさで、きいている。だが、前方から近づいてくる人の姿をみとめると、まさきかんせいに歓声をあげたのは五年生だった。

「わあ、おなご先生エ」

それは、ついこないだまで教えてもらっていた小林先生である。いつもはさっさとすれちがいながらおじぎを返すだけの小林先生も、今日は立ちどまって、なつかしそうにみんなの顔をかわるがわる見まわした。

「今日で、ほんとおわかれね。もうこの道で、みんなに出あうことはないわね。よく勉強してね」

そのしんみりした口調くちように涙ぐんだ女の子もいた。この小林先生だけは、これまでの女先生の例をやぶって、まえの先生が病気でやめたあと、三年半も岬の村を動かなかった先生であった。だから、ここで出あった生徒たちは、いちどは小林先生に教おそわったことのあるものばかりだ。先生がかわるといふようなことは、本来ならば新学期のその日になってはじめて分かるのだが、小林先生は、かた破りに十日もまえに生徒に話したのである。三月二十五日の修業しゅうぎょう式しきに本校へいった帰り、ちょうど、いま、立っているこのへんで、

別れのことばをいい、みんなに、キヤラメルの小箱こばこを一箱ずつくれた。だからみんなは、今日この道を新らしい女先生が歩いてくるとばかり思っていたのに、それを迎むかえるまえに小林先生にあつてしまったのである。小林先生も、今日は分教場にいる子どもたちに、別れのあいさつにゆくところなのであろう。

「先生、こんどくる先生は？」

「さあ、もうそろそろ見えるでしょう」

「こんどの先生、どんな先生？」

「しらのよ、まだ」

「また女学校出え出え？」

「さあ、ほんとにしらのよ。でもみんな、性しやうわるしたら、だめよ」

そういつて小林先生は笑った。先生もはじめの一年は途とちゆう中の道でひどく困こまらされて、生徒の前もかまわず泣いたこともあつた。泣かした生徒はもうここにはいないけれど、ここにいる子の兄や姉である。若いのと、なれないのとで、岬みさきへくるたいいの女先生が、一度は泣かされるのを、本校通いの子どもらは伝でん説せつとして知っていた。四年もいた小林先生のあとなので、子どもたちの好こう奇き心しんはわくわくしていた。小林先生と別れてからも、

みんなはまた、こんどくる先生の姿を前方に期待しながら、作戦をこらした。

「芋女いもじょオつて、どなるか」

「芋女でなかつたら、どうする」

「芋女に、きまつとると思うがな」

口ぐちに芋女芋女といっているのは、この地方がさつま芋の本場ほんばであり、その芋畑のま
ん中にある女学校なので、こんないたずらな呼びかたも生まれたわけだ。小林先生もその
芋女出身だった。子どもたちは、こんどくる女先生をも芋女出ときめて、もうくるか、も
う見えるかと、道がまがるたびに前方を見わたしたが、彼らの期待する芋女出え出えの若
い先生の姿にはついに出現せず、本村の広い県道に出てしまった。と同時に、もうおなご
先生のことなどかなくなり捨てて、小走りになった。いつも見るくせになっている県道ぞい
の宿屋の玄関げんかんの大時計が、いつもより十分ほどすすんでいたからだ。時計がすすんだの
ではなく、小林先生と立ち話をしただけおそくなったのだ。背中や脇わきの下で筆箱を鳴らし
ながら、ほこりを立ててみんなは走りつづけた。

そうして、その日の帰り道、ふたたび女先生のことを思いだしたのは県道から、岬みさきのほ
うへわかれた山道にさしかかってからである。しかもまた、向こうから小林先生が歩いて

くるのだ。長い袂たもとの着物をきた小林先生は、その袂をひらひらさせながら、みように両手を動かしている。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

女の子はみんな走りだした。先生の笑顔えがおがだんだんはつきりと近づいてくると、先生の両手が見えない綱つなをひっぱっていることがわかって、みんな笑った。先生はまるで、ほんとは綱でもひきよせているように、両手をかわるがわる動かし、とうとう立ちどまってみんなをひきよせてしまった。

「先生、こんどのおなご先生、きた？」

「きたわ。どうして？」

「まだ学校にいるん？」

「ああ、そのこと。舟できたのよ、今日は」

「ふうん。そいでまた、舟で去いんだん？」

「そう、わたしにもいっしょに舟で帰ろうとすすめてくれたけど、先生、も一ぺんあんたらの顔みたかったから、やめた」

「わア」

女の子たちがよろこんで歓かん声せいをあげるのを、男の子はにやにやして見ている。やがてひとりがたずねた。

「こんどの先生、どんな先生ぞな？」

「いい先生らしい。かわいらしい」

小林先生はふつと思いだしたような笑顔をした。

「芋いも女じよ？」

「ちがう、ちがう。えらい先生よ、こんどの先生」

「でも、新しん米まいじゃろ」

小林先生はきゆうにおこったような顔をして、

「あんたら、じぶんで教えてもらう先生でもないのに、どうしてそんなこというの。はじめっから新米でない先生で、ないのよ。またわたしのときみたいに、泣かすつもりでしょう」

そのけんまくに、心の中を見すかされたと思つて目をそらすものもあつた。小林先生が分教場にかよいだしたころの生徒は、わざと一列横おう隊たいになつておじぎをしたり、芋女つ

ときけんたり、穴があくほど見つめたり、にやにや笑いをしたりと、いろんな方法で新米の先生をいやがらせたものだった。しかし、三年半のうちにはもうどんなことをしても先生のほうで困らなくなり、かえって先生が手出しをしてふざけたりした。五キロの道のりでは、なにかなくてはやりきれなかったのだろう。ころをみて、またひとりの生徒がたずねた。

「こんどの先生、何いう名前？」

「大石先生。でもからだは、ちっちゃあい人。小林でもわたしはのっぽだけど、ほんとうに、ちっちゃあい人よ。わたしの肩ぐらい」

「わあ！」

まるで喜ぶようなその笑い声をきくと、小林先生はまたきつとなって、

「だけど、わたしらより、ずっとずっとえらい先生よ。わたしのように半人前ではないのよ」

「ふうん。それで先生、舟でかようんかな？」

ここが大問題だというようにきくのへ、先生のほうも、ここだなという顔をして、

「舟は今日だけよ。明日からみんな会えるわ。でも、こんどの先生は泣かんよ。わたし、

ちやんといつといたもの。本校の生徒と行きし戻りに出あうけど、もしもいたずらしたら、猿さるが遊んでると思つときなさい。もしもなんかいつてなぶつたら、鳥からすが鳴いたと思つときなさいって」

「わあ」

「わあ」

みんないつせいに笑つた。いつしよに笑つて、それで別れて歸つてゆく、小林先生のうしろ姿が、つぎの曲がり角に消えさるまで、生徒たちは口ぐちに叫さけんだ。

「せんせえ」

「さよならあ」

「嫁よめさーん」

「さよならあ」

小林先生はお嫁にゆくためにやめたのを、みんなはもう知っていたのだ。先生が最後にふりかえつて手をふつて、それで見えなくなると、さすがにみんなの胸には、へんな、もの悲しさがのこり、一日のつかれも出てきて、もつそりと歩いた。帰ると、村は大きわぎだった。

「こんどのおなご先生は、洋服きとるど」

「こんどのおなご先生は、芋女いもじょとちがうど」

「こんどのおなご先生は、こんまい人じやど」

そしてつぎの日である。芋女出でない、小さな先生にたいして、どきどきするような作さ戦くせんがこらされた。

こそこそ、こそこそ

こそこそ、こそこそ

道みちささやきながら歩いてゆく彼らは、いきなりどぎもをぬかれたのである。場所もわるかった。見通みとおしのきかぬ曲がり角の近くで、この道にめずらしい自転車が見えたのだ。自転車はすうつと鳥のように近づいてきたかと思うと、洋服をきた女が、みんなのほうへにこつと笑いかけて、

「おはよう！」

と、風のように行きすぎた。どうしたってそれは女先生にちがいがなかった。歩いてくるとぼっかり思っていた女先生は自転車をとばしてきたのだ。自転車にのった女先生ははじめてである。洋服をきた女先生もはじめて見る。はじめての日に、おはよう！ とあいさ

つをした先生もはじめてだ。みんな、しばらくはぼかんとしてそのうしろ姿を見おくつていた。全然これは生徒の敗^まけである。どうもこれは、いつもの新任^{しんにん}先生とはだいぶようすがちがう。少々のいたずらでは、泣きそうもないと思つた。

「ごついな」

「おなごのくせに、自転車にのつたりして」

「なまいきじやな、ちつと」

男の子たちがこんなふう^{ひひょう}に批評^{ひつぽう}している一方^{いっぽう}では、女の子はまた女の子らしく、少しがった見方で、話^{はな}がはずみだしている。

「ほら、モダンガール^{かみ}いうの、あれかもしれない」

「でも、モダンガール^{かみ}いうのは、男のように髪^{かみ}をここのとこで、さんぱつしとることじやろ」

そういつて耳^{みみ}のうしろで二本の指^{はきみ}を鋏^{はきみ}にしてみせてから、

「あの先生は、ちゃんと髪^{かみ}ゆうとつたもん」

「それでも、洋服^{やうふく}きとるもん」

「ひよつとしたら、自転車屋^{じてんしゃや}の子かもしれないな。あんなきれいな自転車^{じてんしゃ}にのるのは。ぴか

ぴか光つとつたもん」

「うちらも自転車にのれたらええな。この道をすうつと走りる、気色きしよくがええじやろ」

なんとしても自転車では太刀打ちたちうちできない。しよい投げをくわされたように、みんながっかりしていることだけはまちがいがなかった。なんとか鼻をあかしてやる方法を考えだしたいと、めいめい思っているのだが、なに一つ思いつかないうちに岬みさきの道を出はずれていた。宿屋の玄関げんかんの柱時計は今日もまた、みんなの足どりを正直にしめして八分ほどすぎている。それ、とばかり背中と脇わきの下の筆入れはいっせいに鳴りだし、ぞうりはほこりを舞まいあがらせた。

ところが、ちようどその同じころ、岬みさきの村でも大きわぎだった。昨日きのうは舟にのつてきたとかで、気がつかぬうちにまた舟で帰ったのをきいた村のおかみさんたちは、今日こそ、どんな顔をして道を通るか、その洋服をきているという女先生を見たがっていた。ことに村の入り口の関せき所しよとあだ名のあるよろずやおかみさんときたら、岬の村へくるほどの人は、だれよりも先にじぶんが見る権利けんりがある、とでもいうように、朝のおきぬけから通りのほうへ気をくばっていた。だいぶ永ながらく雨がなかったので、かわいた表通りに水をまいておくのも、新らしい先生を迎むかえるにはよかろうと、ぞうきんバケツをもって出てき

たとき、向こうから、さあつと自転車が走ってきたのだ。おやつと思うまもなく、

「おはようございます」

あいそよく頭をさげて通りすぎた女がある。

「おはようございます」

返事をしたとたんに、はつと気がついたが、ちょうど下り坂になった道を自転車はもう走りさつていた。よろずやおかみさんはあわてて、となりの大工だいくさんそこへ走りこみ、井戸ばたでせんたくものをつけているおかみさんに大声でいった。

「ちよつと、ちよつと、いま、洋服きた女が自転車にのつて通つたの、あれがおなご先生かいの？」

「白いシャツきて、男みたような黒の上着きとつたかいの」

「うん、そうじゃ」

「なんと、自転車でかいの」

昨日入学式に長女の松江まつえをつれて学校へいった大工のおかみさんは、せんたくものを忘れて、あきれた声でいった。よろずやおかみさんは、わが意を得たという顔で、

「ほんに世もかわつたのう。おなご先生が自転車にのる。おてんばといわれせんかいな」

口では心配しんぱいそうにいったが、その顔はもうおてんばときめている目つきをしていた。よろずやの前から学校までは自転車で二、三分であろうが、すうつと風をきって走って行って十五分もたたぬうちに、女先生の噂うわさはもう村中にひろまっていた。学校でも生徒たちは大ききわぎだった。職員室の入り口のわきに置いた自転車をとりまいて、五十人たらずの生徒は、がやがや、わやわや、まるで雀すずめのけんかだった。そのくせ女先生が話しかけようとして近づくと、やつぱり雀のようにばあつと散ちってしまう。しかたなく職員室にもどると、たつたひとりの同僚どうりょうの男先生は、じつにそつけない顔でだまっている。まるでそれは、話しかけられるのは困りますとでもいつているふうに、机つくえの上の担当箱たんとうばこのかけにうつむきこんで、なにか書類を見ているのだ。授業じゆぎょうのうちあわせなどは、きのう小林先生との事務ひきつきですんでいるので、もうことさら用事はないのだが、それにしてもあんまり、そつけなさすぎると、女先生は不平だったらしい。しかし、男先生は男先生で、困っていたのだ。

——こまつたな。女学校の師範科しはんを出た正教員せいきょういんのぱりぱりは、芋女いもじよ出え出えの半人前の先生とは、だいぶようすがちがうぞ。からだこそ小さいが、頭もよいらしい。話があうかな。昨日、洋服をきてきたので、だいぶハイカラさんだとは思っていたが、自転車

にのつてくるとは思わなんだ。困つたな。なんで今年ことしにかぎつて、こんな上じょうとう等を岬みさきへよこしたんだろう。校長も、どうかしとる。――

と、こんなことを思つて気をおもくしていたのだ。この男先生は、百ひやく姓しょうの息子むすこが、十年がかりで検定試験けんていしけんをうけ、やつと四、五年前に一人前の先生になったという、努力型の人間だった。いつも下駄げたばきで、一枚かんばんの洋服は肩かたのところがやけて、ようかん色にかわつていた。子どももなく年とつた奥さんと二人で、貯金ちよきんだけをたのしみに、儉約けんやくにくらしているような人だから、人のいやがるこのふべんな岬みさきの村へきたのも、つきあいがなくてよいと、じぶんからの希望であつたという変り種かわだねだった。靴くつをはくのは職員よくいんかいぎ会議かいぎなどで本校へ出むいてゆくときだけ、自転車などは、まださわつたこともなかつたのだ。しかし、村ではけつこう気にいられて、魚や野菜に不自由はしなかつた。村の人と同じように、垢あかをつけて、村の人と同じものを食べて、村のことばをつかつているこの男先生に、新任の女先生の洋服と自転車はひどく気づまりな思いをさせてしまった。しかし、女先生はそれを知らない。前任の小林先生から、本校通学の生徒のいたずらについては聞いていたのだが、男先生についてはただ、「へんこつよ、気にしないで」ときさやかれただけだった。だが、へんこつというよりも、まるでいじわるでもされそうな気

がして、たった二日目だというのに、うっかりしていると、ためいきが出そうになる。女先生の名は大石久子^{ひさこ}。湖のような入り江の向こう岸の、大きな一本松のある村の生まれである。岬の村から見ると一本松は盆栽^{ぼんさい}の木のようによく見えたが、その一本松のそばにある家ではお母さんがひとり、娘のつとめ^{むすめ}ぶりを案じてくれている。——と思うと、大石先生の小さなからだは思わず胸をはって、大きく息をすいこみ、

「お母さん！」

と、心の底から呼びかけたくなる。ついこのあいだのこと、

「岬^{みさき}は遠くて気のどくだけど、一年だけがまんしてください。一年たったら本校へもどしますからな。分教場の苦勞^{くろう}は、さきしといたほうがいいですよ」

亡^なくなった父親と友だちの校長先生にそういわれて、一年のしんぼうだと思ってやってきた大石先生である。歩いてかようにはあまりに遠いから、下宿^{げしゆく}をしてはとすすめられたのを、母子^{おやこ}いっしょにくらせるのをただ一つのたのしみにして、市の女学校の師範科^{しはん}の二年を離^{はな}れてくらししていた母親のことを思い、片道八キロを自転車でかよう決心をした大石先生である。自転車は久子としたしかった自転車屋の娘の手づるで、五か月月賦^{げつぷ}で手に入れたのだ。着物がなかったので、母親のセルの着物を黒く染^そめ、へたでもじぶんで縫^ぬった。

それともしらぬ人びとは、おてんばで自転車にのり、ハイカラぶって洋服をきていると思つたかもしれぬ。なにしろ昭和三年である。普通選挙ふつうせんぎょがおこなわれても、それをよそごとと思つているへんびな村のことである。その自転車が新らしく光つていたから、その黒い手縫いのスウツに垢あかがついていなかったから、その白いブラウスがまつ白であつたから、岬の村の人にはひどくぜいたくに見え、おてんばに見え、よりつきがたい女に見えたのであろう。しかしそれも、大石先生にはまだなつとくのゆかぬ、赴任ふにん二日目である。ことばの通じない外国へでもやってきたような心細さで、一本松のわが家のあたりばかりを見やっていた。

カッ　カッ　カッ　カッ

始業を報じる板木ばんぎが鳴りひびいて、大石先生はおどろいて我れにかえつた。ここでは最高の四年生の級きゅう長ちやうに昨日きのうえらばれたばかりの男の子が、背のびをして板木ばんぎをたたいていた。校庭に出ると、今日はじめて親の手をはなれ、ひとりで学校へきた気負きおいと一種の不安をみせて、一年生のかたまりだけは、独特どくとくな、無言のざわめきをみせている。三、

四年の組がさつきと教室へはいつていつたあと、大石先生はしばらく両手をたたきながら、それにあわせて足ぶみをさせ、うしろむきのまま教室へみちびいた。はじめてじぶんにかえったようなゆとりが心にわいてきた。席せきにおさまると、出席簿しゅつせきぼをもったまま教壇きょうだんをおり、

「さ、みんな、じぶんの名前をよべたら、大きな声で返事するんですよ。——岡田磯吉おかだいそきちくん！」

背の順にならんだので一番前の席にいたちびの岡田磯吉は、まっさきにじぶんが呼ばれたのも気おくれのしたもとであったが、生まれてはじめてクンといわれたことでもびっくりして、返事がのどにつかえてしまった。

「岡田磯吉くん、いないんですか」

見まわすと、いちばんうしろの席の、ずぬけて大きな男の子が、びっくりするほど大声で、答えた。

「いる」

「じゃあ、ハイって返事するのよ。岡田磯吉くん」

返事した子の顔を見ながら、その子の席へ近づいてゆくと、二年生がどつと笑い出した。

本ものの岡田磯吉は困って突っ立っている。

「ソンキよ、返事せえ」

きょうだいらしく、よくにた顔をした二年生の女の子が、磯吉にむかって、小声でけしかけている。

「みんなソンキっていうの？」

先生にきかれて、みんなは一ようにうなずいた。

「そう、そんなら、磯吉のソンキさん」

また、どつと笑うなかで、先生も一しよに笑いだしながら鉛筆を動かし、その呼び名をも出席簿しゅっせきぼに小さくつけこんだ。

「つぎは、竹たけ下した竹たけ一いちくん」

「ハイ」りこうそうな男の子である。

「そうそう、はつきりと、よくお返事できたわ。——そのつぎは、徳田吉次とくだきちじくん」

徳田吉次がいきをすいこんで、ちよつとまをおいたところを、さつき、岡田磯吉のとき「いる」といった子が、少しい気になった顔つきで、すかさず、

「キッチン」

と、叫さけんだ。みんながまた笑いだしたことで相沢仁太あいざわたというその子はますますいい気になり、つぎに呼んだ森岡正もりおかただしのときも、「タンコ」とどなった。そして、じぶんの番になると、いつそう大声で、

「ハイ」

先生は笑顔のなかで、少したしなめるように、

「相沢仁太くんは、少しおせっかいね。声も大きすぎるわ。こんどは、よばれた人が、ちやんと返事してね。——川本松江かわもとまつえさん」

「ハイ」

「あなたのこと、みんなはどういうの？」

「マツちゃん」

「そう、あなたのお父さん、大工だいくさん？」

松江はこつくりをした。

「西口ミサ子にしぐちさん」

「ハイ」

「ミキちゃんていうんでしょ」

彼女もまた、かぶりをふり、小さな声で、

「ミイさん、いうん」

「あら、ミイさんいうの。かわいらしいのね。——つぎは、香川マスノさん」

「ハイ」

思わずふきだしそうになるのをこらえこらえ、先生はおさえたような声で、

「ハイは、すこしおかしいわ。ハイっていいましようね、マスノさん」

すると、おせっかいの仁太がまた口をいれた。

「マアちゃんじゃ」

先生はもうそれを無視して、つぎつぎと名前を呼んだ。

「木下富士子さん」

「ハイ」

「山石早苗さん」

「ハイ」

返事のたびにその子の顔に微笑をおくりながら、

「加部小ツルさん」

急にみんながわいわいさわぎだした。何ごとかとおどろいた先生も、口ぐちにいつていることがわかると、香川マスノのヘイよりも、もつとおかしく、若い先生はどうとう笑いだしてしまった。みんなはいつているのだった。カベコツツル、カベコツツル、壁に頭をカベコツツル。

勝気らしい加部小ツルは泣きもせず、しかし赤い顔をしてうつむいていた。そのさわぎもやつとおさまつて、おしまいの片桐コトエの出席をとつたときにはもう、四十五分の授業時間はたつてしまっていた。加部小ツルがチリリンヤ（腰にリンをつけて、用足しをする便利屋）の娘であり、木下富士子が旧家の子どもであり、ヘイと返事をした香川マスノが町の料理屋の娘であり、ソんキの岡田磯吉の家が豆腐屋で、タンコの森岡正が網元の息子と、先生の心のメモにはその日のうちに書きこまれた。それぞれの家業は豆腐屋とよばれ、米屋とよばれ、網屋とよばれてはいても、そのどの家もめいめいの商売だけでは暮しがたらず、百姓もしていれば、片手間には漁師もやっている、そういう状態は大石先生の村と同じである。だれもかれも寸暇をおしんで働かねば暮しのたぬ村、だが、だれもかれも働くことをいとわぬ人たちであることは、その顔を見ればわかる。

この、今日はじめて一つの数から教えこまれようとしている小さな子どもが、学校から帰ればすぐに子守りになり、麦搗きを手つだわされ、網曳きにゆくというのだ。働くこともくてもくてもくもないようなこの寒村の子どもたちと、どのようにしてつながってゆくかを思うとき、一本松をながめて涙ぐんだ感傷は、恥ずかしさでしか考えられない。今日はじめて教壇に立った大石先生の心に、今日はじめて集団生活につながった十二人の一年生の瞳は、それぞれの個性にかがやいてことさらに印象ぶかくうつつたのである。

この瞳を、どうしてにこしてよいものか！

その日、ペタルをふんで八キロの道を一松の村へと帰ってゆく大石先生のはつらつとした姿は、朝よりもいつそうおてんばらしく、村人の目にうつった。

「さよなら」

「さよなら」

「さよなら」

出あう人みんなにあいさつをしながら走ったが、返事をかえす人はすくなかった。時たまあっても、だまっとうなずくだけである。そのはずで、村ではもう大石先生批判の声があがっていたのだ。

——みんなのあだ名まで帳面につけこんだそうな。

——西口屋のミイさんのことを、かわいらしいというたそうな。

——もう、はやのこめから、ひいきしよる。西口屋じゃ、なんぞ持っていってお上手じょうずしたんかもしれん。

なんにも知らぬ大石先生は、小柄こがらなからだをかるやかにのせて、村はずれの坂道にさしかかると、少し前こごみになつて足に力をくわえ、このはりきつた思いを一刻も早く母に語ろうと、ペタルをふみつづけた。歩けばたいして感じないほどのゆるやかな坂道は、往ゆきにはこころよくすべりこんだのだが、そのころよさが帰りには重い荷物となる。そんなことさえ、帰りでよかつたとありがたがるほどすなおな気持であつた。

やがて平坦へいたんな道にさしかかると、朝がた出あつた生徒の一団も帰つてきた。

——大石 小石

——大石 小石

幾いくにん人ももの声のたばが、自転車の速度につれ大きく聞こえてくる。なんの事か、はじめは分からなかつた先生も、それがじぶんのことと分かると思わず声を出して笑つた。それがあだ名になつたと、さつたからだ。わざと、リリリリとベルを鳴らし、すれちが

いながら、高い声でいった。

「さよならア」

わあつと喚かんせい声があがり、また、大石小石！ と呼びかける声の遠のいてゆく。

おなご先生のほかに、小石先生という名がその日生まれたのである。からだの小つぶなからでもあるだろう。新しい自転車ゆうひに夕陽がまぶしくうつり、きらきらさせながら小石先生の姿は岬みさきの道を走っていった。

二 魔法の橋

とつばなまで四キロの細長い岬のまん中あたりにも小さな部落ぶらくがある。入り海にそつた白い道は、この小部落にさしかかるとともに、しぜんに岬を横ぎつて、やがて外海そとうみぞいに、海を見おろしながら小石先生の学校のある岬村へのびている。この外海ぞいの道にさしかかる前後に、本校へかよう生徒たちと出あうのが、毎日のきまりのようになっている。てもしも、少しでも場所がちがうと、どちらかがあわてねばならぬ。

「わあ、小石先生きたぞう」

急に足ばやになるのはたいい生徒のほうだが、たまには先生のほうでも、入り海ぞいの道で行く手に生徒の姿を見つけ、あわててペダルに力を入れることもある。そんなとき、生徒のほうの、よろこぶまいことか。顔をまっかにして走る先生にむかって、はやしたてた。

「やあい、先生のくせに、おくれたぞオ」

「月給、ひくぞオ」

そして、わざと自転車の前に法度はつとする子どもさえあった。そんなことがたびかさなると、その日家へ帰ったときの先生は、お母さんにこぼした。

「子どものくせに、月給ひくぞオだつて。勘かんじょう定じょうだかいのよ。いやんなる」

お母さんは笑いながら、

「そんなこと、おまえ、気にする馬鹿ばかがあるかいな。でもまあ、一年のしんぼうじゃ。しんぼう、しんぼう」

だが、そういつてなくさめられるほど、苦痛は感じていなかった。なれてくると、朝はやく自転車をとばす八キロの道のりはあんがいたのしく、岬みさきを横よこぎるころにはスピードが出てきて、いつのまにか競きょうそう争そうをしていた。それがまた生徒の心へひびかぬはずがなく、

負けずに足が早くなった。シーソーゲームのように押しつ押しされつ、一学期も終つたある日、用事で本校へ出むいていった男先生はみようなことをきいてかえつた。この一学期間、岬の生徒は一度もちこくしないというのだ。片道五キロを歩いてかよう苦勞はだれにもわかつていることで、昔から、岬の子どものちこくだけは大目に見られていたのだが、逆に一度もちこくがないとなると、これは当然ほめられねばならぬ。もちろん、一大事件としてほめられたのだ。男先生はそれを、じぶんの手柄てがらのように思つてよろこび、

「なんしろ、今年の生徒んなかには、たちのよいのがおるからなあ」

五年生のなかにたつたひとり、本校の大ぜいのなかでも群ぐんをぬいてできのよい女の子がいることで、岬みさきからかよつている三十人の男女生徒がちこくしなかつたようにいった。だがそれは、じつは女先生の自転車のためだったのだ。しかし、女先生だとて、そうとは気がつかなかつた。そして、たびたび、この岬の村の子どもらの勤きん勉べんさに感心し、いたずらぐらいはしんぼうすべきことだと思つた。そう思いながら、心の中ではじぶんの勤きん勉べんさをも、ひそかにほめてやつた。

——わたしだつて、途とちゆう中でパンクしたときにちこくしただけだわ。わたしは八キロだもの——などと。そして窓の外に目をやり、じぶんをいつもはげましてくれるお母さんの

ことを思った。おだやかな入り海はいかにも夏らしくきらきら光って、母のいる一本松の村は白い夏雲の下にかすんで見えた。あけつびろげの窓から、海風が流れこんできて、もうあと二日で夏休みになるよろこびが、からだじゆうにしみこむような気がした。だが、少し悲しいのは、なんとしても気をゆるさぬような村の人たちのことだ。それを男先生にこぼすと、男先生は奥歯おくばのない口を大きくあけて笑い、

「そりゃあ無理な注ちゆうもん文ぶんじゃ。あんたが、なんぼ熱心に家庭訪問してもですな、洋服と自転車じやまがじやましとりますワ。ちつとばかりまぶしくて、気がおけるんです。そんな村ですからな」

女先生はびつくりしてしまった。顔を赤らめ、うつむいて考えこんだ。

——着物きて、歩いてかよえというのかしら。往復四里（十六キロ）の道を……。

夏休み中にもなんだかそれについて考えたが、決心のつかぬうちに二学期こよみがきた。暦こよみのうえでは九月といつても、永ながい休みのあとだけに暑さは暑さ以上にこたえ、女先生の小さなからだは少しやせて、顔色もよくなかった。その朝家を出かけるとき、先生のお母さんはいったのである。

「なんじやかんじやというても、三分の一は過すぎたでないか。しんぼう、しんぼう。もう

ちよつとのしんぼう」

手つだつて自転車を出してくれながら、なぐさめてくれた。しかし、先生でもお母さんの前では、ちよつとわがままをいつてみたくなることは、ふつうの人間と同じである。

「あーあ、しんぼ、しんぼか」

腹でも立てているように、さあつと自転車をとばした。しばらくぶりに風をきつて走るころよさが身にしみるようだったが、今日きょうからまた、自転車でかようことを思うと気が重くなつた。休み中难道か話がでて、岬みさきで部屋でも借りようかといつてもみたが、けつきよくは自転車をつづけることになつたのである。自転車も、朝はよいけれど、焼けつくような、暑熱しよねつのてりかえす道を、背中に夕陽ゆうひをうけてもどつてくるときのつらさは、とくに呼吸いそぎもとまるかと思うこともある。岬の村は目の前なのに、日がな毎日馬鹿念をいれて、入り海をぐるりとまわつてかようことを考えると、くやしくてならない。しかも自転車は岬の人たちの気にいらぬというのだ。

あんちきしよ！

口に出してはいわぬが、目の前に横たわる岬みさきをにらまえると、思わず足に力がいはい。めずらしく波のざわめく入り江の海を右にへだてて、岬に逆ぎやっこう行して走りながら、ああ、

と思った。今日は二百十日なのだ。そうと気がつくのと、なんとなくあらしをふくんだ風が、
 じゃけんに頬ほおをなぐり、潮しほつぽい香かおりをぞんぶんにただよわせている。岬の山のとっぺん
 がかすかにゆれ動いているようなのは、外海の波の荒さを思わせて、ちよつと不安にもな
 った。途とちゆう中で自転車をおりねばならないかもしれないからなのだ。そうなると自転車ほど
 じやまものはない。しかし、だからといって今おりのわけにはもうゆかないのだと考えな
 がら、いつしか、空想は羽のある鳥のように飛びまわっていた。

……風なよ凪なげ！　アリババのようにわたしが命令をくださいと、風はたちまち力をぬいて、
 海はうそのように静まりかえる。まるで、いま眠ねむりからさめたばかりの湖みずうみのような静か
 さです。橋よかかれ！　さつとわたしが人さし指を前にのばすと、海の上にはたちまち
 橋がかかる。りっぱな、虹にじのようにきれいな橋です。わたしだけに見える、そして、わ
 たしだけがとおれる橋なのです。わたしの自転車は、そつとその橋の上にさしかかりま
 す。わたしはゆつくりとペダルをふみます。あわてて海におちこむと大へんですから。
 こうして七色のそり橋をゆつくりと渡わたりましたが、いつもより四十五分も早く岬の村へ
 つきました。さあ大へんです。わたしの姿を見た村の人たちは、いそいで時計の針を四

十五分ほどすすめるし、子どもたちときたら、見るも気のどくなほどあわてふためいて、食べかけの朝飯あさめしをのどにつめ、あとはろくに食べずに家をとびだしました。わたしが学校につくと、いま起きたばかりの男先生はおどろいて井戸ばたにかけつけ、手て水みづをつかいはじめるし、年とつた奥さんは奥さんで、ねまきも着かえるまがなく七輪しちりんをやけにあおぎながら、片手で衿えりもとを合わせ合わせ、きまりわるそうなていさい笑いをし、そつと目もとや口もとをこすりました。目のわるい奥さんは、朝おきるといつも目やにがたまっているのです……

ここだけはほんとのことなので、思わずくすつと笑ったとき、空想くうそうは霧きりのように消えてしまった。ゆく手から、風にみだされながらいつもの声がきこえたのである。

「小石せんせえ」

ひと月ぶりの声をきくと、ぐつとからだに力がはいり、「はい」と答えたものの、風はその声をうしろのほうへもつていったようだ。思ったとおり、外海の側は大きく波が立ちさわいでいて、いかにも厄日やくびらしいさまを見せている。

「おそいのね、今日きょうは。四十五分ぐらいおくられているかもしれないわよ」

それをきくと、なつかしように立ちどまって、何か話しかけそうにした子どもたちは、本気にして走りだした。先生のほうも、風にさからって、いつそう足に力をいれた。ときどき方向のきまらぬような舞まい舞い風がふいてきて、何度も自転車をおりねばならなくなったりした。まったく、四十五分ほどおくれそうだ。海への村でも一本松はいつも岬みさきにまもられているかたちで、厄日にもたいしたことはないのにくらべると、細長い岬の村は、外海側そとうみがわの半分がいつも相当の害をうけるらしい。木々の小枝のちぎれてとびちった道を、自転車も難なんじゆうしなから進んだ。押おして歩くほうが多かったかもしれぬ。こうして、ほんとうにずいぶんおくれて村にさしかかったのであつたが、村中が一目で見えるところまできて、先生は思わず立ちどまって叫さけんだ。

「あらッ」

村のとつっきの小さな波止場はとばでは、波止場のすぐ入り口で漁船がてんぷくして、鯨くじらの背のような船底ふなぞこを見せているし、波止場にはいれなかつたのか、道路の上にも幾いくせき隻かの船があげられていた。海から打ちあげられた砂利じやりで道はうずまり、とうてい自転車などとおれそうもないほど荒れているのだ。まるで、よその村へきたような変りかただった。海べりの家ではどこもみな、屋根やねがわらをはがされたらしく、屋根の上うへに人があがっていた。

だれひとり先生にあいさつをするゆとりもないらしいなかを、先生もまた、道に打ちあげられた石をよけながら、自転車を押してやっと学校にたどりついた。門をはいつてゆくと、どつと一年生が走つてきて、とりまいた。そのどの顔にも、生き生きとした目の光があつた。それは、昨夜のあらしのおとずれを、よろこんででもいるように元気なのだ。うわずつた声の調子で、口ぐちに話しかけようとするのを、少し出しゃばりの香川マスノが、わたしは報告ほうこくの役だともいうふうに、その声の高さでみんなをおさえ、

「せんせ、ソソキのうち、ペつちゃんこにつぶれたん。蟹かにをたたきつけたように」
マスノのうすいくちびるから出たことばにおどろき、だんだん大きく目をみひらいた先生は、顔色さえも少しかえて、

「まあ、ソソキさん、うちの人たち、けがしなかつたの？」

見まわすと、ソソキの岡田磯吉おかだいそきちは、びつくりしたのがまださめないようなようすで、こつくりをした。

「せんせ、わたしのうちは、井戸のはねつるべの棹さかがまっ二つに折れて、井戸ばたの水がめがわれたん」

やっぱりマスノがそういった。

「大へんだったのね。ほかのうち、どうだったの」

「よろずやの小父おじさんが、屋根のかこいをしよって、屋根から落ちたん」

「まあ」

「ミイさんとこでさえ、雨戸をとばしたんで。なあミイさん」

気がつくと、マスノがひとりでしやべっている。

「ほかの人どうしたの。なんでもなかったの？」

山石やまいし早苗さなえと目があうと、内気うちきな早苗はあかい顔をしてこっくりした。マスノは先生の

スカートをひっぱって、じぶんのほうへ注意をひき、

「せんせせんせ、それよりもまだ大騒動おおそうどうなんよ。米屋の竹一たけいち家は、ぬすつとにはいら

れたのに、なあ竹一。米一俵びよう、とられたんなあ」

同意をもとめられて竹一は、うんとうなずき、

「ゆだんしとつたんじや。こんな雨風あめかぜの日はだいじょうぶだと思うたら、今朝けさなつて

見てみたら、ちゃんと納屋なやの戸があいとつたん。ぬすつとの家まで、米つぶがこぼれとる

かもしれないうて、お父つあんがさがしたけど、こぼれとらなんだん」

「まあ、いろんなことがあったのね。——ちよつとまつて、自転車おいてくるから、また

あとでね」

いつものとおり職員室のほうへ歩いてゆきながら、ふっと、いつもとちがった明かるさを感じて立ちどまった先生は、そこでまたおどろかされてしまった。井戸の屋根がふつとんで、見おぼえのトタン屋根のあたりが空くうはく白になり、そのあたりの空に白い雲がとんでいた。走りまわっていたらしいしろはちまきの男先生が、いつもに似合わずあいそのよい顔で、

「やあ、おなご先生、どうです。ゆうべは、だいぶあばれましたな」

たすきがけの奥さんも出てきて、頭の手ぬぐいをぬぎながら久しぶりのあいさつをし、

「一本松が、折れましたな」

「え、ほんどですか」

先生はとびあがるほどおどろき、じぶんの村のほうに目をやった。一本松はいつものところになんと立っているが、よくみると少しちがった姿をしている。たいした暴風ぼうふうでもなかったのに、年をへた老松ろうしようは、枝をはったその幹みきの一部を風にうばわれたものらしい。それにしても、入り海をとりかこんだ村むらにとって、大昔から何かにつけて目じるしにされてきた名物めいぶつの老松ろうしようが難なんにあつたのを、地元のじぶんが気づかずになっていたのが恥

ずかしかつた。しかも今朝がたは、ごうまんにもいい気になって、一本松の下から人さし指一本で魔法まほうの橋をかけ、波をしずめたのだ。村の時計を四十五分も進めさせることで、村中の人を大さわぎさせたのに、きてみればそれどころでない大さわぎなのだ。男先生はあわてて手水ちようずをつかっているどころでなく、はだしになって働いている。奥さんは七輪しちりんなどどつくにすまして、きりりとしたたすきがけで働いていてはいないか。

ああ、二学期第一日は出発からまちがっていた、と女先生はひそかに考えた。家を出るとき、お母さんにたいしてのぶあいそを悔くいたのである。三時間目の唱歌しょうかのとき、女先生は思いついて、生徒をつれ、災難さいなんをうけた家へお見舞みまいにゆくことにした。いちばん学校に近い西口ミサ子の家へより、見舞いのことばをのべた。なんといつても家がべつちやんこになったソソキの家が被害ひがいの第一番だとみんながいうので、つぎには荒神こうじん様の上にあるソソキの家へむかった。マスノが今朝けさいった、蟹かにをたたきつけたようだというのを思いだし、それは大人の口まねだろうと思ひながら、へんに実感をともなつて想像そうぞうされた。だが家はもう近所の人たちの手だすけであらかた片づいていた。別棟べつむねの豆腐納屋とうふなやのほうが助かつたので、その土間にじかに畳たたみをいれて、そこへ家財道具かさいどうぐをはこんでいた。一家七人が今夜からそこに寝ねるのかと思うと、気のどくさですぐにはことばも出ないでい

るのを、手つだい人のなかから川本松江の父親が口をだし、大工らしいひょうきんさで、しかしいくぶんかの皮肉をまじえていった。

「あ、これはこれは先生、先生まで手つだいにきておくれたんかな。そんならひとつ、その大ぜいの弟子でしを使うて道路の石でも浜へころがしてつかあきらんか（くださいませんか）」。ここは大工でないと都合がわるいですわい。それとも、手斧ちようなでも持ちますかな」

よいなぐさみものといわんばかりに、そこらの人たちが笑う。先生ははつとし、のんきらしく見られたことを恥はじた。そのとおりだと思った。しかし、せつかくきたのだから、一言ひとことでもソソキの家の人たちに見舞みまいをいおうと思ひ、なんとなくぐずぐずしていたが、だれも取りあつてくれない。しかたなくもどりかけながら、かくしに子どもたちにはかつた。

「ね、みんなで、これから道路の砂利掃除じやりそうじをしようか」

「うん、うん」

「しよう、しよう」

子どもたちは大よろこびで、くもの子が散るようかけだした。あらしのあとらしい、すがすがしさをともなつた暑さにつつまれて、村は隅すみすみまではつきりと見えた。

「よいしょつと!」

「こいつめ!」

「こんちきイ」

めいめいの力におうじた石をかかえては、道路のはじから二メートルばかり下の浜へ落とすのである。二人がかりでやつと動くような大きな石ころもまじえて、まるで荒磯あらいそのように石だらけの道だった。今はもう、ただ静かにたたえているだけのような海の水が、昨夜はこの高い道路の石垣いしがきをのりこえて、こんな石まで打ちあげるほどあれるようになったかと思うと、そのふしぎな自然の力におどろきあきれるばかりだった。波は石をはこび、風は家をたおし、岬みさきの村はまったく大騒動の一夜であったのだ。同じ二百十日も、岬みさきの内と外ではこうもちがうのかと思いながら、先生は抱えた石をどしんと浜になげ、すぐそばで、なれたしぐさで石をけとばしている三年生の男の子にきいた。

「時化しげのとき、いつもこんなふうになるの?」

「はい」

「そして、みんなで石掃除いしそうじするの?」

「はい」

ちようど、そこを香川マスノの母親がとおりかかり、

「まあま先生、ごくろうでござんすな。でも、今日はぎつとにしたほうがよろしいですわ。どうせまた、うしろ七日や二百二十日がひかえとりますからな」

本村のほうで料理屋と宿屋をしているマスノの母は、わが子のいる岬へようすを見にきたということであった。マスノがとんできて、母親の腰こしにかじりつき、

「お母さん、おそろしかったんで、ゆうべ。うち、ごつげな音がして、おばあさんにかじりついて寝ねたん。朝おきたら、はねつるべの棹さおが折れとつたんで。水がめがわれてしもたん」

今朝けさきいたことをマスノはくりかえして母に語っていた。ふんふんといちいちうなずいていたマスノの母親は、半分は先生にむかって、

「岬じゃあ船がながされたり、屋根がつぶれたり、ごっそり壁かべが落ちて家の中が見とおしになった家もあると聞いたもんですからな、びっくりしてきたんですけど、つるべの棹さおぐらいでよかった、よかった」

マスノの母親がいつてから、

「マアちゃん、ごっそり壁かべが落ちたつて、だれのうち？」

マスノはかかえていた石を、すてるのをわすれたように、得意とくいの表情になって、
 「仁太にたんとこよ先生。壁かべが落ちて押入れおしいれん中ちゆうずぶぬれになってしもたん。見みにいったら、
 中ちゆうがまる見えじやった。ばあやんが押入れおしいれん中ちゆうでこないして天てん井じゆう見みよった」
 顔をしかめてばあやんのまねをしたので、先生は思わず吹ふきだしたのである。

「押入れが、まあ」

そういつたあとで、笑わらいはこみあげてきて、ころころと声こゑに出てしまった。なぜそんな
 に先生が笑わらいだすのか生徒たちにはわからなかったが、マスノはひとり、じぶんが先生を
 よろこばしたような気きになって、きげんのよい顔かほをした。みんなはいつかよろずやのそば
 まできていた。よろずやのおかみさんはすごいけんまくを顔かほに出だして走りよつてきて、先
 生の前に立たった。肩かたでいきをしながから、すぐにはものもいえないようだ。きゆうに笑わらいを
 消きした先生は、すぐおじぎをしながから、

「あら、失礼しつれいいたしました。しけで大へんでしたなあ。今日きょうは石ころ掃除そうじのお手つだいを
 していますの」

しかし、おかみさんはまるで聞きこえないようなようすで、

「おなご先生、あんたいま、なにがおかしいて笑わらうたんですか？」

「……………」

「人が災難さいなんに会うたのが、そんなおかしいんですか。うちのお父さんは屋根から落ちましたが、それもおかしいでしょう。みんなごと大した怪我けがは、しませなんだけど、大怪我でもしたら、なお、おかしいでしょう」

「すみません。そんなつもりはちつとも——」

「いいえ、そんならなんで人の災難を笑うたんです。おていさいに、道掃除みちそうじなどしても、いらいますまい。とにかく、わたしの家の前はほつといてもらいます。——なんじゃ、じぶんの自転車が走れんからやつてるんじゃないか、あほくさい。そんなら、じぶんだけでやりやあよい……」

あとのほうはひとり言ひとりごとのようにつぶやきながら、びつくりして二の句もつげないでいる先生をのこして、ぷりぷりしながら引きかえすと、となりの川本大工かわもとだいくのおかみさんに、わざとらしい大声で話しかけた。

「あきれた人もあるもんじやな。ひとの災難を聞いて、けらけら笑う先生があらうか。ひとつ、ねじこんできた」

やがてそれは、また尾ひれがついて村中に伝わってゆくにちがいない。じつと突っ立つ

て、二分間ほど考えこんでいた先生は、心配しんぱいそうにとりまいている生徒たちに気がつく
と、泣きなそうな顔で笑って、しかし声だけは快活かいかつに、

「さ、もうやめましょう。小石先生しっぱいの巻だ。浜で、歌でもうたおうか」

くるつときびすをかえして先に立った。その口もとには笑っているが、ぽろんと涙なみだをこぼ
したのを、子どもたちが見のがすわけではない。

「先生が、泣きよる」

「よろずやのばあやんが、泣かしたんど」

そんなささやきがきこえて、あとはひっそりと、ぞうりの足音だけになった。ふりかえ
って、泣いてなんかいないよう、と笑ってみせようかと思つたとたん、また涙がこぼれそ
うになったので、だまつた。このさい笑うのはよくないとも思つた。さつき笑つたのも、
よろずやのおかみさんがいうように、人の災難を笑つたというよりも、ほんとうのところ
は、マスノの身ぶりがおかしく、それにつづいて、押し入れおしいの連想れんそうは、一学期のある日の、
仁太にたを思いだして笑わせたのであつた。

「天皇陛下てんのうへいかはどこにいらつしやいますか？」

ハイ ハイ と手があがつたなかで、めずらしく仁太がさされ、

「はい、仁太くん」

仁太はからだじゅうからしぼり出すような、れいの大声で、

「天皇陛下は、押入れの中におります」

あんまりきばつな答えに、先生は涙を出して笑った。先生だけでなく、ほかの生徒も笑ったのだ。笑いは教室きょうしつをゆるがし、学校のそとまでひびいていったほどだった。東京、宮城みやぎ、などという声がきこえても、仁太はがてんのゆかぬ顔をしていた。

「どうして、押入れおしいれに天皇陛下がいるの？」

笑いがやまってからきくと、仁太は少々自信じしんをなくした声で、

「学校の、押入れん中にかくしてあるんじゃないんかいや」

それでわかった。仁太がいうのは天皇陛下の写真だったのだ。奉安殿ほうあんでんのなかつた学校では、天皇陛下の写真は押入れにかぎをかけてしまつてあつたのだ。

仁太の家の押入れの壁かべが落ちたことは、それを思いださせたのであつた。若い女先生は、思いだすたびに笑わずにいられなかつたのであるが、そんな言いわけをよろずやおかみさんに聞いてももらえず、だまつて歩いた。涙がこぼれている今でさえ、その話はおかし

い。しかしそのおかしさを、よろずやおかみさんのことばは、差し引きしてつりをとったのである。浜にでて歌でもうたわぬことには、先生も生徒も気持のやりばがなかった。浜におりと先生はすぐ、両手をタクトにして、歌いだした。

はるははよからかわべのあしに

「あわて床屋^{とこや}」である。みんながとりまいて、ついて歌う。

かにが みせだし とこやでござる

チヨツキン チヨツキン チヨツキンナ

歌っているうちに、みんなの気持は、いつのまにか晴れてきていた。

うさぎやおこるし かにやはじよかくし

しかたなくなく あなへとにげる

おしまいまで歌っているうちに、失敗した蟹かにのあわてぶりが、じぶんたちの仲間ができ
たようなおもしろさで思いだされ、いつかまた、心から笑っている先生だった。「このみ
ち」だの「ちんちん千鳥」だの、一学期中におぼえた歌をみんな歌い、「お山の大将」で
ひとやすみになると、生徒たちはてんで走りまわり、おとなしく先生をとりまいてい
るのは一年生の五、六人だけだった。手入れなどめつたにしない乱れた髪かみの毛けを、うしろで
だんごにしている女の子もいるし、いがぐりが耳の上までのびほうだいの男の子もあつた。
床屋とこやのない村では学校のバリカンがひどく役に立ち、それは男先生のうけもちだった。髪
の毛をだんごにしている女の子のほうは、女先生が気をくばって、水銀軟膏すいぎんなんこうをぬりこ
んでやらねばならない。さつそく、明日あしたはそれをやろうと思いつながら先生は立ちあがり、
「さ、今日はこれでおしまい。帰りましょう」

はたはたとスカートひざの膝ひざをはらい、一足うしろにさがったとたん、きやあつと悲鳴ひめいをあ
げてたおれた。落とし穴ひめいに落ちこんだのだ。いっしょに悲鳴ひめいをあげたもの、げらげら笑い
ながら近よってくるもの、手をたたいてよろこぶもの、おどろいて声をのんでいるもの、
そのさわぎのなかから、先生はなかなか立ちあがろうとしなかった。横なりに、くの字に

ねたまま、砂の上に髪かみの毛けをじかにくつつけている。笑ったものも、手をたたいたものも、だまりこんでしまった。異様いようなものを感じたのだ。つぶった両の目から涙なみだが流れているのを見ると、山石やまいし早苗しなえが急に泣きだした。その泣き声にはげまされでもしたように「だいいじょうぶ」といいながらやつと半身をおこした先生は、そうつと穴の中の足を動かし、こわいものにさわるようなようすで、靴くつのボタンをはずし右の足くびにふれたと思うと、そのまままた横になつてしまった。もう起きあがろうとはしない。やがて、目をつぶったまま、

「だれか、男先生、よんできて。おなご先生が足の骨折つて、歩かれんて」

蜂はちの巣すをつついたような大きわぎになった。大きな子供たちがどたばたかけだしていったあとで、女の子はわあわあ泣きだした。まるで半はん鐘しやうでも鳴りだしたように、村中の人かとびだして、みんなそこへかけつけてきた。まっさきにきた竹一の父親は、うつむいてねている女先生に近よつて、砂の上にひぎをつき、

「どうしました、先生」

と、のぞきこんだ。しかし、先生は顔をしかめたまま、ものがいえないらしい。子どもたちからきかされて、足のけがだとわかると、少し安心したようすで、

「くじいたんでしよう。どれどれ」

足もとの方にまわり、靴をぬがせにかかると、先生は、うっと声を出してますます顔をしかめた。靴のあとをくつきりつつけて、先生の足くびは、二倍もの太さになったかと思うほどはれていた。血は出ていなかった。

「冷^ひやすと、よかろうがな」

もう大ぜい集まってきたている人たちにいうと、徳田吉次^{とくだきちじ}のお父つあんが、いそいでよごれた腰^{こし}の手ぬぐいを潮水^{しおみず}にぬらしてきた。

「いたいですかい、ひどく？」

かけつけた男先生にきかれて、女先生はだまつてうなずいた。

「歩けそうにないですかい？」

また、うなずいた。

「一ぺん、立ってみたら？」

だまつている。西口ミサコの家からミサ子の母親が、うどんこと卵をねったはり薬^{ぐすり}を布^{ぬの}にのばしてもってきた。

「骨は、折れとらんとお思います、早く医者^{いしや}にかかるか、もみりようじしたほうがよろし

いじ」

「もみ医者なら中町の草加くさかがよかろう。骨つぎもするし」

「草加より、橋本外科はしもとげかのほうが、そりやあよかろう」

口ぐちにいろんなことをいったが、なにをどうするにも岬みさきの村では外科の医者も、もみりようじもなかった。たった一つはつきりしていることは、どうしても先生は歩けないということだった。あれこれ相談のけつか、舟で中町までつれてゆくことになった。漁師りようしの森岡もりおか正ただしの家の舟で、加部かべ小ツルのお父さんと竹一の兄がこいでゆくことに話がきまった。男先生はついてゆくことになり、女先生をおんぶして舟にのった。坐すわらせたり、おぶつたり、ねかせたりするたびに、女先生のがまんした口から思わずうなり声が出た。舟が渚なぎさをはなれだすと、わあつと、女の子の泣き声がかたまつてとんできた。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

声をかぎりにさけぶものもいる。小石先生は身動きもできず、目をつぶったまま、だまつてその声におくられた。

「せんせえ」

声はしだいに遠ざかり、船は入り海のまん中に出た。朝、魔法の橋をかけた海を、先生は今、痛さをこらえながら、かえつてゆく。

三 米五合豆一升

十日すぎても、半月たつても女先生は姿を見せなかった。職員室しよくいんしつの外の壁かべにもたせてある自転車にほこりがたまり、子どもたちはそれをとりまいて、しょんぼりしていた。もう小石先生はこないのではないかと考えるものもあつた。本校がよいの生徒にしてもそうだ。先生の自転車がどれほど毎日のはげみになつていたか、めいめいが、長い道中どれほど小石先生の姿をまつていたか、小石先生にあわなくなつてから、そう思った。村の人にしても同じだつた。だれがどうというのではなく、不当ふとうにつらくあつていたことを、ひそかに悔くいているようだつた。なぜなら、小石先生の評ひょう判ばんがきゆうによくなつたのだ。

「あの先生ほど、はじめから子どもにうけた先生は、これまでになかつたらうな」
「早うなおつてもらわんと、こまる。岬みさきの子どもが、先生をちんばにして、てなことにな

ると、こまるもん。あとへ来手きてがなかつたりすると、なおこまる」
 「ちんばになんぞ、ならにやえいがなア。若い身空みそらで、ちんばじゃ、なおつても、かよう
 にこまるじやろな」

こんなふうにな先生の噂うわさをした。どうしてももういちど岬みさきの学校へきてもらいたい気持ち
 がふくまれていた。きてもらわないと、ほんとに困こまるのだ。直ちよくせつ接せつに、もつとも困った
 のは男先生だった。小さな村の小学校では、唱しょうか歌かは一週一度だった。その一時間を、男
 先生はもてあましたのだ。女先生が休みだしてから、はじめのうちは、ならつた歌を合唱
 させたり、じょうずらしい子どもに独どくしょう唱しょうさせたりした。そうしてひと月ほどはすんだ
 が、いつまでもごまかすわけにもゆかず、そこで男先生はどうとうオルガンのけいこをは
 じめ、そのために汗あせを流した。先生は声をあげて歌うのである。

ヒヒヒフミミミ イイイムイ——

ドドドレミミミ ソソソラソ——と発音するところを、年よりの男先生はヒヒヒフミミ
 ミ——という。それは昔、男先生が小学校のときにならつたものであった。

ミミミミフフフ　ヒヒフミヒ――

唱歌しょうかは土曜日の三時間目ときまつている。うれしくたのしく歌ってわかれて、日曜日をむかえるという寸法の時間割であったのが、子どもにとっても先生にとっても、きゆうにおもしろくない土曜日の三時間目になってしまった。男先生にとっては、なおのことである。木曜日ごろになると、もう男先生は土曜日の三時間目が気になりだし、そのためにきゆうに気短かになって、ちよつとのことで生徒にあたりちらした。わき見をしたといつては叱しかりつけ、わすれものをしてきた生徒をうしろに立たせた。

「男先生、このごろ、おこりばかりするようになったな」

「すかんようになつたな。どうしたんじやるな」

子どもたちがふしぎがるそのわけを、一ばんよく知っている男先生の奥おくさんは、ひそかに心配して、それとなく男先生を助けようとした。金曜日の夜になると、奥さんは内職の麦稈ばつかん真田をやめてオルガンのそばに立ち、先生を上げました。

「わたしが生徒になりますわ」

「うん、なつてくれ」

豆ランプが、ちろちろゆらぎながら、オルガンと、二人の年より夫婦の姿をてらしているところは、もしも女の子がこれを見たら、ふるえあがりそうな光景である。やみと光りの交錯のなかで先生と奥さんは歌いかわしていた。

ヒヒヒフ ミミミ イイイムイ

奥さんだけが歌い、それにオルガンの調子があうまでにはだいぶ夜もふけた。村はもう一軒のこらず寝しずま^ねまっていることで、かえつて気がねでもしているように、奥さんは豆ランプを消してから足さぐりで部屋にもどりながら、ほうつとため息をし、ひそやかに話しかけた。

「おなご先生も、えらい苦勞かけますな」

「うん。しかし、むこうにすりやあ、もつと苦勞じやろうて」

「そうですとも、あんたのオルガンどころじゃありませんわ。足一本折られたんですもん」
「もしかしたら、大石先生はもう、もどつてこんかもしれんぞ。先生よりも、あの母親の

ほうが、えらいけんまくだったもんな。かけがえのない娘むすめですさかい、二度とふたたび、そんな性しようわるの村へは、もうやりとうありません、いうてな」

「そうでしょうな。しかし、こられんならこられんで、代かわりの先生がきてくれんと困りますな」

人にきかれたら困るとでもいうようにないしよ声でいって、うらめしそうに、ちらりと海のむこうを見た。一本松の村も静かにねむっているらしく、星くずのような遠い灯ひがかすかにまたたいている。こんな夜ふけに、こんな苦勞をしているのはじぶんたちだけだと思うと、女先生がうらめしかった。

あれ以来、奥おくさんもまたひと役かって、四年生五人の裁縫さいほうをうけもっていたのだ。しかし、雑巾ぞうきんさしの裁縫はちつとも苦勞ではなかった。まるで手まりでもかがるようになり、いねいにさすのを、一時間のあいだ、かわるがわるにみてやればそれですむ。だが、唱し歌よつかだけは、なんとしてもオルガンがむつかしい。オルガンは、裁縫するようには手が動かないからだ。それを一生けんめい、ひきこなそうとする男先生の勉強めいけんぶりは、奥さんにとっては、神々ことうごうしいようですえあつた。十月だというのに、男先生は、たらたら汗あせを流していた。外へきこえるのをはばかり、教室の窓はいつもしめてあつたから、汗はよけ

い流れた。

先生ならばオルガンぐらいひけるのがあたりまえなのだが、なにしろ、小学校を出たきり、努力ひとつで教師になった男先生としては、なによりもオルガンがにが手であった。田舎の^{いなか}こととて、どこの学校にも音楽専任の先生はいなかった。どの先生もじぶんの受けもちの生徒に、体操も唱歌も教えねばならない。そんなこともいやで、じぶんからのんで、こんなへんぴな^{みさき}岬へきたのであったのに、今になってオルガンの前で汗を流すなど、オルガンをたたきつけないほど^{はら}腹が立った。

しかし、今夜はそうではなかった。奥さんひとりの生徒にしろ、ひき手と歌い手の調子が合うところまでいったのだ。そんなわけで、男先生のほうは、わりとごきげんだった。そこで奥さんにむかって、少し鼻をたかくした。

「おれだって、ひく気になればオルガンぐらい、すぐひけるんだよ」
奥さんもすなおにうなずいた。

「そうですとも、そうですとも」

大石先生が休みだしてから、明日は六回目ぐらいの唱歌の時間になる。男先生にとっては、明日の唱歌の時間がたのしみにさえなってきた。

「きつと生徒が、びつくりするぞ」

「そうですね。男先生もオルガンがひけると思っていて、見なおすでしょうね」

「そうだよ。ひとつ、しゃんとした歌を教えるのも必要だからな。大石先生ときたら、あほらしくもない歌ばかり教えとるからな。『ちんちんちどり』、だことの、『ちよつきんちよつきんちよつきんな』、だことの、まるで盆^{ぼん}おどりの歌みたよな柔^{やわ}い歌ばかりでないか」

「それでも、子どもはよろこんでりますわ」

「ふん。しかし女の子ならそれもよからうが、男の子にはふさわしからぬ歌だな。こころでひとつ、わしが、大和魂^{やまとたましい}をふるいおこすような歌を教えるのも必要だろ。生徒は女ばかりでないだからな」

奥さんの前で胸をはるようにして、ことのついでのように、今のさつきまで二人でけいこをした唱歌^{しょうか}を歌った。

「ちんびきのいわは、おんもからずウ——」

「しっ、人がきいたら、気がいとおもう」

奥^{おく}さんはびつくりして手をふった。

そして、いよいよあくる日、唱歌の時間がきても、生徒はのろのろと教室にはいった。どうせ、今日きょうもまた、オルガンなしに歌わされるのだと思つて、はこぶ足もかるくなかつたのだろう。小石先生だと、土曜日の二時間目が終ると、そのままひとり教室にのこつて、オルガンを鳴らしていたし、三時間目の板木ばんぎが鳴るとともに行進曲にかわり、みんなの足どりをひとりでに浮き立たせて、しぜん教室へみちびいていた。どんなにそれがたのしかつたことか、みんな、心のどこかにそれを知つていた。口ではいえない、それはうれしさであつた。だから、小石先生がこなくなつた今、口ではいえないものたりなさが、みんなの心のどつかにあつた。それを、気づくというほどでなく、みんなには気づいていたのだ。

「先生は聞き役しとるから、みんなすきな歌うたえ」

オルガンなど見向きもせず、男先生はそういうのだ。歌えといわれても、オルガンが鳴らぬと歌はすぐには出てこなかつた。出てきても調子つばずれだったりする。

ところが、今日は少しちがう。教室にはいると男先生はもう、オルガンの前にちゃんと腰こしかけてまっていた。女先生とは少し調子がちがうが、ブブーとおじぎのあいずも鳴つた。みんなの顔に、おや？ といういろが見えた。二枚の黒板には、いつも女先生がして

いたように、右側には楽譜が、左側には今日ならう歌が立てがきに書かれていた。

ちびき
千引の岩

ちびき
千引の岩は重からず

こっか
国家につくす義は重し

こと
事あるその日、敵あるその日

や
ふりくる矢だまのただ中を

くに
おかしてすすみて国のため

ほんぶん
つくせや男児の本分を、赤心を

漢字には全部ふりがながうってある。男先生はオルガンの前から教壇きょうだんにきて、いつもの授業じゆぎやうのときのように、ひつちく竹の棒ぼうの先で、一語一語を指ししめしながら、この歌の意味を説明しはじめた。まるで修身しゆうしんの時間のようだった。いくらくりかえして、この歌の深い意味をとき聞かしても、のみこめる子どもは幾人いくにんもいなかった。一年生がまつさきに、二年生がつづいて、がやがやがやがや。三年生と四年生の中にも、こそこ

そこそこささやき声がおこった。と、とつぜん、ぴしっ！ とひつちく竹が鳴った。教壇の上の机をはげしくたたいたのである。とたんに、ざわめきはやみ、鳩はとのような目がいつせいに男先生の顔をみつめた。男先生はきびしく、しかし一種のやさしさをこめて、「大石先生は、まだどうぶん学校へ出られんちゆうことだから、これから、男先生が唱しやう歌かもおしえる。よくおぼえるように」

そういつたかと思うと、オルガンのほうへゆき、うつむきこんでしまった。まるでそれを恥はずかしがつてでもいるようにみえた。しかもその姿勢しせいで男先生は歌いだったのである。「ヒヒヒフミミミ イイイムイ はいッ」

生徒たちはきゆうに笑いだしてしまった。ドレミハを、男先生は昔流に歌ったのである。しかし、いくら笑われても、今さらドレミハにして歌う自信が男先生にはなかった。そこでどうとう、ヒフミヨイムナヒ（ドレミの音階おんかい）からはじめて、男先生流に教えた。そうなるとなったで、生徒たちはすっかりよろこんだ。

——ミミミフフフ ヒヒミヒー フーフフヒミイ イイイムイミ……

これでは、まるで気がいが笑つたり怒おこつたりしているようだ。たちまちおぼえてしまつて、その日から大はやりになつてしまつた。だれひとり、その勇壯ゆうさう活発かつぱつな歌詞かしをう

たつて男先生の意図いとに添そおうとするものはなく、イイイイ ムイミーと歌うのだった。

それからまた、何度目かの土曜日、やつぱり「千引の岩」をうたわされての帰り道であった。一年生の香川かがわマスノは、ませた口ぶりで、いつしよに歩いていた山石やまいし早苗さなえにささやいた。

「男先生の唱歌、ほんすかん。やつぱりおなご先生の歌のほうがすきじゃ」
そういつてからすぐ、女先生におそわつたのを歌い出した。

やまの かーらーすウが もつてエキイたア――

早苗も、小ツルもいつしよにつづけてうたつた。

あかい ちいさーな じょうぶくろ……

お昼きりの一年生の女の子ばかりがかたまっていた。
「おなご先生、いつんなつたら、くるんじやろなあ」

マスノの目が一本松のほうへむくと、それにさそわれてみんなの目が一本松の村へそそがれた。

「おなご先生の顔、見たいな」

そういったのは小ツやんの加部小ツルである。通りかかったソソキの岡田磯吉と、キツチンの徳田吉次が仲間にはいつてきて、口まねで、

「おなご先生の顔、みたいな」

いつしか、それは実感になってしまったらしく、立ちどまっていつしよに一本松のほうを見た。

「おなご先生、入院しとるんど」

ソソキが聞いたことを聞いたとおりにいうと、小ツやんが横どりして、

「入院したのは、はじめのことじゃ。もう退院したんど。うちのお父つあん、昨日道で先生に会うたいよつたもん」

それで小ツルは、だれよりもさきに顔が見たいと思いついたらしい。チリリンヤの彼女の父親は、船と陸と両方の便利屋だった。昨日は大八車をひいて町までいったのである。すくなくも一日おきぐらいに、入り江をとりまく町や村をたのまれた用たしでぐるぐるま

わつてくるチリリンヤは、船や車にいろんな噂話もいっしょに積みこんでもどつてきた。大石先生のけががアキレス腱がきれたということも、二、三か月はよく歩けまいということも、それらはみんな、腰に鈴をつけて歩きまわっているチリリンヤが聞いてきたものだった。

「そんなら、もうすぐに、先生くるかしらん。早うくるとええけんどな」

早苗が目をかがやかすと、小ツルはまたそれを横どりして、

「こられるもんか。まだ足が立たんのに」

そして小ツルは、少し調子にのつて、

「おなご先生ん家へ、いつてみるか、みんなで」

いつておいて、ぐるつと、ひとりひとりの顔を見まわした。竹一も、タンコの森岡

正も、仁太もいつのまにか仲間入りしていた。しかし、だれひとり、すぐには小ツルの

思いつきにさんせいするものはなかった。ただだまって一本松の方を見ているのは、そこ

までの距離が、自分たちの計算では見当がつかなかったからだ。片道八キロ、大人のこ

とばで二里という道のりは、一年生の足の経験でははかりしれなかった。とほうもない遠

さであり、海の上からは一瞬で見わたす近さでもある。ただ氏神さまより遠いとい

うことは、少しこわかった。彼らはまだ、だれひとり一本松まで歩いていったものがないのだ。その途^{とちゆう}中にある本村の氏神さまへは、毎年の祭^{まつり}に、歩いたり、船にのったりしてゆくのだが、そこから先がどのくらいなのか、だれも知らない。たったひとり仁太が、ついでこないだ一本松より一つ先の町へいったことがある。しかしそれは、氏神さまの下からバスにのって、一本松のそばを通ったというだけのことだった。それでもみんなは、仁太をとりまいた。

「仁太、氏神さまから一本松まで、何時間ぐらいかかった？」

すると仁太は、得意^{とくい}になって、あおばなをすすりもせず、

「氏神さまからなら、すぐじやった。バスがな、ぶぶうってラツパ鳴らしよって、一本松のとこ突つ走つたもん。まんじゅう一つ食うてしまわんうちじやったど」

「うそつけえ、まんじゅう一つなら、一分間でくえらア」

竹一がそういうと、川本松江が西口ミサ子に、「なあ」と同意をもとめながら、

「なんぼバスが早うても、一分間のはずがないわ、なア」

みんなの反対にあうと、仁太はむきになり、

「そやってぼく、氏神さまのところで食いかけたまんじゅうが、バスをおりてもまだ、ちゃ

んと手に持つとつたもん」

「ほんまか？」

「ほんまじゃ」

「ゆびきりじゃ、こい」

「よし、ゆびきりするがい」

それで、みんなは安心をした。仁太にたが生まれてはじめてのつたバスのめずらしさに、ま
んじゅうを食べるのも忘れて、運転手の手もとを見ていたなど、だれも考えなかつた。た
だ、ともかくも仁太だけがバスにのつたことと、一本松のまだつぎの町でおきるまで、ま
んじゅう一つを食べるまがなかつたことと、この二つからわりだして、氏うじがみ神さまから一
本松までの遠さを、たいしたことではないと思つた。たとえ自転車にのつてとはいえ、女
先生は毎日、あんなに朝早く、一本松からかよつていたではないか。と、そんなことも遠
さとしてより、近さとしてみんなの頭に浮うかんだらしい。そんな気持の動いているときに、
対岸たいがんの海ぞい道にバスが走っているのが見えたからたまらない。小さく小さくみえるバ
スは、まったく、あつというほどのまに走つて林の中へ姿を消した。

「ああ、行きたー！」

マスノがとんきように叫んだ。なんとということなく男の子にさえ力をもっているマスノの一声である。

「いこうや」

「うん、いこう」

正と竹一がさんせいした。

「いこう、いこう。走って行って、走ってもどろ」

「そうじゃ、そうじゃ」

小ツルと松江まつえがとびとびして勇みたつた。だまっているのは早苗さなえと、片桐かたぎりコトエだけである。早苗はもちまへの無口からであったが、コトエのほうは複雑ふくざつな顔をしていた。家のことを思いだしていたのであろう。

「コトヤン、いかんの？」

小ツルがとがめだてるようにいうと、コトヤンはますます不安な表情になり、

「祖母おばんに、問うてから」

その小さな声には自信がなかった。一年生のコトエをかしらに五人きようだいの彼女は、背中にもいつも子どものいないことがなかった。数え年かぞ五つぐらいから彼女は子守り役を引

きうけさせられていたのだ。家へ帰って相談すれば、とてもゆるされる見こみはなかった。そしてまた、それは早苗や松江や小ツルも同じであった。みんな、しゅんとして顔を見あつた。数え年十歳になるまでは遊んでもよいというのが、昔からの子どもの掟のようになっていたが、遊ぶといつても、それはほんとうに自由に遊ぶのではなく、いつも弟や妹をつれたり、赤ん坊をおんぶしてのうえでのことだった。ほんとに、すき勝手に遊んでよいのはひとりっ子のマスノとミサ子だけだ。

コトエの一言はみんなにそれを思いださせたが、しかし、思いとどまることはできない空気だった。

「めし食べたたら、そうつとぬけだしてこうや」

小ツルが、乗りかかった船だともいうように、みんなをけしかけた。

「そうじや、みんなうちの人というたら、行かしてくれんかもしれん。だまつていこうや」
竹一が知恵をめぐらしてそう決断した。こうなるともう、だれひとり反対するものはなく、秘密で出かけることがかえつてみんなをうきうきさせた。

「そうつとぬけだしてな、波止の上ぐらいからいつしよになろう」

正がそういうと、総帥格のマスノはいっそうこまかく頭をつかい、

「波止の上は、よろずやのばあやんに見つかるとうるさいから、藪のそこぐらいにしようや」

「それがえい。みんな、畑の道とおつてぬけていこう」

めいめい、きゆうにいそがしくなった。

「ほんまに、走つていつて、走つてもどらんかな」

念をおしたのはコトエである。みんなが走つて帰つてゆくあとから、コトエは考え考え歩いた。どう考えても、だまってぬけだす工夫はないように思えた。じぶんだけはやめようか。しかしそれはできない。そんなことをしたら、明日からだれも遊んでくれないかもしれぬと思つた。のけものになるのはいやだ。だまってぬけだせたとしても、あとでおばんやお母さんに叱られるのもいやだ。

赤んぼなんぞ、なければよかつた。

そう思うと、いつもはかわいい赤ん坊のタケシの顔がにくらしくなり、一日ぐらい、ほつたらかしたくなつた。彼女の足はきゆうにあともどりをし、畑のほうへ歩いていった。藪が見えだすと走つた。だれかに見つかかりそうで、どきどきした。

二時間後のことである。子どもについてまっさきに心配したのはコトエのおばんであった。

「腹もへろうのに、なにこそしよるやら」

はじめはひとり言をい^{ごと}った。もどればタケシをコトエの背中にくくりつけておいて、おばんは畑へ二番さきげをつみにゆく手はずになっているのに、コトエは帰らないのだ。学校へ見にい^つたところで、今ごろいるはずもないと思ひ、赤ん坊と結^{ゆわ}いひもをもつて、いちばん仲よしの早苗のところへのぞきにい^つた。てつきりそこで遊びほうけていると思つたのだ。

「こんにちは。うちのコトは、きとらんかいの？」

もちろんいるわけがない。それどころか早苗もまだ帰らないというのだ。かえりに荒^{こわ}神^んさまをのぞいてみたが、杉の木かげに遊んでいたのはコトエより少し大きい子や、小さい子ばかりだった。だれにともなく大声で、

「おまえら、うちのコト、知らんかいの？」

「しらんで」

「一ぺんも、今日は見んで」

「早苗さん家とちがうか」

いろいろな返事が矢つぎ早にとんできた。それはみな腹の立つ返事ばかりだった。

「しようのないやつじや、ほんまに。見つけたら、すぐもどれいよつたと、いうておくれ」
おぼんは、ひよいと投げけるようにして赤ん坊を背中にやり、まだわかりもしない赤ん坊に話しかけた。

「姉ねえさんは、どこへうせやがったんじやろな。コトのやつめ、もどってきたら、どやしつけてやらんならん」

しかし、昼飯ひるめしもまだなのを思うと、少し心配になった。心配しいしい土間どまでぞうりを作っていると、川本大工だいくのおかみさんが、気ぜわしそうな足どりでやってきた。

「こんちは、えいお天気で。うちのマツを見にきたんじやけんど、見えんなあ」
それを聞くと、コトエのおぼんはぞうり作りの手をおいて、

「マツちゃんもかいな。昼飯も食べんと、どこをほつつき歩きよんのかしらん」

「うちのマツは昼飯はたべにもどつたがいな。箸はしおいて、用ありげに立っていつて、すぐもどるかと思や、もどつてきやせん」

コトエのおぼんはきゆうに心配になつてきた。もうぞうりどころでなかった。大工のお

かみさんが、さがしてくるといつて帰ったあと、心配はだんだんひろがってくるばかりだった。出たり入ったり、立ったり坐^{すわ}ったり、おちつかなかつた。

——無理もない。あそびたいさかりじゃもん。毎日子守りばかりじゃあ、謀^{むほん}反もおこしたかろう……

ぼとんと涙^{なみだ}が落ちた。その涙でかすんだ目に、小さいときから子守りばかりさせたためか、出^{ちり}つ尻になつてしまった幼いコトエのかわいそうな姿が浮かんできて消えなかつた。

——それにしても、どこで、なにをしているのかしらん。今日は若いもんまでがおそいなあ……

外に出て沖^{おき}をながめた。鱒^{あじりょう}漁に出ているコトエの両親たちの帰りまでが、今日とはとくべつおそいように、おぼんには思えた。

「まだ、もどつてこんかえ」

大工のおかみさんの三度目の声がかかるまでに、小ツルの姉と、早苗の弟と、富士子の母親とが、めいめいの家の娘をあんじてみにきた。まもなく一年生の全部がいないとわかり、やがて本校帰りの生徒のひとり、八幡堂という文^{ぶん}房^{ぼう}具屋のそばでみんなを見かけたというのをきいて、やっと心配は半分になつた。それだけに噂^{うわさ}は村中にひろがり、てん

でにかつてなことをいいあつた。

「芝居しばいがきたというから、行つたんじやないかな」

「銭ぜにもないのに、どうして」

「のぼりやかんばんでも、口あけて見よるかもしれん」

「子どもつちや、ものずきなことやの」

一年生の家の者も今は半分笑顔で話しあつた。

「いんま、腹へらして、足に豆こしらえて、もどつてくるわいの」

「どんな顔して、もどつてくるかしらん。阿呆あほうくらいが」

「もどつたら、おこつたもんかいの、おこらんほうがよかろうか」

「ほめるわけにや、いくまいがのう」

こんなのんきそうながいえたのも、ソんキの兄や、仁太や富士子の父親たちが迎むかえに出むいた安心からであつた。それにしても、だれひとり大石先生を思いださなかつたとは、なんとしたうかつさだつたらう。

三人の出迎え人は、本村にさしかかると、これはと思う人に行きあうたびにたずねた。

「ちよつとおたずねですがな、お昼すぎごろに、七八ななつぐらいの子どもらが十人ほど通つ

たのを、見ませなんだかいな」

同じことを何べんくりかえしたろう。

そこで、子どもたちはどうしていたろう。

藪やぶの上へまっさきについたのは、いうまでもなくコトエだった。コトエはそこで、草むらに学校の包つつみをかくして、みんなをまつた。吉次とソソキが先をあらそうように走ってきた。つづいて竹一と正と。いちばんおくれたのは富士子と仁太であった。仁太は用心ぶかく、シャツやズボンの四つのポケットを、そら豆の煎いったのでふくらましていた。家にあっただけみんな持ってきたのだという。それを気前よくみんなに少しずつ分けてやりながら、いちばんうれしそうな顔をしていた。ぽりぽりいり豆をかみながら一いっしょう行は出発した。

「おなご先生、びっくりするぞ」

「おう、よろこぶぞ」

コトエひとり先頭に立ってみんなをふりかえった。走って行って走って帰るはずなのに、だれもかれものんびりと歩いていると思った。行けばわかるのに、みんな口ぐちに女

先生のことばかりいつている。

「おなご先生、ちんばひいて歩くんど」

「おなご先生の足、まだ痛いんかしらん」

「そりや痛いから、ちんばひくんじやないか」

するとソソキは、ちよこちよこ前にすすみ、

「な、みんな。アキレスはここじやど。この太い筋が、切れたんど」

じぶんのアキレス腱けんのあたりをさすつてみせ、

「こんなとこがきれたんじやもん、痛うのうて」

ようやくみんなの足は早くなつていった。子どもたちだけでこの道を歩くのは、はじめでだった。山ひだを一つすぎるごとに新らしい眺めながめがあらわれて、あきなかつた。岬みさきを横ぎり、入り海ぞいの道にかかると、一本松の村はななめうしろに遠のく。それだけ近くなっているのが、うそのような気がして心細くなつたが、だれも口には出さない。やがて、はるかかなたに本校がえりの生徒のかたまりがみえた。みんな、はつとして顔を見あわせた。

「かくれ、かくれ。大いそぎで」

マスノの一声は、あとの十一人を猿さるのようにすばしこくさせ、萱山かややまの中へ走りこませた。がさがさと音がして萱がゆれた。

「じつとして！ 音さしたらいかん」

マスノがうすいくちびるをそらして、少しつた切れ長の目にものをいわせると、竹一や正までが声もからだもひそめてしまった。みんなの背の倍もありそうな笹萱ささがやの山は、十二人の子どもをかくしてさやさやと鳴った。しかし気づかれずに大きな生徒たちをやりすごせたのは、じつにマスノの機転きてんであった。彼女ににらまれると、みんなは猫ねこのようにおとなしくなるのだ。

岬みさきの道を出て、いよいよ本村にはいるころから、みんなはしげんと小声にしゃべっていた。一本松の村までには幾つかの町や村の、たくさんの部落ぶらうくがあった。大小のその村むらゝをすぎては迎えむか、すぎてはまた迎え、あきるほどそれをくりかえしても、一本松はなかなかこなかった。岬の村からみれば、あんなに近かった一本松、目の前に見えていた一本松、それが今は姿さえも見せない。八キロ、大人のいう二里の遠さを足の裏から感じだして、だんだんだまりこんでいった。行きあう人の顔も、見おぼえがなかった。まるで遠い国へきたような心細さが、みんなの胸の中にだんだん、重石おもしのようにしずんでいく。

もう一つ、はなをまわれれば一本松は目の前にながめられることを、だれもしらないのだ。きいてもらちのあかぬ仁太にきくことも、もうあきらめてしまつて、ただ前へ前へとひと足でも進むよりほかなかつた。竹一とミサ子はまつさきにぞうりをきらし、きれぬ片方をミサ子にやつて、竹一ははだしになつていた。吉次も正もあやしかつた。だれも一いっせん銭ももつていないのだ。ぞうりは買えるわけがない。はだしで帰らねばならないだろうことは、歩いてきた道の遠さと考えあわせて、ぞうりのきれかけたものの気持はよけいみじめだつた。

とつぜん、コトエが泣きだしてしまつた。昼めしぬきの彼女は、つかれかたもまたはやかつたらうし、がまんできなくなつたのだろう。道ばたにしゃがんで、ええん ええんと声を出して泣いた。すると、ミサ子と富士子がさそわれて、しくしくやりだした。みんなは立ちどまつて、ぼかんとした顔で泣いている三人を見ていた。じぶんたちも泣きたいほどなのだ。元氣づけてやることばなど、出てこなかつた。きびすをかえせばよいのだ。もう帰ろうや、と、だれかがいえばよいのだ。しかしだれも、それさえいはず力がなかつた。マスノや小ツルさえ、困こんわく惑の色を浮うかべていた。彼女たちにしても、泣きだしたかつたのだ。しかし泣けなかつた。いっそ、みんなで泣き出せば、どこからか救いの手が

のべられるだろうが、それにも気がつかなかった。

初秋の空は晴れわたって、午後の陽ひざしはこの幼おきない一いち団だんを、白くかわいた道のまん中に、異様さをみせてうしろから照てらしていた。家へ帰りたいたい気持はしぜんにあらわれて、知らずしらず歩いてきた道のほうを向いて立っていたのである。その前方から、警けい笛てきとともに、銀色の乗のり合あバスあいが走ってきた。瞬しゅん間かん、十二人は一つの気持にむすばれ、せまい道ばたの草むらの中に一列によけてバスを迎むかえた。コトエさえももう泣いてはいわず、一心にバスを見まもっていた。もうもうと、煙けむりのように白い砂ぼこりをたてて、バスは目の前を通りすぎようとした。と、その窓から、思いがけぬ顔がみえ、

「あら、あら！」

といつたと思うと、バスは走りぬけた。大石先生なのだ。

わあッ！

思わず道へとびだすと、歓かん声せいをあげながらバスのあとを追って走った。新らしい力がどこからわいたのか、みんなの足は早かった。

「せんせえ」

「おなごせんせえ」

途中とちゆうでバスがとまり、女先生をおろすとまた走っていった。松葉杖まつばづえによりかかって、みんなをまっていた先生は、そばまでくるのをまたずに、大きな声でいった。

「どうしたの、いったい」

走りよってその手にすがりつきもならず、なつかしさと、一種のおそろしさに、そばまでゆけず立ちどまったものもあった。

「先生の、顔みにきたん。遠かったあ」

仁太が口火をきいたので、それでみんなも口ぐちにいいだした。

「みんなでやくそくして、だまってきたん、なあ」

「一本松が、なかなか来んの、コトやんが泣きだしたところじやった」

「せんせ、一本松、どこ？ まだまだ？」

「足まだ痛いん？」

笑っている先生の頬ほおを涙なみだがとめどなく流れていた。なんのことはない、一本松も先生の家も、すぐそこだとわかると、また歓声かんせいがあがった。

「ほたつて、一本松、なかなかじやったもんなあ」

「もう去いのうかと思たぐらい遠かつたな」

松葉杖をとりまいて歩きながら先生の家へゆくと、先生のお母さんもすっかりおどろいて、きゆうにてんてこまいになった。かまどの下をたきつけるやら、何度も外に走りだすやら、そうして一時間ほど先生の家^にいただらうか。そのあいだにキツネうどんをごちそうになり、おかわりまでするものもいた。先生はよろこんで、記念^{きねん}の写真をとろうとい、近^{きんじよ}所の写真屋さんをたのんで、一本松まで出かけた。

「もつと、みんなの顔みていたいけど、もうすぐ日がくれるからね。うちの人、心配してるわよ」

帰りがらぬ子どもをなだめて、やっと船にのせたのは四時をすぎていた。短かい秋の日はかたむいて、岬^{みさき}の村は、何ごともなかつたかのように、夕ぐれの色の中に包まれようとしていた。

「さよならア」

「さよならア」

松葉杖で浜に立って見おくついている先生に、船の上からはたえまなく声がかかった。

三人の大人たちが町から村をさがしまわつてるとき、十二人の子どもは、思いがけぬ道を通つて村へもどつた。

わあい！

やあい！

時ならぬ沖合からの叫びに、岬の村の人たちは、どぎもをぬかれたのである。叱つてはみても、けつきよくは大笑いになって、大石先生の人気はあがった。

その翌々日、チリリンヤの大八車には、めずらしい荷物が積みこまれた。あんまりこまかいので、チリリンヤはそれをリングの空箱にまとめて村を出ていった。道みち、いろんな用たしをしながら一本松までくると、リングの箱をそのままかついで歩きだした。腰の鈴がリリンリリンと、足をかわずごとに鳴りつづけ、やがて、リツと鳴りやんだのが、大石先生の家の縁先である。チリリンヤのリンの音は、どこかから、なにかが届けられるときのあいさつである。いいわけは、あまり必要でなかった。

「はい。米五合の豆一升。こいつは軽いぞ煮干かな。ほい、もう一つ米一升の豆五合——」

小さな袋を幾つもとりだして縁側の板の間に積みかさねた。袋には名前が書いてある。それはみな、義理がたい岬の村から、大石先生への見舞いの米や豆だった。

四 わかれ

写真ができてきた。一本松を背景にして、松葉杖まつばづえによりかかった先生を十二人の子どもたちが、立ったり、しゃがんだりしてとりまいている。磯吉、竹一、松江、ミサ子、マスノ、順々に見ていって仁太にたのところへくると、思わずふきだした。あんまり仁太がきばりすぎているからだった。つめている呼吸こきゅうが、いまにも、うううともれて、うなりだしそうにかたくなっている。気をつけのその姿勢しせいは、だれが見たって笑わずにいられるものはなかった。マスノとミサ子のほかは、生まれてはじめて写真をとったということで、だいたい、みんなかたくなっている。そのなかで仁太と吉次はとくべつであった。仁太とは反対に、身をすくめ、顔をそむけ、おまけに目をつぶっている吉次は、ふだんの小気さをそのまま映うつしだされているようで、かわいそうにさえ思えた。

かわいそうにキツチン、こわかったんだらう、写真機の中から、なにがとびだすかと思つたんだらう……

ひとり写真をながめて笑っているところへ、本校の校長先生がきた。その声をきくと、こんどは大石先生のほうが、思わず気をつけのようになつて玄関げんかんに出ていった。松葉杖

ははなれていたが、まだまだびつこの歩きぶりを見ると、校長先生はちよつと眉まゆをよせ、
 気のどくがった顔で見ていた。

「ひどい目にありましたな」

「はあ、でも、ずいぶんよくなりました」

「いたいですか、まだ？」

返事にこまつて答えられないでいると、校長先生がさいそくにきたとでも思ったらしく、
 お母さんがかわつて答えた。

「いつまでもごめいわくをかけまして、すみません。もうずいぶんらくになったようです
 けど、なんしろ、自転車にのれないものですから、いつまでもぐずぐずしておりました、
 はい」

しかし校長先生のほうはそんなつもりではなく、見舞みまいがてら吉報きつぽうをもってきたので
 あつた。友人の娘むすめである大石先生のこと、今日きょうは名前なまえでよんで、

「久子さんも片足犠牲ぎせいにしたんだから、岬みさき勤きんめはもうよいでしょう。本校へもどつて
 もらうことにしたんじゃないかな、その足じゃあ、本校へもまだ出られんでしょうな」

お母さんはきゆうなみだに涙ぐんで、

「それは、まあ」

といったぎり、しばらくあとが出なかった。思いがけない喜びであり、きゆうには礼れいのことばも出てこなかったのだ。それをごまかしでもするように、さつきから、やつぱりだまつている娘の大石先生に気がつくつと、

「久子、久子、なんです。ぼんやりして。お礼をいいなさいよ」

しかし、大石先生としては、せつかくのこの校長先生のはからいが、あんまりうれしくなかったのだ。これがもし、半年前のことならば、とびとびして喜んだろうが、今ではもう、そうかんたんに、いかない事情が生まれてきていた。だから、口をついて出たことばは、お礼ではなかった。

「あおう、もうそのこと、きまつたんでしようか。後任こうにんの先生のことも」

まるでそれは、とんでもないといわぬばかりの口調くちようである。

「きまりました。きのうの職員会議で。いけませんかい」

「いけないなんて、それは、そんなこという権利けんりありませんけど、でもわたし、やつぱりこまつたわ」

そこにお母さんでもいたら、大石先生は叱しかりつけられたかもしれぬ。しかしお母さんは、

茶菓子でも買いにいったらしく、出ていったあとだった。校長先生はにこにこ笑って、

「なにが困るんですか？」

「あの、生徒と約束したんです。また岬へもどるって」

「こりやおどろいた。しかし、どうしてかよいますかね。お母さんのお話だと、とうぶん自転車にもものれんということだったので、そうはからったんですがね」

もう、いいようがなかった。すると、岬の村がいつそうなつかしくなり、思わず未練がましくいった。

「後任の先生は、どなたでしょう」

「後藤先生です」

「あら！」

お気のどくといいそうになってあわててやめた。後藤先生こそ、どうしてかようだろうとあんじられたのだ。もうすぐ四十で、しかも晩婚の後藤先生には乳呑み子があつた。じぶんよりは少し岬へ近い村の人とはいえ、一里半（六キロ）はあるであろう岬へ、寒さにむかってどうしてかようだろうかと思うと、その気のどくさと、じぶんの心残りとがごっちゃになって、急に眉をあげた。

「では、校長先生、こうしていただけませんか。わたしの足がすっかりなおりましたら、いつでも代りますから。それまで後藤先生にお願いすることにして……」

いかにもよい思いつきだと思つたのだが、校長先生の返事は思いがけなかった。

「義理ぎりがたいこというなあ、久子さん。あんたがそないに気をつかわんでも、ちようどよかつたんだから。後藤先生は、すすんで岬を希望したんだから」

「あら、どうしてですか？」

「いろいろ、あつてね。老朽ろうきゆうで来年はやめてもらう番になつていたところを、岬へいけば、三年ぐらいのびるからね。そういつたら、よろこんで、承知しょうちしましたよ」

「まあ、老朽！」

三十八や九で老朽とは？　まだ乳呑ちのどみ子ごをかかえている女が老朽とは。あきれたような顔をしてことばをきつた大石先生を、いつのまにか外から帰ってきたお母さんは、くだものなど盛もつた盆ぼんをさし出しながら、娘むすめのぶえんりよさに気が気でなく、

「久子、なんですか、せつかくの校長先生のご好意に、ろくろくお礼もいわないで。だまつてきいてりや、さつきからおまえ、へソ曲りなことばっかりいうて……」

そして校長先生の前に手をつき、

「どうもほんとに、わたしが行きとどきませんでな。つい、ひとりっ子であまえさせたらしく、失礼なことばかり申しまして。これでも、学校のことだけはあなた、寝てもさめでも考えとりますふうで、早く出たい出たいと申しとりましたんです。おかげさまで、本校のほうにかわらしていただけたから、もう十日もしたら、バスにのって、かよえると思います。こんな、気ままなですけど、どうぞもう、よろしゅうお願いいたします」

娘にいわせたいことを、ひとりならべたてて、何度もべこべこ頭をさげた。そして、それとなく目顔であいずをしたが、大石先生はそしらぬ顔で、まだ後藤先生にこだわっていた。

「それで、もう後藤先生は、岬へかよってるんでしょうか？」

校長先生もまた、この少しふうがわりの、あまのじやくみみたいな娘を相手にして、おもしろがっているようすで、

「そいつは、まだですがね。なんならもう一度職員会議をひらいて取り消してもよろしい。後藤先生は、がっかりするでしょうがなあ」

お母さんひとりには、気をもみつづけ、はらはらしていた。そのお母さんにむかって、校長先生は、

「大石くんに、似たところがありますな。一徹居士いつてつこじなどところ。なにしろ彼は、小学生でストライキをやったんだから、前代未聞ぜんだいみもんですよ」

あつはつはと笑った。その話は、まえにも聞いたことがあつた。なんでも、小学校四年生の父が、受けもちの先生に誤解ごかいされたことをおこつて、級友をそのかして一日ストをやつたというのだ。同級生だつた校長先生も、同情どうじょうして、みんなでいっしょに村役場へ押しかけていつて、先生をとりかえてくれといったのだという。今年の春、就職しゅうしょくをたのみにいつたとき、はじめて父の少年時代のことをきいて、母と子はいっしょに笑つたのである。ただ思い出話として笑つて語られる父のことが、今の大石先生には、ふしぎと、まじめにひびいた。

校長先生が帰つたあとも、ひとりで考えこんでいる大石先生を、お母さんはいたわるように、

「でもまあ、よかつたではないか、久子」

しかし大石先生はだまつていた。そして晩ばんの御飯もいつもよりたべなかつた。夜おそくまで考えつづけたあげく、やつとお母さんにいつた。

「よかつたのかもしれないわ。わたしにも、後藤先生にも」

それは「よかったでないか、久子」といわれてから四時間もあとのことであつた。お母さんはほつとした顔で、

「そうとも、そうともお前、万事都合よくいったというものよ、久子」

すると先生はまた、ややしばらく考えてから、はつきりいった。

「そんなこと、ぜつたいにないわ。万事都合なんかよくなるなら。すくなくも後藤先生のためによ。だつて、老朽なんて、失礼よ」

この娘は気が立っているのだというふうに、お母さんはもうそれにきからおうとはしないで、やさしくいった。

「とにかく、もう寝ようでないの。だいぶふけたようじゃ」

その翌朝、思いたつた大石先生は、岬の村へ船で出かけた。船頭は小ツルの父親

とおなじく、渡し舟をしたり、車をひいたりするのが渡世の、一本松の村のチリリンヤで

あつた。十月末の風のない朝だ。空も海も青々として、ひきしまるような海の空気は、両

袖で思わず胸をだくほどのひやつこさである。

「おお寒ぶ。もう拾じやのう、おっさん」

「なに、陽があがりや、そうでもない。今が、いちばんいい季節じゃ。暑うなし、寒うなし」

珍らしく紺のセルの着物に、紫紺の袴をつけている大石先生だった。ゴザをしいた船の胴の間に横いざりに坐った足を、袴はうまくかくして、深い紺青の海の上を、船は先生の心一つをのせて、櫓音も規則ただしく、まっすぐに進んだ。二か月前に泣きながら渡った海を、今はまた、気おいたつ心で渡っている。

「なんせ、ひどい目をみたのう」

「はあ」

「若いものは、骨がやらかい（やわらかい）から、折れてもなおりが早い」

「骨じゃないんで。筋ともちがう。アキレス腱、いうんじやがのう。骨よりも、むつかしいところで」

「ほう、そんなら、なおいかん」

「でも、ひどい目にあわすつもりでしたんじやないさかい。怪我じゃもん、しょうがない」

「そんな目に おうても わかれの あいさつとは 気のえい こっちやい。ゆんとん、さんじやい」

船頭せんとうさんは櫓ろにあわせて短かくことばをくぎりながら、「ゆんどん、さんじやい」で、いつそう力を入れてこいだ。大石先生もくつくつ笑いながら、それにあわせて、

「そんなこと　いうても　たつたの　一年生が　親にも　ないしよで　見舞みまいに　きたんじやもん　いかんと　おれるかい　ゆんどん　さんじやい」

大石先生がきやつきやつと笑うと、船頭さんもいい気持ちらしく、

「ぎりと　ふんどしや　かかねば　なるまい　そういう　もんじやよ　ゆんどん　さんかよ」

もう大石先生は腹をかかえて、思うぞんぶん笑った。海の上ではだれも気にするものもなく、その笑い声まで櫓の音でくぎられながら、船はしだいに沖おきにすすみ、やがて対岸の村へと近づいてゆく。まだ朝げの靄もやの消えきらぬ岬みさきのはなは、もうとつくに今日の出発がはじまったらしく、小さな物音がしきりにひびいてきた。今ごろ、あの子どもたちはどうしているだろうか。自転車でかよつていたとき、よろずやの前にさしかかると、あわてて走りだしてきていた松江、よく、波止場はとばの上まで出てきて待ちうけていたソソキ、三日に一度はちこくする仁太にた、おしやまのマスノ、えんりよやの早苗さなえ、一学期に二度も教室で小便をもらった吉次、と、ひとりひとりの上に思いをめぐらしながら、よくぞあのチビども

が、思いきつて一本松までこられたものだと思うと、あの日の、ほこりにまみれた足もとなど、思いだされて、いとしさに、からだかふるえるほどだった。

あのときは、わたしのほうがおどろかさされたから、今日はひとつ、みんなをびつくりさせてやる……。だれにまっさきに見つかるだろうか、たのしい空想をのせて船はすすみ、緑の木立ちや黒い小さな屋根をのせて岬はすべるように近づいてきた。二人の女の子が砂浜に立つてこちらを見ている。一年生ではないらしい。ふしぎそうにこちらから目をはなさない。変化にとぼしい岬の村では、海からの客も、陸からの客も見つけるに早く、好奇心の目はまたたくまに集団をつくるのだった。立ちどまっている子どもが五人になり、七人にふえたと思うと、その姿はしだいに大きくなり、がやがや騒さわぎとともに、ひとりひとりの顔の見わけもつきだした。しかし、子どものほうではだれもまだ着物の先生に見けんとう当がつかぬらしく、ま顔で見つめている。笑いかけてもわからぬらしい。しびれをきらして思わず片手があがると、がやがやはきゆうに大きくなって、叫さけびだした。

「やつぱり、おなご先生じゃア」

「おなご せんせえ」

「おなごせんせが きたどオ」

浜べはもういつのまにか大人おとなまでがまじつての大かんげいになった。船頭せんどうさんのなげたとも綱つなは歓呼かんこの声でたぐりよせられ、力あまつて船は砂浜まで引きあげられるさわぎだった。ひとしきり笑いさざめいたあげく、ともかく学校へ向かった。途中とちゆうで出あう人たちは、いちいち見舞みまいのことばをおくった。

「怪我けがはどないでござんす。あんじよりました」

先生のほうもいちいちあいさつをかえした。

「ありがとうございます。そのせつは、お米をいただいたりしまして、すみませんでした」

「いいえ、めつそうな。ほんの心もちで」

すこしゆくと鋤くわをかついだ人が、はちまきをはずしかかっている。同じような見舞いを聞いたあと、

「こないだはどうも、きれいなそら豆をありがとうございます」

すると、その人は少し笑つて、

「いやア、うちは、胡麻ごまをあげましたんじや」

じぶんの馬鹿ばかし正直しょうじきさに気がつき、これからは米とも豆ともいわないことにきめた。わずか一学期だけのことだったので、一年生の父兄のほかはよく顔もおぼえていなかったの

だ。そのつぎに出あった、漁師らしい風体の人を見ると、魚をくれたのはこの人かと思ひ、用心しいしい、頭をさげた。

「こないだは、けつこうなお見舞いをありがとうございます」

するとその人は、きゆうにあわてだし、

「いや、なに、ことづけようと思つたんですが、つい、おくれてしても、まにあいませなんだ」

先生のほうも同じようにあわてて、赤い顔になり、

「あら、どうも失礼しました。思いちがいましたの」

これが以前だったら、女先生は見舞いを催促したといわれるところだったろう。行きすぎると子どもたちが笑いだし、その中の男の子が、

「先生、清六さん家は、人にもはやったためしが無いのに。もらうだけじゃ。山へ仕事に行とつてしようべんしとうなつたら、どんな遠うても、わが家の畑までしにいく人じゃもん」

わあとみんなが笑つた。その話はまえにもいちど聞いたことがあつた。四年生にいるその息子が、組でひとりだけ、どうしても音楽帳をもつてこなかつた、そのときである。い

つも忘れてくるのかと思つてただすと、泣きそうになつてうつむいた。するとならんいでいた生徒が、かわつて答えた。

「歌をなろうても銭ぜにもうけのたしにはならんいうて、買こうてくれんのじゃ」

つぎの唱歌しょうかのとき、清せい一いちというその子に音楽帳をやると、うれしそうに受けとつたことを思いだした。彼は、教科書まで全部、他人の使い古しをもらつていた。しかも村で二番目のしんしよ持ちだというのだ。そこに清一のいないことで、ほつとしてゐる先生へ、

「せんせ足、まだ痛いん？」

まつさきにきいたのは仁太にたである。もう松葉杖ではなかつたにしろ、やつぱりびっこをひいてゐるのを見ると、仁太はうたてかつたのであろう。

「せんせ、まだ自転車にのれんの？」

こんどは小ツルだった。

「そう、半年ぐらいしたら、のれるかもしれん」

「そんなら、これから、船でくるん？」

ソんキの質問にだまつて顔をふると、コトエがおどろいて、

「へえ、そんなら、歩いて？ あんな遠い道、歩いてエ？」

コトエにとつては忘れられない二里の道だったのだろう。空腹と心配でまっさきに泣きだしたコトエである。仲間はずれになりたくないばかりに、本の包みを敷にかくして出かけたコトエは、船で送りとどけられたときにも、ひとり気がふさいでいた。どんなに叱られるかと、びくびくしていたのだ。しかし、迎えに出ていたおぼんは、どここの親たちよりもまっさきに、船にアユミのかかるのもまちきれず、じゃぶじゃぶと海の中へはいってゆき、どの子よりもまっさきにコトエを船から抱きおろしたのである。まるでがいせん将軍のように晴れがましくアユミをわたる子どもらとそれを迎える親たちのなかで、コトエとおぼんだけは泣いていた、敷へまわつて本包みをとつてもどりながら、もうそのときは二人ともふだんの顔になつて話しあつた。

「これからは、だまつてやこい行つたらいかんで。ちゃんと、そういうて行かにや」

「そういうたら、行かしてくれへんもん」

「そうじゃなア、ほんにそのとおりじゃ。ちがいない」

おぼんはふるえるような力のない笑い声でわらい、

「でもな、なにがなんでも飯だけはたべていかんと、からだに毒じゃ」

そういわれてコトエは、先生の家でごちそうになつたキツネうどんを思いだした。思い

ただただでも唾つばが出てくるほどうまかったキツネうどん。空腹はキツネうどんの味を数す倍ばいにしてコトエの味覚みかくにやきついていた。

その後も彼女は、何度かキツネうどんの話をしては、大石先生を思いだし、先生を思いだしてはキツネうどんを思いうかべた。思いがけず先生がやってきた今、彼女はまた、あの遠い道とキツネうどんを思いだしながら、聞いたのである。あんな遠い道を、歩いてエ？ と。しかし、コトエでなくとも、子どもらは、今日きょうの先生を、ふたたび学校へむかえたものと考えていた。だれもうたがおうとしない態度たいどを見ると、先生は、上じょうりく陸第一歩で今日の目的をはつきりさせるべきだったと思った。

お別れにきたのよう……

そう叫さけびながら船をおりたら、そくぎにそのような雰囲気ふんいきが生まれたろうにと、くやみながら、コトエのことばにしがみつくようにして、ゆっくりといった。

「ね、遠い遠い道でしょ。そこを、ひよこたん ひよこたん と、ちんばひいて歩いてくると、日がくれるでしょ。それでね、だからね、だめなの」

それでも子どもたちにはさっしがつかなかった。網元あみもとの森岡正もりおかただしが、正らしい考えで、

「そんなら先生、船できたら。ぼく、毎日迎えにいつてやる。一本松ぐらい、へのかっぱじゃ」

正は近ごろ櫓ろがこげるようになり、それが自慢じまんなのであった。先生も思わずにこにこして、

「そうお、それで夕方ゆうがたはまた、送つてくれるの？」

「うん、なあ」

あとをソソキにいったのは、少し不安でソソキに加勢かせいを求めたものらしい。ソソキも、うなずいた。

「そう、ありがとう、でも、困ったわ。もつと早くそれがわかってたらよかったのに、先生もう、学校やめたの」

「……………」

「今日は、だからお別れにきたの。さよなら、いいに」

「……………」

みんなだまっていた。

「べつのおなご先生が、すぐきますからね、みな、よく勉べんきよう強きようしてね。先生、とつても

岬みさきを好きなんだけど、この足じやあ仕方がないでしょ。また、よくなったら、くるわね」

みんな一せいにうつむいて先生の足もとを見た。早苗が目に一ぱい涙なみだをため、それをこぼすまいとして、目を見ひらいたままきらきらしている。感情をなかなかことばにしな
い早苗のその涙を見たたん、先生の目にも同じように涙がもりあがってきた。と思うと、
きゆうに蜂はちの巣すにでもさわったように、わあつと泣きだしたのはマスノだった。するとコ
トエやミサ子や、気の強い小ツルまでが、しくしくやりだした。泣き声の合唱である。岬
分教場の古びた門もんざつ札はのかかった石の門の両側に、大きな柳やなぎと松の木がある。その柳の木
の下で、三十四、五人の生徒にとりまかれて、女先生もまたかまうことなく涙をこぼした。
マスノの音頭おんどがあんまり大げさだったので、吉次や仁太まで泣きそうになり、それをがま
んしているふうだった。大きな生徒のなかにはおもしろそうに見ているものもいた。職員
室の窓からその光景を見ていた男先生は、古ぐつの先さきがわ革がわだけをのこした上ばきをつっか
けてとんできたが、わけをきくと、

「なんじゃあ、おなご先生がせっかくおいでたんだから、笑うてむかえんならんのに、み
んなはでに泣くじゃないか。さ、どいたどいた。おなご先生、早く中へおはいりなさい」
しかしだれひとり動こうとはせず、しくしくつぶけた。

「やれやれ、女子と小人はなんとかじや。泣きたいだけ泣いてもらお。泣きたいものは、なんぼでも泣け泣け」

古ぐつの上ばきをぽつく。ぽつく音させて男先生が去りかけると、はじめてみんなは笑いだした。泣け泣けといわれたのがおかしかったのだ。

始業の板木が鳴りわたり、いよいよ今日の勉強もはじまるわけだ。そのはじめに別れのあいさつをして帰るはずの大石先生であったが、別れのことばをいったあと、なにかに引っぱられるようにして、一、二年の教室へはいった。久しぶりの女先生に、みんなうきうきした。

「じゃあ、この時間だけ、いつしよにべんきようしてお別れにしましょうね。算数だけど、ほかのこともいいわ。なにしよう？」

はい はい と手があがり、まだ名ざしをしないうちにマスノが、
「唱歌」

と叫んだ。歓声と拍手がおこった。みんなさんせいらしい。

「浜で歌うたう」

わあつと、また、ときの声があがる。

「せんせ、浜で歌うたう」

マスノがひとりで音頭おんどをとっている。

「じゃあ、男先生にそいつて、浜まで送つてきてね。船がまつてるから」

パチパチと拍手がおこり、机つくえががたがた鳴った。男先生に相談すると、それならみんなで送ろうということになった。びつこの大石先生をとりまくようにして十二人の一年生が先頭を歩いた。一ばんしんがりの男先生は、怪我けがの日以来ほこりをかぶっている女先生の自転車を押していった。道で出あった村の人も浜までついてきた。

「こんどは、泣きつこなしよ」

大石先生はひとりひとりの顔をのぞきながら、

「さ、指きり、マアちゃんも泣かないでね」

「はい」

「コトちゃんも」

「はい」

「早苗さんも」

「はい」

これだけが一ばん泣き虫だから、これだけ指きりしたから、もうだいじょうぶ——
ひとりひとりの小さな指にちかいながら、浜へくると、仁太が大声で、

「なに、歌うん？」

と、マスノの顔を見た。

「ほたるひかり蛍の光だ、そりやあ」

男先生がそういつたが、一年生はまだ蛍の光をならっていないなかった。

「そんなら一年生も知つとる歌、『学べや学べ』でもうたうかい」

男先生はじぶんの教えた歌を聞いてもらいたかった。しかしマスノがいち早く叫んだ。

「山のからす」

彼女はよほど「山のからす」がお気にいりらしかった。そしてもう、まつさきに、うた
いだしたのだ。

山のからすが もつてきた

あかい小さな じょうぶくろ

まだやつと一年生なのに、彼女の音頭おんどとりはなれきっていた。天才とでもいうようなものであろうか。ちゃんと、みんなをあとについて歌わせる力があつた。

あけてみたらば 月の夜に

山がやけそろ こわくそろ

村の人も大ぜい集まってきた。あいさつをした。大石先生もいつしよに歌いながら、船にのりこんだ。

へんじかこうと 目がさめりや

なんのもみじの 葉がひとつ

くりかえし歌って、いつかそれもやみ、しだいに遠ざかる船にむかつて呼びかける声も細りながら、いつまでもつづいた。

「せんせえ——」

「また、おいでえ」

「足がなおつたら、またおいでえ」

「やくそく、したぞオ」

「やくそく、そくしたぞオ」

最後に仁太の声で、あとはもう、ことばのあやもわからなくなった。

「かわいらしいもんじやのう」

船頭せんとうさんに話しかけられて、はじめて我れにかえりながら、しかし目だけは、まだ立

ちさりかねている浜べの人たちからはなさずに、

「ほんまに、みんな、それぞれ、えい人ばかりでのう」

「昔から、ひちむつかしい村じやというけんどのう」

「そうよの。そんな村は、気心がわかったとなると、むちやくちやに人がようでのう」

「そんなもんじや」

つよい日ざしと海風に顔をさらしたまま、もう胡麻粒ごまつぶほどにしか見えない人の姿とともに、岬みさきの村を心の中にしみこませるように、いつまでも目をはなさなかつた。櫓ろの音だけの海の上で、子どもたちの歌声は耳によみがえり、つぶらな目の輝かがやきはまぶたの奥おくに消え

なかつた。

五 花の絵

海の色も、山の姿も、そっくりそのまま昨日きのうにつづく今日きょうであつた。細長い岬の道を歩いて本校にかよう子どもこどもの群れも、同じ時刻じこくに同じ場所を動いているのだが、よく見ると顔ぶれの幾人いくにんかがかわり、そのせいとか、みんなの表情もあたりの木々の新芽しんめのように新鮮しんせんなのに気がつく。竹たけ一いちがいる。ソソキの磯いそ吉きちもキッチンキッチンの徳田吉次とくだきちじもいる。マスの早苗さなえもあとからきている。

この新しい顔ぶれによつて、物語のはじめから、四年の年月が流れさつたことを知らねばならない。四年。その四年間に「一億同胞いちおくどうほう」のなかの彼らの生活は、彼らの村の山の姿や、海の色と同じように、昨日きのうにつづく今日きょうであつたろうか。

彼らは、そんなことを考えてはいない。ただ彼ら自身の喜びや、彼ら自身の悲しみのみならず、彼らはのびていった。じぶんたちが大きな歴史の流れの中に置かれていとも考えず、ただのびるままにのびていた。それは、はげしい四年間であつたが、彼らのなかの

れがそれについて考えていたろうか。あまりに幼い彼らである。しかもこの幼い者の考えおよばぬところに、歴史はつくられていたのだ。四年まえ、岬の村の分教場へ入学したその少しまえの三月十五日、その翌年彼らが二年生に進学したばかりの四月十六日、人間の解放を叫び、日本の改革を考える新しい思想に政府の圧迫が加えられ、同じ日本のたくさんの人びとが牢獄に封じこめられた。そんなことを、岬の子どもらはだれも知らない。ただ彼らの頭にこびりついているのは、不況ということだけであった。それが世界につながるものとはしらず、ただだれのせいでもなく世の中が不景気になり、けんやくしなければならぬ、ということだけがはつきりわかっていた。その不景気の中で東北や北海道の飢饉を知り、ひとり一銭ずつの寄付金を学校へもっていった。そうした中で満州事変、上海事変はつづいておこり、幾人かの兵隊が岬からもおくり出された。そういうのはげしい動きのなかで、幼い子どもらは麦めしをたべて、いきいきと育った。前途に何が待ちかまえているかをしらず、ただ成長することがうれしかった。

五年生になつても、はやりの運動靴を買ってもらえないことを、人間の力ではなんともできぬ不況のせいとあきらめて、昔ながらのわらぞうりに満足し、それが新しいことで彼らの気持はうきうきした。だからただひとり、森岡正のズックを見つけると、みん

なの目はそこにそそがれてさわいだ。

「わア タンコ、足が光りよる。ああばば（まぶしいこと）」

いわれるまえから正は気がひけていた。はいてこなければよかつたと後悔こうかいするほど恥ずかしかつた。女のほうでは小ツルがひとりだった。靴は、足をかわすたびにぶかぶかとぬげそうになった。小ツルはどうとうズツクを手にもつて、はだしになり、うらめしそうに靴をながめた。六年生の女の子がじぶんのぞうりと取りかえてやりながら、大声で、

「わあ、十文半ともんはんじゃもん、わたしにでも大きいわ」

おそらく三年ほどもたせるつもりで買ってやったのだろうが、小ツルはもうこりこりしていた。ぞうりのほうがよつほど歩きよかつたのだ。ほつとしている小ツルに、松江は笑いかけ、

「な、コツやん、べんとが、まだ、ここで、ぬくいぬくい」

そういつて腰こしのあたりをたたいてみせた。

「百合ゆりの花の弁当箱？」

小ツルが、いつ買ったのだ、という顔で問うのを、松江は気弱くうけ、

「ううん、それは明日あしたお父とつつあんが買うこてきてくれるん」

そういつてしまつて、松江ははつとした。三日前のことを思いだしたのだ。ミサ子もマスノも、ふたに百合の花の絵のあるアルマイトの弁当箱を買つたと聞いて、松江は母にねだつた。

「マアちゃんも、ミイさんも、百合の花の弁当箱買ったのに、うちもはよ買つておくれいの」

「よしよし」

「ほんまに、買つてよ」

「よしよし、買つてやるとも」

「百合の花のど」

「おお、百合など菊きくなど」

「そんなら、はよチリリンヤへたのんでおくれいの」

「よしよし、そうあわてるない」

「ほたつて、よしよしばかりいうんじやもん。マツちゃん、チリリンヤへいつてこうか」
それではじめて彼女の母はしんけんになり、こんどはよしよしといわずに、少し早口で、
「ま、ちよつとまつてくれ、だれがぜにはらうんじや。お父つあんにもうけてもろてからで

ないと、赤恥あかはしかかんならん。それよか、お母さんがな、アルマイトよりも、もつと上等のを見つけてやる」

そういつてその場を流されたのだが、松江のためにさがしだしてくれたのが、古い昔の柳行李やなぎこづりの弁当入れとわかると、松江はがっかりして泣きだした。今どき柳行李の弁当入れなど、だれも持つていないことを、松江はしつていたのだ。世の中の不況ふきょうは父の仕事にもたたつて、大工だいくの父が、仕事のない日は、草とりの日ようにまでいつているほどだから、弁当箱一つでもなかなか買えないこともわかっていた。しかし松江は、どうしてもほしかったのだ。ここで柳行李をうけいれたら、いつまでたつても百合の花の弁当箱は買ってもらえないということ、松江は感じて、ごねつづけ、とうとう泣きだしたのである。しかし母親もなかなかまけなかった。

「不景気なんだから、ちつとがまんしい。来月になつて、景気がよかつたら、ほんまに買おうじゃないか。なあ、マツはいちばん大きいから、もつと聞き分けいでどうすりゃ」

それでも松江はしくしく泣いていた。いつやむともしれないほど、しんねり泣きつづけるのは、よほどの思いにちがいない。そのままつづけばいつやむともしれぬ泣きぶりであったが、やがて、泣くどころではないことがおこつた。彼女の母は、きりつとした声でい

った。

「マツ、弁当箱はきつと買うてやる。指きりしてもええ。そのかわりおまえ、産婆さんばさんとこへ、ひとつ走りはしいってきてくれや。大急ぎできてつかあされ、いうてな。行きしなに、よろずやのばあやんにも、ちよつときてもろてくれ。こんなはずないんじやけんど、おかしいな」

あとのほうはひとり言のようにいって、納戸なんどにふとんをしきだした母親を見ると、さすがに松江も泣きやみあわてて家をとびだした。小さいからだをツブテのように走らせながら、彼女の心には一つのたのしみがふくらんできた。それは指きりしてもよいといった母のことばだった。産婆さんばさんの家は本村のつつきにあつた。帰りは途とちゆう中まで自転車にのせてくれ、少し上り坂のぼのところまでくると、年とつた産婆さんは自転車をとめ、

「おまえは、ここでおりてくれ。一刻も早ういかんならん」

松江はこつくりして、自転車のあとから走った。自転車はみるみる遠ざかり、すぐに山の中へ消えていった。大石先生の自転車いらい、女の自転車もようやくはやりだして、今ではもう珍めずらしくはなかつたが、それだけに走りさつた産婆さんの自転車を見て、毎日朝早く起きて、てくてく、町まで歩いて仕事にゆく父親にも、自転車ががあれば、どれほど助

かるかと、ふと思つた。

走つて帰ると、もう赤ん坊は生まれていた。いそがしそうに襷たすきがけで水をくんでいたよ
ろずやのお婆さんは、松江を見るなりいった。

「マツちゃんよ、お前、えらからうが、大いそぎで釜かまの下たいておくれ」

バケツのまま釜に水をあけてから、小声で、

「こんまい女の子じゃ。月たらずじゃといな。でも、ええじゃないか、なあマツちゃん。
また女でお父とつつあんはうんざりしようけんど、女の子はええ。忠義はできんけんど、十年
もたつたら、マツちゃんじゃつて、どない出世するかしれたもんじゃない」

なんの意味がよくわからぬまま、松江は釜の下をたきつづけた。母親になにかことがあ
ると、年よりのいない松江の家では、小さいときから松江がかまどに立たねばならなかつ
た。

それから三日目、はじめて弁当をもつて本校へゆく松江は、納戸なんどにねている母親に注意
されながら、湯気ゆげの出ている御飯を釜から弁当箱につめた。

「お父つあんのは、両行李りょうりぎゆうぎゆうにつめこんであげよ。お前のは軽くいれてな、な
にせ、大きい弁当箱じゃもん。梅干うめぼしは見えんほど御飯の中に押しこまにや、ふたに穴が

あくさかい」

血の道がおこりそうだといって、しかめ顔に、手ぬぐいではちまきをしてねている母を、幼い松江は気にもかけず、

「お母さん、百合の花の弁当箱、ほんまに買うてよ。いつ買うてくれるん？」

「お母さんが、起きれたら」

「おきれたら、その日に、すぐに？」

「ああ、その日に」

松江はうれしくて、今日借りてもってゆく父親のアルミの弁当箱の大きさも気にかからなかった。松江ぐらいの女の子なら、三人分はゆうにはいる大きな、深い弁当箱が、学校の教室ではどれほどこっけいに見えるかを、彼女は考えなかった。柳行李やなぎこしりよりはそのほうがよいと思つたのだ。それどころか、からだにたわってくる弁当のぬくみは、彼女の心をほかほかと温めつづけていた。小ツルの問いに、思わず、明日あしたと答えただけれど、明日は買ってもらえない。しかし、あさつては買ってもらえるかもしれないと考えると、彼女はひとり笑えてきた。こんな、温かい気持で出かけていった松江であった。松江にかぎらず、みんな何かしらうれしがっていた。マスノは新しいセーラー服をきて自慢じまんらしか

つたし、コトエはおぼんの作っておいてくれたぞうりの鼻緒はなおに赤いきれのないこんでいるのがうれしそうだった。まるで大学生の着るようなこまかいさつまがすりの裕あわせをきせられている早苗は、赤いはっかけ（すそまわし）を気にして、ときどきうつむいて見ている。じみなその着物を人に笑われないうちに、早苗の母はいつたのである。

「なんと、じみすぎておかしいかと思うたら、赤いはっかけでひきたつこと。そんでまた、これが早苗に似合うというたら。この着物きたら、かしこげに見えるわ。裾すそにちろちろ赤いのも見えて、みごとい、みごとい。よかつたア」

これだけほめられると、早苗は正直にそれを信じこんだ。着物をきているのはコトエと二人ふたりだけで、コトエもまた母親のだったらしい黒っぽい、飛び模様のある綿めんめいせんをきていた。本裁ほんだちそのままらしく、腰こしあげも肩かたあげももりあがっている。しかし彼女のじまは、先鼻緒さきはなおに赤いきれのついたぞうりの方だった。藪やぶのそばの草むらを通るとき、コトエだけは、ふつと、大石先生を思いだし、一本松のほうを見た。

「小石先生！」

親したしく、心の中でよびかけたつもりなのに、まるでそれが聞こえたかのように、小ツルがよってきた。

「小石先生のこと、知つとん？」

「なに？」

知らないとわかると、こんどは早苗に、

「知つとん？ 早苗さん」

小ツルは大声で、ぐるぐると見まわし、

「みんな、小石先生のこと、知つとるか？」

ニユースは、いつだつて小ツルからである。みんなは思わず小ツルをとりまいた。得意の小ツルは、れいのおり篠しので切つたような細い目を見はり、見はつてもいっこうひろがらない目でみんなを見まわし、

「小石先生な、あのな、エイコトコトコトコンペイト」

そしてマスノの耳にくしゃくしゃとささやいた。二人だけの自慢じまんにしよとしたのに、マスノはすつとんきように叫さけんだ。

「わあ、嫁よめさんにいったん！」

小ツルは、まだあるんだとばかりに、

「な、ほてな、あのな」と、わぎとゆうゆうになり、「シンコンレンコン（新婚旅行）な

あ、おしえてやろうか」

「うん」

「うん」

「こがつくとこ。んがつくとこ。ぴがつくとこ。らがつくとこ」

「わかった、こんぴらまいり」

「そう」

わあつと声があがった。百メートルほど先になった上級生の男の子たちがふりかえつたが、そのままいつてしまうと、みんなもとつとと、そのあとを追いながら、口だけはやかましく小石先生の噂うわさをした。それはおとこのこと、昨日きのう小ツルの父が聞いてきた話だということもわかった。嫁よめにいったとすれば、小石先生はもう学校をやめるのではなからうかというのがマスノの意見だった。小ツルがそれにさんせいし、小林先生も、嫁にいくのでやめたと、記憶きおくのよいところをみせた。そしてまた、やめてもらいたくないという希望をいち早く口に出したのもマスノであった。めずらしく早苗さなえとコトエがさんせいした。早苗がコトエに、

「小石先生、も一ぺんあいたいもんなあ」

「うーん。いつかしらん、うどん、うまかったなあ」

コトエがいった。みんなはそれで、四年前のことをはつきり思いだした。その小石先生が、今日学校きょうにきているかどうかは、みんなにとつて大問題になってきた。みんなの足は、知らずしらず早くなった。なかば走りながらマスノは、

「かけしようか、小石先生きとるか、きとらんか」

「しよう、なにかけるん？」

うてばひびく早さで、小ツルが応じた。

「まけたら、ええと、ええと、すつぺ（しつぺい）五つ」

森岡正がそういうと、マスノは右手を高くあげながら、

「すつぺ五つなら、まけてもええわ。うち、先生きーとる」

「うちも」

「うちも」

なんのことはない、みんな小石先生が来ているというのだ。とうとうかけはながれたまま、学校へ近づいた。さすがに新入生の五年生はきまじめな顔をして校門をくぐった。ひよいと見ると職員室の窓から小石先生がこちらを見ている。おいでおいでと手をふられる

と、みんなはそのほうへ走っていった。

「もうくるか、もうくるかと思つて、まつてたのよ。ちよつとまつて」

そういつて出てきた小石先生は、歩きながらみんなを土手どてのほうへつれていった。

ひとりひとりの顔を見ながら、

「大きくなつたじゃないの。今に先生においつくわ。あら、小ツやんなんか、追いこしそ
うだ」

小ツルに肩をならべ、

「へえ、まけた。でもしようがない、小石先生だもんね」

みんな笑つた。

「あんたらが小石先生といつたもんで、いつまでたつても大石先生になれないじゃないの」
また笑つた。笑いはするが、だれもまだ、なんともいわない。

「いやに、おとなしいのね。五年生になつたら、こんな、おとなしくなつたの」

それでもここにこしているだけなのは、小石先生が、なんだかまえと少しかわつて見え
たからだつた。色も白くなつているし、そばにくると、スミレの花のようにいいにおいが
した。それは嫁よめさんのおいだというのを、みんなは知っていた。

「せんせ」

マスノがやつと口をきつた。

「先生、唱歌おしえてくれるん？」

「そう。唱歌だけじゃないわ。あんたたちの受けもちよ、こんど」

わあつと歓声^{かんせい}があがり、きゆうにうちとけてしゃべりだした。先生、先生とだれかが呼びつづける。呼びつづけながら岬^{みさき}の村のいろんなできごとが、その海の色や風の音までつたわつてくるようにわかつた。コトエのうちでは最近、おばあさんが卒^{そつちゆう}中でなくなり、ソんキのお母さんはリヨウマチで寝^ねこんでいるという。早苗のおでこのかすりきずは、ついこないだ、ミサ子と二人で肩をくんでスキップで走っていて、道路から浜におちたときの怪我^{けが}だとわかつたし、キツチンの家では豚^{ぶた}が三匹も豚コレラ^{とん}で死んでしまい、お母さんが寝こんだ、などと話はつきなかつた。

小ツルは、先生のからだをつかまえて、ゆすぶり、

「先生、仁太^{にた}、どうしてこなんだか？」

「あ、それ聞こう聞こうと思つてたの。どうしたの。病気？」

すぐには答えず、みんな顔見あわせて笑っている。先生もつられて笑いながら、これは

きつと仁太が、とつぴようしもないことをしでかしたにちがいないと、ふと思った。

「どうしたのよ。病氣じゃないの？」

早苗の顔を見ていうと、早苗はだまっつかぶりをふり、目を伏ふせた。

「らくだい」

ミサ子が答えた。

「あら、ほんと？」

おどろいている先生を、笑わせようとしてもするように小ツルは、

「いつも、はな、たらしとるさかい」

みんなは笑ったが、先生は笑わなかった。

「そんなことそよ。はなたらして落第らくだいなら、みんな一年生のとき落第したわ。病氣か

なんかで、たくさん休んだんでしょ」

「でも、男先生がそういうた。はなたれもしだいくくりというのに、仁太は四年生になつてもはなたれがなおらんから、も一ぺん四年生だつて」

小ツルの話に、みんながツンツンはなをすすった。それには先生もちよつと笑ったが、すぐ、心配そうな顔になった。始業のかねが鳴ったので、みんなと別れた先生は、職員しよくい

室んしつにもどりながら、仁太のときり考えていなかった。かわいそうにとつぶやいた。落第した仁太が、弟の三吉と同級生になつてもう一度やりなおす四年生を思うと、気持がくもつてきた。はなたれもしだいおくりと、ほんとに男先生がいったとしたら、仁太を四年生にとどめることこそ、はなをたれつばなしにさせておくことのように思ったのだ。あのからだの大きな仁太のむじやきさが、それで失われるとしたら、仁太の一生についてまわる不幸のように思えて、今日きょう、ひとりとり残された仁太のさびしさが、ひしひしとせまつてきて、またくりかえした。

はなたれも しだいおくり

はなたれも しだいおくり

仁太はどうしてとり残されたろう。

それを竹一にでももういちど聞こうと思つた大石先生は、お昼休みの時間をまつて、そとへ出た。運動場の見わたせる土手どての柳やなぎの下に立つと、竹一は見あたらず、まっさきにとらえたのは松江だった。松江はなぜかひとり校舎の壁かべにもたれてしょんぼりしていた。ま

ねくと土手の下まで走ってきて、そっくりそのまま母親に通じる目で笑った。手をのばすと、ますます母親似の顔をして、きまりわるそうに引っぱりあげられた。仁太のことをきこうとする先生ともしらず、松江は、じぶんひとりの氣づまりさからのがれようでもするのように、せつぱつまった声で呼びかけた。

「せんせ」

「なあに」

「あの、あの、うちのお母さん、女の子うんだ」

「あらそう、おめでとう。なんて名前？」

「あの、まだ名前ないん。おとつい生まれたんじやもん。あした、あさって、しあさって」と、松江は三本の指をゆつくりと折り、

「六日ぎり（名付日）。こんど、わたしがすきな名前、考えるん」

「そう、もう考えついたの？」

「まだ。さつき考えよったん」

松江はうれしそうにふつと笑い、

「せんせ」

と、いかにもこんどは別の話だというふうによびかけた。

「はいはい。なんだかうれしそうね。なあに」

「あの、お母さんが起きられるようになったら、アルマイトの弁当箱、買ってくれるん。ふたに百合ゆりの花の絵がついとる、べんと箱」

すうつとかすかな音をさせていきを吸すい、松江は顔いっぱいによろこびをみなぎらせた。

「あーら、いいこと。百合の花の絵がついとるの。ああ、赤ちゃんの名前もそれなの？」
すると松江は、恥はじらいとよろこびを、こんどはからだじゅうで示すかのように肩かたをくねらせて、

「まだ、わからんの」

「ふーん。わかりなさいよ。ユリちゃんにしなさい。ユリコ？ ユリエ？ 先生、ユリエのほうが好きだわ。ユリコはこのごろたくさんあるから」

松江はこつくりうなずいて、うれしそうに先生の顔を見あげた。松江の目がこんなにもやさしいのを、はじめて見たような気がして、先生はその長いまつ毛におおわれた黒い目に、じぶんの感情をそそいだ。仁太のことはもう、ひとまず流して、心はいつかなごんできた。松江にとつてもまた、その数倍のよろこびだった。先生にいわなかったけれど、お

昼の弁当のとき、松江は大きな父の弁当箱を、小ツルやミサ子から笑われたのである。それで、彼女はひとりみんなからはなれていたので。しかし今は、そのしよげた気持も朝露あさつゆをうけた夏草のように、元気をもりかえした。じぶんだけが、とくべつに先生にかまわれたようなうれしきで、これはないしよにしておこうと思った。だのにその日、帰りで彼女はつい口に出してしまった。

「うちのねね、ユリエって名前つけるん」

「ユリエ？ ふうん、ユリコのほうが気がきいとら」

はねかえすように小ツルがいった。松江は胸をはって、

「それでも、小石先生、ユリエのほうがめずらして、ええっていうた」

小ツルはわざととびあがって、

「へえ、なんで小石先生が。へえ！」

なにかをさぐりあてようとしてもするような目で松江の顔をのぞきこみ、

「あ、わかった」

ならんでいたミサ子をうしろの方へ引っぱって行って、こそこそささやいた。富士子、早苗、コトエとじゅんじゅんにその耳に口をよせ、

「なあ、そうじゃな」

おとなし組の三人は小ツルの言い分にさんせいできないことを、きよわ気弱な無言であらわすばかりで、松江を孤立こりつさせようとした小ツルのたくらみはくずれてしまった。よく気のあうマスノが、今日は母の店きようによつて、ここにいないのが小ツルの弱さになつていた。彼女はみんなに、松江がひいきしてもらうために、ひとりで小石先生にへつらつたといったのである。そのためにかえつてじぶんから孤立した小ツルは、ひとりふきげんにだまりこんで、とつとと先を歩いていった。みんなもそのあとからだまつてついていった。

一つはなをまがつたときである。前の小ツルがきゆうに立ちどまつて海のほうをながめた。先にたつものにならう雁がんのように、みんなも同じほうを見た。小ツルが歩きだすとまた歩く。やがて、いつのまにかみんなの視線しせんは一つになつて海の上うへにそそがれ、歩くのを忘れてしまった。

はじめから小ツルは知つていたのであろうか。それともたつた今、みんなといつしよに気づいたのであろうか。静かな春の海を、一その漁船いさぶねが早櫓はやろでこぎわたつていた。手ぬぐいで、はちまきをしたはだかの男が二人、力いっぱいのかっこうで櫓ろを押している。二に丁櫓ちやうろのあとが、幅はばびろい櫓足ろあしをひいて、走るように対岸の町をさして遠ざかつてゆく。

だ。もうけんかどころでなかった。

なんじやろ？

だれのうちのできごとじやろう？

みんな目を見あわした。消え去りつつ新らしくひかれてゆく櫓足から、岬みさきの村に大事件が突とつ発ぱつしたことだけがわかった。急病人にちがいない。船の胴どうの間にひろげたとんが見られ、そこにだれかがねかされているとさつした。しかし、またたくまに船は遠ざかり、乗りこんでいる人の判別はんべつもつかなかった。まるでそれは、瞬しゆん間の夢ゆめのように、とぶ鳥のかげのようにすぎた。だが、だれひとり夢と考えるものはいなかった。一年に一度か二年に一度、急病人を町の病院へ運んでゆく岬みさきの村の大事件を、さかのぼって子どもたちは考えていた。かつて小石先生もこうして運ばれたのだ。怪我けがをしたか、急性せうせいの盲腸もうちようえい炎えんか。

なんじやろう？

だれぞ盲腸の人、おったかいや？

あとから追いついてきた男の子もいつしよにかたまって評定ひようじようした。女はだれも声をたてず、男の子がなにかいうたびにその顔に目をそそいだ。そんななかで松江はふと、今け

朝家を出かけるときの母の顔を思い浮かべた。瞬間、黒いかげのさしたような不安にとらわれたが、そんなはずはないのだと、つよくうち消した。しかし、頭痛がすると顔をしめ、手ぬぐいできつくきつくはちまきをした、その結び目のところの額ひたいによつていた、もりあがつた皺しわを思い出すと、なんとなく払いはらいきれぬ不安がせまつてきた。はじめに、今日は父に休んでもらいたいといった母、しかし父は仕事を休むわけにはいかなかった。

「松江を休ませりや、ええ」

父が、そういうと、そんならええといい、松江にむかつて、

「学校、はじめてなのになア。だけんど、遊ばんともどつてくれなあ」

思いだして松江はどきどきしてきた。するといつのまにか足は、みんなの先を走りだしていた。ほかの子どもももついで走った。足がもつれるほど走りつづけて、ようやく岬の家や並なみを見たときには、松江のひざはがくがくふるえ、肩かたと口とでいきをしていた。村のつつきがよろずやであり、そのとなりのわが家に、おしめがひらひらしているのを見て、安心したのである。しかし、その安心で泣きそうになった彼女は、こんどは心臓がとまりそうになった。井戸ばたにいるのが母ではなく、よろずやおばさんだと気がついたからだ。はずんだ石ころのように坂道をかけおりた松江は、わが家の敷居しきいをまたぐなり、走つてき

たそのままの足のはこびで、母のねている納戸なんどにとびこんだ。母はいなかった。

「お母さん……」

ひっそりとしていた。

「おかあ、さん」

泣き声になった。よろずやのほうから赤ん坊の泣くのが聞こえた。

「うわあ、わあ、おかあさーん」

力のかぎり大声で泣き叫ぶさけ松江の声は、空にも海にもひびけとばかりひろがっていった。

六 月夜の蟹かに

五年生の教室は川つぶちに新らしく建たった校舎のつつきであった。川にむかった窓からのぞくと、衽おくみのような形の、せまい三角地をはさんで、高い石垣いしがきは川床かわどこまで直角に築かれていた。危険防止の土手どては地面から三尺ほどの高さでめぐらしてあったが、土手どてはあまり用をなさず、子どもらはわずかな遊び時間をもかってに石垣をつたって、川の中へおりていった。おもに男の子だった。川上に家は一軒もなく、ちろちろの水はきれいだった。

た。山から流れてきてはじめて、ここで人の肌はだにふれる水は、おどろくほど、つめたく澄すみきつていた。子どもらにとつては、ただ手足をふれているだけで、じゅうぶん満足のできる、こころよい感かん触しよくであった。水はここではじめて人の手にふれ、せきとめられて濁にごった。だれがいいだったのか鰻うなぎがいるという噂うわさがたつてから、子どもたちの熱意は川底かわぞこに集まり、毎日土手どての見物と川の漁師とのあいだで時ならぬやりとりがつづいた。川床かわどこの石をめぐつては、まだ一度もとれたことのない鰻をさがしているのだが、出てくるのは蟹かにばかりである。それでもけっこうおもしろらしく、漁師も見物もふえるばかりだった。くるぶしをかくしかねるほどの水量は、遊び場としても危険はなく、だから小石先生もだまって眺ながめていた。

「せんせ、ズガニ あげよか」

保護色ほごしよくなのか泥色どろいろをして、足にあら毛のある蟹をつかまえて、うで一ぱいさし出したのは森岡正だった。

「いらん、そんなもん」

「たべられるのに、せんせ」

「いやだ、そんなもんだべたら、足や手にヒゲがはえるもの」

川底と土手からどつと笑い声がおこった。窓ぎわの先生ももちろん笑いころげたのだが、ついさつきまでの先生は、そんな笑いとは遠い気持で、窓の外にくりひろげられた風景を眺めていたのであつた。川の中でも土手の上でも、岬みさきの子どもらは知らず知らずかたまっていた。だが、そこに松江の姿は見る事ができない。その目に見えぬ姿が、ときどき先生の心を占せんり領りょうしてしまうのだ。

母親がなくなつてから、松江は一度もこの教室に姿をあらわさなかつた。窓ぎわの、前から三番目の松江の席は、もう二か月もからっぽのままである。入学の日のことを思いだして、百合ゆりの花の絵のついた弁当箱をみやげに松江の家をたずねたのは、彼女の母親がなくなつてからひと月ぐらいたつていた。ちやうど川本大工だいくも家において、男泣きに泣きながら、赤ん坊が死なないかぎり、松江を学校にはやれぬといつた。あまりに事情が明白めいはくなので、それでも松江を学校によこせとはいえず、だまつて松江の顔をみた。小さな赤ん坊をおぶつたまま、父親のわきにちよこんとすわつて松江もだまつていた。へんにまぶたのはれて見える顔は、頭のはたらきを失つたようにぼんやりしていた。その膝ひざの上へ、

「マツちゃん、これ、百合の花の弁当箱よ。あんたが学校にこられるようになったら、つかいなさいね」

あまりうれしそうにもせず、松江はこつくりをした。

「早く、学校へこられるといいわね」

いってしまつて、はつとした。それは赤ん坊に早く死ねということになるのだ。思わず赤くなつたが、松江たち父子には、はつきりひびかなかつたらしく、ただ感謝かんじやのまなざしでうけとられた。

まもなく、赤ん坊がなくなつたと聞き、松江のためにほつとしたのだが、松江はなかなか姿を見せなかつた。マスノヤコトエたちにようすをきいてもらちがあかず、先生はどう手紙をかいた。十日ほどまえになる。

——松江さん、赤ちゃんのユリエちゃんは、ほんとに かわいそうなことをしましたね。でももう それはしかたがありませんから、心の中でかわいがつてあげることにして、あなたは元気をだしなさいね。学校へは、いつからこられますか。先生は、まい日マツちゃんのからつぽのせきを見ては、マツちゃんのことを考えています。

早くこい こい マツちゃん。早くきて みんなといっしょに、べんきようしましょう。

手紙は松江の家といちばん近いコトエにことづけた。しかしこの手紙が、松江にとってどれほど無理な注文であるかを先生は知っていた。赤ん坊のユリエはいなくなっても、松江にはまだ弟妹ていまいが二人あった。五年生になったばかりの彼女は、幼い頭脳ずのうと小さなからだで、むりやり一家の主婦の役をうけもたされているのだ。どんなにそれがいやでも、ぬけだすことはできない。父親をはたらきに出すためには、小さな松江がかまどの下をたき、すすぎせんたくもせねばならぬ。ひよこのようにきょうだい三人よりあって、父親の帰りをまつているだろうあわれな姿が目の前にちらつく。法律ほうりつはこの幼い子どもおさなを学校にかよわせることを義務ぎむづけてはいるが、そのために子どもを守る制度はないのだ。

翌日、コトエは先生の顔を見るなり報告した。

「先生、きのうマツちゃん家くへ手紙をもつていったら、知らんよその小母さんおぼがきとつた。マツちゃんおりますか、いうたら、おりませんいうたん。しかたがないから、これマツちゃんにわたして、いうて、その小母さんにたのんできたん」

「そう、どうもありがとう。マツちゃんのお父さんは？」

「知らん。見えなんだ。——その小母さん、おしろいつけて、きれいで着物きとつた。マツ

ちゃん家へ嫁^{よめ}にきたんとちがうかつて、小ツルさんがいうんで

コトエはちよつとはにかみ笑いをした。

「そうだと、マツちゃんも学校へこられていいけどね」

それからまた十日以上たつたが、松江は姿を見せない。手紙はよんだろうかと、ふと心にかげのさす思いで、窓の下を見ていたのだった。ズガニを三匹とつた正は、それをあき缶^{かん}にいれて得々^{とくとく}として石垣^{いしがき}をのぼってきた。三角形の空地にある杏^{あんず}の木は夏にむかつて青々としげり、黒いかげを土手^{どて}の上におとしている。そのま下にかたまつて、岬組^{みさき}の女生徒たちはズガニの勇士を迎え^{むか}、われがちにいった。

「タンコ、一びきくれなア」

「うちにも、くれなア」

「わたしにもな」

「やくそくど」

蟹^{かに}は三匹なのに希望者は四人なのだ。正は考えながらあがつてきて、

「食うか、食わんのか」

みんなの顔を見まわした。食うものによろうと思つたのだ。いち早く小ツルが、

「食う食う。月夜の蟹は、うまいもん」

それをきくと、正はにやりとし、

「うそつけえ、蟹がうまいんは、やみ夜のこつちや」

「うそつけえ、月夜じゃないか」

「ああ聞いた、あ聞いた。月夜の蟹はやせて、うも（うまく）ないのに」

正が確^{かく}信^{しん}をもつていうと、小ツルもまけようとしな。同じように正の口まねで、

「ああ聞いた、あ聞いた。月夜の蟹がうまいのに。ためしに食うてみる、みんなくれ」

「いや、こんな川の蟹でわかるかい。海の蟹じゃのうて」

それをきくと女組がわあわあさわざたて、窓の先生にむかって口ぐちにきいた。

「せんせ、月夜の蟹とやみ夜の蟹と、どっちがおいしいん？」

「せんせ月夜じゃなあ」

マスノや小ツルやミサ子たちだった。

「さあ、ねえ。やみ夜のように思うけど……」

男組がわあつときた。

「ほらみい、ほらみい」

こんどは先生は笑いながら、

「でも、月夜のような気もする……」

女組が両手をあげ、とびとびしてよろこんだ。そうしてさわぐことがおもしろく、だれもそれを本気にして考えてはいなかったのだが、正だけは熱心に先生を見あげ、

「馬鹿ばかいうな先生！」

すると女組がまた、わあつときた。

「先生を馬鹿じやとい」

「ほう、タンコは先生を馬鹿じやとい」

正は頭をかき、みんなのしずまるのをまつて、やつぱりしんけんに行った。

「ほたつて先生、それにやわけがあるんじゃないもん。月夜になるとな、蟹は馬鹿じやせに、わがの影法師かげぼうしをお化けばかと思つてびっくりして、やせるんじゃないや。やみ夜になると、影法師がうつらんさかい、安心してみがつくんじやど。だから、月夜は蟹あみが網にかかっても逃がしてやるんじゃないか。かすかすで、うまないもん。やみ夜までおくと、しこしこのみがついて、うまいんじゃないや。ほんまじやのに、せんせ。うそじや思うなら、ためしてみるとええ」

「じゃあ、みんなのためしましょうね」

じょうだんにそういつて、その日はすんだのだが、翌々日、森岡正はほんとに月夜の蟹をもつてきた。一時間目の算数がはじまるまえ、ひょうたん籠かごをつき出したのである。

「せんせ、蟹かに。月夜の蟹。やせて、うもない月夜の蟹」

それは今朝けさとれたばかりで、まだ生きていた。がさごそと音がしている。みんな笑った。「ほんとにもつてきたの。タンコさん」

先生も笑つて、しかたなさそうに受けとつた。蟹は、この期ごになつてもまだじぶんの運命をなんとかして打開だかいしようとするでもいうように、せまい籠かごの中をがさごそ這はいまわつていた。どういうわけか、二匹とも、大きな鋏はさみを片方だけでもぎとられたあわれな姿で、残つた片方の鋏を上に向け、よらばはさむ構あわえで泡をふいている。

「かわいそうに、これ先生がたべるの？」

「うん、約束やくそくじゃもん」

「逃がしてやりましょうよ」

「いや、約束じゃもん」

正はうしろをふりむいて「なあ」とみんなのさんせいを求めた。男の子は手をたたいて

よろこんだ。

「じゃあこうしましょう。あとで小使こつかいさんにこれをにてもらい、今日の理科の時間に研究しようじゃないの。それから、蟹かにつていう題で綴つづりかた方も書いてくるの」

「はーい」

「はーい」

大さんせいだった。籠は窓べりの柱の釘くぎにかけられ、その時間中蟹はがさごその音を立てつづけてみんなを笑わせた。

時間がすむと、先生はひょうたん籠をはずし、じぶんで小使室のほうへ歩いていった。小ツルとコトエが用ありげについてきて、

「せんせ」と呼びかけ、ふりむくのをまって、

「マツちゃんのこと」といった。

「マツちゃん？」

「はい。マツちゃん、ゆうべの船で、大阪へいったん」

「ええっ」

思わず立ちどまった先生の顔を見あげながら、コトエが、一生けんめいの顔で、

「しんるいの家へ、子にいったん」

「まあ」

「それで、マツちゃん家、おっさんと男の子と残ったん」

「そう、マツちゃん、うれしそうだった？」

コトエは答えずに、かぶりをふった。小ツルがかわって、

「マツちゃん、行かんいうて、はじめ、庭の口の柱に抱えついて泣いたん。マツちゃん家のお父さんがよわって、はじめはやさしげにすかしたけど、なかなかマツちゃんがはなれんので、あとは頭にげんこつかましたり、背中をどづいたりしたん。マツちゃん、おいおい泣いてみんなが弱つとつた。よろずやのばあやんが、ようやつとすかして、得心とくしんさしたけど、みんなもらい泣きしよつた。わたしも涙なみだが出てきて弱つた。途中とちゆうまで、みんなと見おくつていったけど、マツちゃん一口もものいわなんだ。なあコトやん。それで……」

きゆうにハンカチを顔にあてて、くつくつと泣きだした先生におどろいて、小ツルはだまった。いつのまにか早苗やマスノもよつてきて、片手にひょうたん籠かごをもったまま、うつむいてハンカチを目にあてている先生を、うたてげに見ていた。みんなの目にも、さそ

われた涙がもりあがっていた。

そのあともしばらくは、窓ぎわの前から三番目の松江の席はあいたままおかれてあったが、あるとき、その、松江のたった一日すわった席に先生はだまって腰かかっていた。そのあとすぐ席の組みかえがあつて、その列は男の子になった。それきり松江の噂は出なかつた。先生もきかず、生徒もいわず、松江からの便りもなかつた。もうみんなの心から、松江の姿は追いだされたのであろうか。別れのあいさつにもこずに、どこかへいつてしまつた五年生の女の子。……

そして、もうすぐ六年生に進級するという三月はじめであつた。春は目の前にきていながら珍らしく雪の降る中を、ひとバスおくれた大石先生は、学校前の停留所から傘もささずに走つて、職員室にとびこんだどたん、異様な室内の空気に思わず立ちどまり、だれに話しかけようかというふうに十五人の先生たちを見まわした。みんな心配そうな、こわばつた顔をしていた。

「どうしたの?」

同僚の田村先生にきくと、しつ　というような顔で田村先生は奥まった校長室に、

あごをふった。そして小さな声で、

「片岡かたおか先生が、警察にひっぱられた」

「えっ！」

田村先生はまた、しずかに、というふうにくまかく顔をふりながら、

「いま、警察がきてるの」

また校長室を目顔めがおでおしえ、つい今のさつきまで片岡先生の机をしらべていたのだとさ
 さやいた。全然、だれにもまだことの真相は分かかっていないらしく、火鉢ひばちによりあつて、
 だまっていたが、始業のベルでようやく生きかえったように、廊下ろうかへ出た。田村先生と肩かた
 をならべると、

「どうしたの」

「まっさきに大石先生はきいた。」

「あかだつていうの」

「あか？ どうして？」

「どうしてか、しらん」

「だって、片岡先生があか？ どうして？」

「しらんわよ。わたしにきいたって」

ちやうど教室の前へきていた。笑って別れはしたが、二人とも心にしこりは残っていた。まだなんにも知らないらしい生徒は、雪に勢いづいたのか、いつもより元気に見えた。ここに立つと、すべての雑念ざつねんを捨てねばならないのだが、教壇きょうだんにたつて五年間、大石先生にとってこの時間ほど、永くなが感じたことはなかった。一時間たつて職員室にもどると、みんな、ほつとした顔をしていた。

「警察、かえつたよ」

笑いながらいったのは、若い独身の師範出しはんの男先生である。彼はつづけて、

「正直にやると馬鹿みるつちゆうことだ」

「なんのこと、それ。もつと先生らしく……」

突っつかれて大石先生はいうのをやめた。突つついたのは田村先生だった。

教頭きょうとうが出てきての説明では、片岡先生のは、ただ参考人というだけのこと、いま校長がもらいさげにいったから、すぐ帰ってくるだろうといった。問題の中心は片岡先生ではなく、近くの町の小学校の稲川いながわという教師が、受けもちの生徒に反戦思想を吹きこんだという、それだった。稲川先生が片岡先生とは師範学校の同級生だということで、一お

うしらべられたのだが、なんの関係もないことがわかったというのである。つまり、証しょう拠こになるものが出てこなかったのだ。そのさがしている証拠品しょうこひんというのは、稲川先生が受けもっている六年生の文集『草の実くさのみ』だというのである。それが、片岡先生の自宅にも、学校の机にもなかったのだ。

「あら、『草の実』なら見たことあるわ、わたし。でも、どうしてあれが、あかの証拠しょうこ」
大石先生はふしぎに思っけてきたのだったが、教頭は笑って、

「だから、正直者が馬鹿みるんですよ。そんなこと警察に聞かれたら、大石先生だってあかにせられるよ」

「あら、へんなの。だつてわたし、『草の実』の中の綴つづりかた方を、感心して、うちの組に読んで聞かしたりしたわ。『麦刈りむぎか』だの、『醤油屋しょうゆやの煙突えんとつ』なんていうの、うまかった」

「あぶない、あぶない。あんたそれ（『草の実』）稲川くんにもらったの」
「ちがう。学校あておくつてきたのを見たのよ」

教頭はきゆうにあわてた声で、

「それ、今どこにある？」

「わたしの教室に」

「とつてきてください」

謄写版の『草の実』は、すぐ火鉢にくべられた。まるで、ペスト菌でもまぶれついているかのように、あわてて焼かれた。茶色っぽい煙が天井にのぼり、細くあけたガラス戸のあいだから逃げていった。

「あ、焼かずに警察へ渡せばよかったかな。しかし、そしたら大石先生がひっぱられるな。ま、とにかく、われわれは忠君愛国でいこう」

教頭のことばが聞こえなかったように、大石先生はだまって煙のゆくえを見ていた。

翌日の新聞は、稲川先生のことを大きな見出しで「純真なる魂を蝕む赤い教師」と報じていた。それは田舎の人びとの頭を玄翁でどやしたほどのおどろきであった。生徒の信望を集めていたという稲川先生は、一朝にして国賊に転落させられたのである。

「あ、こわい、こわい。沈香もたかかず、屁もこかずにいるんだな」

つぶやいたのは年とつた次席訓導だった。ほかの先生はみな、意見も感想ものべようとはしなかった。そんななかでひとり大石先生は、大げさな新聞記事のなかの、わずか、四、五行のところから目がはなれなかった。そこには、稲川先生の教え子たちが、ひとり

一つずつの卵をもちよつて、寒い留置場の先生に差し入れしてくれと、警察へ押しかけたことが書かれていたのだ。

今日はもう出勤した片岡先生はきゆうに英雄にでもなつたように、引っぱりだこだった。どうだった？ の質問に答えて、一日でげっそり頬のおちた彼は、青いひげあとをなでながら、

「いや、どうもこうも、いま考えるとあほらしいんじゃないかな、すんでのことにあかにならされるとこじやつた。稲川は、君が会合に出たのは四、五回じゃというがだの、小林多喜二の本をよんだらうとかつて。ぼくは小林多喜二なんて名前もしらん、いうたら、この野郎、こないだ新聞に出たじゃないかって。いわれてみりやあ、ほら、ついこないだ、そんなことが出ましたな。小説家で、警察で死んだ人のことが」（ほんとうは拷問で殺されたのだが、新聞には心臓まひで死んだと報じられた）

「ああ、いたいた。赤い小説家だ」

若い独身の先生がいった。

「そのプロレタリア何とかいう本を、たくさんとられとりました。あの稲川は師範にいるときから本好きでしたからな」

その日国語の時間に、大石先生は冒険ぼうけんをこころみてみた。生徒たちはもう『草の実』とその先生のことを知っていたからだ。

「家で、新聞をとってる人？」

四十二人のうち三分の一ほどの手があがった。

「新聞をよんでいる人？」

二、三人だった。

「あかつて、なんのことか知ってる人？」

だれも手をあげない。顔を見あわせているのは、なんとなく知っているが、はっきり説明できないという顔だ。

「プロレタリアつて、知ってる人？」

だれも知らない。

「資本家は？」

「はい」

ひとり手があがった。その子をさすと、

「金もちのこと」

「ふーん。ま、それでいいとして、じゃあね、労働者は？」

「はい」

「はい」

「はい」

ほとんどみんなの手があがった。身をもつて知っており、自信をもって手があがるのは、労働者だけなのだ。大石先生にしても、そうであつた。もしも生徒のだれかに、答えを求められたとしたら、先生はいったらう。

「先生にも、よくわからんのよ」と。

まだ五年生にはそれだけの力がなかつたのだ。ところがすぐそのあと、このことについては、口にすることをとめられた。ただあれだけのことがどこからもれたのか、大石先生は校長によばれて注意されたのである。

「気をつけんと、こまりまつそ。うかつにものがいえんときじやから」

校長とは、父の友人というつくべつの関係だから、それだけですんだらしい。だがこのことは、明かるい大石先生の顔をいつとなくかげらすもとになった。たいして気にもとめていなかつた『草の実』のことと同じく、消しがたいかげりをだんだんこくしていった。

六年生の秋の修学旅行は、時節じせつがらいつもの伊勢いせまいりをとりやめて、近くこんびらの金毘羅こんびらということにきまつた。それでも行けない生徒がだいぶいた。働きにくらべて儉約けんやくな田舎いなかのことである。宿屋にはとまらず、三食分の弁当をもってゆくということで、ようやく父兄のさんせいを得た。それでも二組あわせて八十人の生徒のうち、行けるといふのは六割だった。ことに岬みさきの村の子どもらときたら、ぎりぎりの日まできまらず、そのわけを、おたがいにあばきだしては、内情をぶちまけた。

「先生、ソソキはな、ねしよんべんが出るさかい、旅行に行けんので」
マスノがいう。

「だって、宿屋にはとまらないのですよ。朝の船で出て、晩ばんの船でもどつてくるのに」

「でも、朝の船四時だもん、船中でねるでしょう」

「ねるかしたら、たつた二時間よ。みな、ねるどころでないでしょうに。それよりマスノさんは、どうしてゆかんの」

「風邪かぜひくといかんさかい」

「あれあれ、大事なひとり娘むすめ」

「そのかわり、旅行のお金、倍にして貯金ちよきんしてもらうん」

「そうお、貯金はまたできるから、旅行にやってつて、いいなさいよ」

「でも、怪我けがするといかんさかい」

「あら、どうして。旅行すると、風邪かぜひいたり怪我したりするんなら、だれもいけないわ」

「みんな、やめたらええ」

「わあ、お話にならん」

先生はにが笑いをした。

「先生、ぼくはもう、金毘羅こんびらさんやこい、うちの網船あみぶねで、三べんもいったから、いきま
せん」

森岡正がそういつてきた。

「あらそう。でもみんなといくのは、はじめてでしょう。いきなさいよ。あんたは網元だからこれからだつて毎年いくでしょうがね。先生いつとくから。修学旅行の金毘羅こんびらまいりが一ばんおもしろかった、とあとできつと思えますからね」

加部小ツルは、じぶんも行かないといいながら、やはり行かない木下富士子のことを、こんなふうにいっただ。

「せんせ、富士子くさん家、借銭しゃくせんが山のようにあつて旅行どころじゃないん。あんな大

きな家でも、もうすぐ借銭のかたにとられてしまうん。家人中、もう、なんちや売るもんもないんで」

「そんなこと、いわんものよ」

かるく背中をたたくと、小ツルはぺろつと舌を出す。

「いやな子！」

そういいながら思いだすのは富士子の家だった。はじめに岬へ赴任したときでも、もう明日にも人手に渡りそうな噂だったその家は、蔵の白壁が北側だけごつそりはげていた。古い家に生まれた富士子は、いかにもその家柄を背負ったように落ちつきはらつていて、めつたに泣かず、めつたに笑わない少女だった。小ツルなどからあからさまなことをいわれても、じろりと冷たい目で睨みかえす度胸は、だれにもまねのできないものだ。「くさつても鯛」という彼女のあだ名は、彼女の父の口ぐせからきており、彼女はそれに満足しているところがみえた。

そこへゆくと小ツルなどはさつぱりしたもので、人のこともいうが、じぶんのことをいわれても、べつに気にとめないふうだった。一家そろつてはたらき、そのはたらきを表現板にして裏も表もなかった。たとえば小ツルのあだ名は「目つっり」といわれてい

る。たいしたきずではないが、まぶたの上のおできのあとがひつつれていいるからだ。ふつうなら、ことに女の子は「目つつり」などとなぶられれば泣きたくなるだろうが、小ツルはちがつていた。まるで人ごとのようにわだかまりのないようすで、

「目つつり目つつりと、やすやすいうてくれな。目つつりも、なろうと思うてなれる目つつりとちがうぞ」

それは彼女の母たちがそういつていたからであろう。旅行にゆけないわけをも、彼女はざつくばらんというのだ。

「わたしく家くなあ先生、こないだたのもしこう頼母子講をおとして、大きい船をかうたん。だから、儉けん約んやくせんならんの。こんぴらまいりは、じぶんで金もうけするようになってから、いくことにきめた」

それで他人のふところも遠慮えんりよなくのぞきこんで、人のことはいうなといつても平気でいう。ミサ子が行かないのはよくばりだからだの、コトエや早苗はきようだいが多くて、旅行どころでなかるうとかと。

ところが前々日になると、旅行志望者はきゆうにふえて、岬みさきではマスノをのけてみんながゆくということになった。

そのきつかけは、だまりやの吉次が、山出しをしてもうけた貯金ちよきんをおろして申しこみをしたことにあるようだった。吉次がゆけば、どうしたってだまっていられないのがソソキであった。磯吉いそきちは、じぶんも豆腐とうふや油あげを売り歩いてもらった歩金ふきんを貯金していたのだ。ソソキさえも行くとなると、どうしたって正や竹一がやめるわけにはゆかない。正も網ひきで、もうけた貯金を思いだすし、竹一も卵を売ってためた金でゆくといいだした。儉約な岬の村の子どもらは、こんなことで貯金をおろすことを思いつかなかつたのだ。正など、おろさなくてもよいといわれながら、どうしてもおろすのだといって、竹一といっしよにわざわざ郵便局へいったりした。

男の子のほうがそうなると、女の子のほうもだまっていられない。いちばん心配のないミサ子は、富士子をさそつた。二人の母親たちが仲がよかつたからだ。螺鈿らでんの硯すずりばこ箱が富士子には知らせずにミサ子の家へゆき、それで富士子はゆけることになった。二人のこととがわかると、じつとしていられなくなつたのは小ツルである。彼女はさつそくさわぎだした。

「ミイさんも富士子さんも旅行にいくウ。うちも貧乏びんぼう質しちにおいて、やってくれエ」

小ツルはほんとうにそういつて、地だんだふんで泣いた。そのために彼女の細い目はよ

けい細く、はれぼつたくなつた。小ツルの母親は、小ツルとそっくりの目を糸のようにして笑いだし、むつかしい問題を出した。

「ミイさんとこは金もちじゃし、富士子さんとこはおまえ、なんというたつて庄屋しょうやじゃもん。あんな旦那衆だんなしゅうのまねはできん。じゃがな、もしもコトやんが行くんなら、小ツもやつてやる。一ぺんコトやんと相談してこい」

とうていコトエはゆくまいと思つてそういつたのであろう。ところが、走つていつた小ツルはにこにこしてもどつてきた。はあはあ肩かたでいきをしながら、

「コトやん、いくいうた」

「ほんまかいや」

「ほんま、ばあやんがおつてさういうたもん」

あまりのかんたんさに小ツルの母親はうたがいをもち、ききにいった。出しやばりの小ツルがそんなふうにもつていつたのではないかと思つたのである。

「うちの小ツが、しやしやり出たこといいにきたんじやないかえ」

さぐるようにいうと、漁師なみに陽ひやけたコトエの母は、まっ白くみえる歯を見せて
笑い、

「一生に一ぺんのことじゃ、やってやりましょいな、こんなときこそ。いつも下子したこの子守りばっかりさして、苦勞さしとるもん」

「そりや、うちの小ツも同じこつちや。しかし、なに着せてやるんぞな？」

「うちじゃあ、思いきつて、セーラー買うてやろうと思う」

「はした金じゃ、買えまいがの」

「ま、そんなこといわんと、買うてやんなされ、下子したこも着るがいの」

「ふーん」

「早苗さんも、そうすることにしたぞな。小ツやんにもひとつ、ふんぱつしてあげるんじやな」

「そうかいの。早苗さんも、のう。そうなると、小ツもじつとしておれんはずじゃ。やれやれ。そんならひとつ、貧乏びんぼう質におこうか」

「こんないきさつがあつたのだ。ところが、当日になると、早苗は、風邪かぜぎみでゆけないといった。しかし早苗はのどが痛いの中でも、鼻がつまっていたのでもない。痛かったり、つまったりしたのは、お母さんの財布さいふの口のほうで、早苗のために売りにいった珊瑚さんごの玉のついたかんざしは思ねう値で売れず、洋服を買かうことができなかつたのだ。人の足もとを

みてからにと、早苗の母は、その古手屋（古物商）のことをいつまでもおこりながら、早苗にはやさしく、

「着物きて、いくか」

早苗が泣きそうな顔をする時、

「姉ねえやんの、きれいな着物こしに腰こしあげして着ていくか」

「……………」

「おまえだけ着物きていくのがいやなら、やめとけ。そのかわり、洋服を買おうや。どうする？」

「……………」

早苗はぼろつと涙なみだをこぼし、くいしばった口もとをこまかくふるわせていた。二つのうちどちらをとってよいか判断はんだんがつかなかったのだ。しかし母親のこまって泣きそうな顔に気づくと、きゆうに早苗の決心はついた。

「旅行、やめる」

こんないきさつがあったとは、だれもしらず、修学旅行は六十三人の一団で出発した。男と女の先生が二人ずつで、もちろん大石先生も加わっていた。午前四時にのりこんだ船

の中ではだれも眠ろうとする者はなく、がやがやのさわぎの中で、「こんぴらふねふね」を歌うものもいた。

そんななかで、大石先生はひとり考えこんでいた。その考えから、いつもはなれないのが早苗だった。

ほんとに、風邪けだったのかしら。

早苗のほかにも、十幾人かの子どもがそれぞれの理由で旅行にこられなかったのだが、とくべつに早苗が気になるのは、岬の生徒で、彼女ひとりが不参加だからかもしれない。六年になってから、マスノはすっかり母たちの家へ移っていたので、もう岬の仲間ではなくなっていた。たったひとり、あの岬の道を学校へゆく今日の早苗を思うと、今日を休みにしなかったことが、かわいそうに思えた。先生もいない教室でしょんぼり自習している生徒たちを思うと早苗ばかりでなく、かわいそうだった。

こんぴらは多度津から一番の汽車で朝まいりをした。また「こんぴらふねふね」をうたい、長い、石段をのぼってゆきながら汗を流しているものもある。そんななかで大石先生はぞくりとふるえた。屋島への電車の中でも、ケーブルののってからも、それはときどき全身をおそった。膝のあたりに水をかけられるような不気味さは、あたりの秋色をたのし

む心のゆとりもわかず、のろのろと土産物屋にはいり、同じ絵はがきを幾組も買った。せめて残っている子どもたちへのみやげにと思ったのである。

屋島をあとに、最後のスケジュールになっている高松たかまつに出、栗林公園りつりんこうえんで三度目の弁当をつかつたとき、大石先生は、大かた残っている弁当を希望者にわけて食べてもらったりした。弁当までが心の重荷になっていたことに気づき、それでほっとした。夕やみのせまる高松の街を、築港ちつこうのほうへと、そろそろ歩きながら、早く帰って思うさま足をのばしたいと、しみじみ考えていると、

「大石先生、あおい顔よ」

田村先生に注意されると、よけいぞくりとした。

「なんだか、疲れましたの。ぞくぞくしてるの」

「あら、こまりましたね。お薬は？」

「さつきから清涼丹せいりようたんをのんできますけど」といいさして思わずふっと笑い、

「清涼でないほうがいいのね。あつういウドンでも食べると……」

「そうよ。おつきあいするわ」

そうはいったが前にもうしろにも生徒がいる。それを棧橋さんばしの待合所までおくってから

のことにした。男先生たちに事情をいって、一人ずつそつとぬけだし、目だたぬよう大通りをすぐ横町にはいった。そこでも土産物やたべものの店がならんでいた。軒のきの低い家並やなみに、大提灯おおちようちんが一つずつぶらさがっていて、どれにもみな、うどん、すし、さけ、さかななどと、太い字でかいてあった。せまい土間の天井を季節の造花もみじで飾かざつてある店を横目で見ながら、

「大石先生、うどんや風ぐすりというのがあるでしょ、あれもらったら？」

そうね、と、返事をしようとしたとたん、

「てんぷら——丁いっちようツ！」

威勢いせいのよい少女の、よくひびく声が大石先生をはつとさせた。あつと叫さけびそうになったほど、心にひびく声であった。このあたりにはめずらしい、繩なわのれんの店の中からそれはひびいてきたのだった。思わずのぞくと、髪かみを桃ももわれにゆったひとりの少女が、ビラビラかんざしといっしよに造花のもみじを頭にかざり、赤い前かけに両手をくるむようにして、無心な顔で往來おうらいのほうを向いて立っていた。それはどうしても、大石先生として見のがせぬ姿であった。立ちどまった先生たちを客と見たのか、少女はさつきと同じ声で叫んだ。

「いらっしやーい」

それはもう、じぶんの声にさえ、いささかも疑問をもたない叫びであった。日本髪に、ませたぬき衣紋えもんの変わった姿とはいえ、長いまつ毛はもう疑う余地もなかった。

「松江さん、あんた、マツちゃんでしょ」

はいってきた客に、いきなり話しかけられ、桃われの少女はいきをのんで一足さがった。「大阪へいったんじやなかったの。マツちゃん、ずっとここにいたの？」

のぞきこまれて松江はやつと思いだしてもしたように、しくしく泣きだした。思わずその肩をかかえるようにして縄のれんの外につれ出すと、奥からあわただしい下駄げたの音といっしょに、おかみさんもとびだしてきた。

「どなたですか、だまつつれ出されたら、こまりますが」

うさんくさそうにいうのへ、松江ははじめて口をきき、おかみさんのうたがいを打ち消すように小声でいった。

「大石先生やないか、お母はん」

うどんはとうとう食べるひまがなかった。

七 羽ばたき

修学旅行から大石先生の健康はつまずいたようだった。三学期にはいつてももなくのこと、二十日近く学校を休んでいる大石先生の枕もとへ、ある朝一通のはがきがとどいた。

拝啓、先生の御病気はいかがですか。私は毎日、朝礼の時になると、心配になります。大石先生がいないとせえがないと、小ツルさんや富士子さんもいつています。男子もそういつています。先生、早くよくなって、早くきてください。岬組はみんな心配しています。小夜奈良。

岬組の生徒たちの真情にふれた思いで、ふと涙ぐんだ先生も、最後の小夜奈良で、思わずふきだした。早苗からだった。

「さよならを、ほら、こんなあて字がはやってるんよ、お母さん」

朝食をはこんできた母親に見せると、

「字もうまいでないか、六年生にしちやあ」

「そう、一ばんよくできるの。師範へいくつもりのようにだけど、少しおとなしすぎる。あ

れで先生つとまるかな」

口ではなかなか意志表示いしひようじをしない早苗のことを心配していうと、

「だけど、おまえ、久子だって六年生ぐらいまでは口数のすくない、愛あい嬌きょうのない子だったよ。それがまあ、このせつはどうして、口まめらしいもの」

「そうかしら、わたし、そんなに口くち八丁はちぢょう？」

「だって、教師が口が重たかったらこまるでないか」

「そうよ。だからわたし、この山石早苗という子が、教壇きょうだんに立ってものがいえるかしらと、心配なの」

「じぶんのこと忘れて。久子だって人の前じやろくに唱歌しょうかもうたえなかつたじゃないか。それでもちやんと、一人前いちにんまえになったもの」

「ふーん。そうだったわ。いま唱歌すきななの、もしかしたら子どもときの反動かな」

「ひとりっ子のはにかみもあつたろうがね。そのはがきの子もひとりっ子かい」

「ううん。六人ぐらいのまん中よ。姉さんは赤十字の看護婦かんごふだそうよ。じぶんは先生になりたいて、それも綴つづり方かたに書いてあるの。きいたって口ではいわなくせに、綴方だと、すごいこと書くのよ。これからは女も職業をもたなくては、うちのお母さんのように、

つらい目をする、なんて、よっぽどつらい目をみてるらしいの」

「おまえと同じじゃないか」

「でもわたしは、小さいときからちゃんと人にもいつてたわ。先生になる、先生になるつて。山石早苗ときたら、何にもいやしない。いつでもみんなのうしろにかくれているみた
いなくせに、書かせるとちゃんとしてるの」

「いろいろ、たちがあるよ。こうしてはがきをよこしたりするところ、なかなかうしろに
かくれちゃいないから」

「そうなの。そして、小夜奈良なんだもの、おもしろい」

はがき一枚につりこまれて思わずすんだ朝食だった。そのあとも、まるで鏡にでも見
入るようにそのはがきを見つめ、やがては子どもたちのことがつきつきと浮かんできた。
川本松江はどうしたであろうか。

——てんぷら一丁ツ！

かん高に叫んでいた桃ももわれの娘。棧橋さんばし前「しまや」という看板かんばんをおぼえてかえり、
手紙を出してみたが、返事はこなかった。小学校四年生しか修おきめていない子どもには手紙
をかくすべもわからなかったのだろうか。それとも本人の手に渡ったかどうかもあやしい

……。あの夜、うさんくさそうに出てきたおかみさんも、事情がわかるとさすがにあいそよく、

「まあま、それはそれは。ようきておくれましたな。さ、先生、どうぞおかけなさんせ」
 中へ招じいれ、せまい畳たたみの縁えん台だいに小さな座ぶとんを出してすすめたりした。しかし話をするのはおかみさんばかりで、松江はだまってつつ立っていた。いつのまにか男の生徒が五、六人やつてきて、縄なわのれんの向こうに顔をならべているのを見ると、大石先生は立ちあがらずにいられなかったのだ。

「じゃあまたね。もうすぐ船がくるでしょうから」

いとまをつげたが、べつに見送りにもこなかった。許されなかったのであろう。わざとふりむきもせず、さつさと歩きだすと、そろそろついてきた生徒たちは思い思いのことをいった。

「先生、だれかな、あの子？」

「先生、あのうどんやと一家いっけ（親類）かな？」

本校にはたった一日しか顔を出さなかった松江を、だれも松江と気づいていないのは、その中に岬みさきの子どもがまじつていなかったからであろう。へたにさそい出したりしなかつ

たことを、松江のためによるこびながら、今でも一種のもどかしさで思いだされる松江であつた。同じ年に生まれ、同じ土地に育ち、同じ学校に入学した同い年の子どもが、こんなにせまい輪の中でさえ、もうその境遇きょうぐうは格段の差があるのだ。母に死なれたということ、はかりしれぬ境遇の中にほうり出された松江のゆくすえはどうなるのであろうか。彼女といつしよに巢立すだつた早苗たちは、もう未来への羽ばたきを、それぞれの環境かんきょうのなかで支度したくしている。将来への希望について書かせたとき、早苗は教師と書いていた。子どもらしく先生と書かずに、教師と書いたところに早苗の精いっぱいがあり、甘あまつちよろいあこがれなどではないものを感じさせた。六年生ともなれば、みんなはもうエンゼルのように小さな羽を背中につけて、力いっぱい羽ばたいているのだ。

変わっているのは、マスノの志望であつた。学芸会に「荒城の月」を独唱して全校をうならせたマスノは、ひまさえあれば歌をうたい、ますますうまくなつていた。歌にむかうとき彼女の頭脳ずのうは特別のはたらきをみせ、楽譜がくふをみてひとりで歌つた。田舎いなかの子どもとしては、それはじつに珍らしいことだつた。彼女の夢ゆめのゆきつくところは音楽学校であり、そのために彼女は女学校へゆくといつた。

女学校組はマスノのほかにもサ子がいた。あまりできのよくないサ子は、受験のため

の居残り勉強にいんうつな顔をしていた。彼女の頭は算数の原理を理解する力も、うのみにする記憶力にもかけていた。しかもそれをじぶんでよく知っていて、無試験の裁縫学校にゆきたがった。だが彼女の母はそれを承知せず、毎日、彼女にいんうつな顔をさせた。なんとかして県立高女に入りたい彼女の母は、熱心に学校へきていた。その熱意で娘の脳みその構造が変わりでもするように。それでもミサ子は平気だった。

「わたしな、数字みただけで頭が痛くなるんで。県立の試験やこい、だれがうけりや。その日になったら、わたし、病気になるってやる」

彼女は算数のために落第することを見こしているのだ。そこへゆくと、コトエはまるで反対である。家でだれにみてもらうというでもないのに、数の感覚はマスノの楽譜と同じだった。いつもコトエは満点であった。その他の学課も早苗についてよくできた。彼女ならば女学校も難なく入れるであろうに、コトエは六年きりでやめるといふ。あきらめているのか、うらやましそうでもないコトエに、たずねたことがある。

「どうしても六年でやめるの？」

彼女はこっくりをした。

「学校、すきでしょ」

またうなずく。

「そんなら、高等科へ一年でもきたら？」
だまつてうつむいている。

「先生が、家の人にたのんであげようか？」

するとコトエははじめて口をひらき、

「でも、もう、きまつとるん。約束したん」

さびしそうな微笑びしょうを浮かべていう。

「どんな約束？ だれとしたの？」

「お母さんと。六年でやめるから、修学旅行もやってくれたん」

「あら、こまつたわね。先生がたのみにいつても、その約束、やぶれん」

コトエはうなずき、

「やぶれん」とつぶやいた。そして、前歯をみせて泣き笑いのような顔をし、

「こんどは敏江としえが本校にくるんです。わたしが高等科へきたら、晩ごはんたくもんがないから、こんどはわたしが飯たき番になるんです」

「まあ、そんなら今ごろは四年生の敏江さんがごはんたき？」

「はい」

「お母さん、やっぱり漁に行くの、まい日？」

「はい、大かた毎日」

いつかコトエは綴つづりかた方に書いていた。

私は女に生まれて残念です。私が男の子でないのです、お父さんはいつもくやみます。私が男の子でないのです、漁についていけませんから、お母さんがかわりにゆきます。だからお母さんは、私のかわりに冬の寒い日も、夏の暑い日も沖おきにはたらきにいきます。私は大きくなったらお母さんに孝行つくしたいと思います。

これなのだ、大石先生はさつした。まるで女に生まれたことをじぶんの責任でもあのように考えているコトエ。それがコトエを、何ごとにもえんりよぶかくさせているのだ。だれがそう思わせたのかと試してみてもまにあわぬ。コトエはもう六年生でやめることを、わが身の運命のようにうけいれているのだ。

「でもねコトエさん——」

それはまちがっているのだといおうとやめた。感心ね、といおうとしてそれもやめた。気のどくねというのも口を出なかった。

「残念ですね」

それはいかにも適切てきせつなことばであったが、コトエはそれでなぐさめられ、気持が明るくなつたらしい。少し反そつ齒ばの大きな前齒をよけいむきだして、

「そのかわり、えいこともあるん。さらい年敏江が六年を卒業したら、こんどはわたしをお針屋はりやへやつてくれるん。そして十八になったら大おお阪おさかへ奉公ほうこうにいつて、月給みんな、じぶんの着物買かうん。うちのお母さんもそうしたん」

「そしてお嫁よめにゆくのか？」

コトエは一種のはにかみをみせて、ふふつと笑つた。それはもうわが手では動かすことのできぬ運命でもあるように、彼女はそれに服ふく従じゆうしようとしている。そこにはもう、与えられる運命をさりりとうけようとする女の姿があつた。二十はたちにもなれば、彼女はあの日ハハキトクの偽電報にせでんぽう一本で奉公先から呼びかえされ、危篤きとくのはずの母たちの膳立ぜんだてのまま、よくはたらく百ひやく姓しやうか漁師の妻になるかもしれぬ。

彼女の母もそうであつた。そして六人の子を生んだ。五人まで女であつたために、それ

がじぶんひとりの責任であるかのように夫の前で気がねしていた。その気がねがコトエにもうつって、彼女もえんりよぶかい女になっていた。夫にしたがって毎日沖に出ている漁師の妻は、女とは思えぬほど陽にやけた顔をし、潮風しおかぜにさらされて髪かみの毛は赤茶けてぼうぼうとしていた。しかもそれで不平不満はなかったかのように、じぶんの歩いた道をまた娘に歩かせようとし、娘もそれをあたりまえの女の道とこころえている。そこにはよんだ水が流れの清冽せいれつさをしらないような、古さだけがあった。正直いちずな貧しい漁師の一家にとつては、それが円満えんまんぐそく具足のかぎりなのだろうか、ひとりもどかしがる大石先生だった。さりとてコトエを高等科に進学させることで、貧しい漁師一家の考えが一新されるものではないと思うと、空を眺ながめてためいきをするよりなかった。

教師と生徒の関係が、これでよいのかと疑問をもつと、そこに出てくる答は、『草の実』の稲川先生であった。国賊こくぞくにされ、刑務所けいむしょにつながれた稲川先生は、ときどき獄ごくちゆ中ちゆうから、蟻ありのようにこまかい字の手紙を教え子によせるといふことだったが、なんの変わつたこともないありきたりの手紙も、生徒には読んで聞かされないと噂うわさだった。そんなものであろうか。教室の中で、国定教科書を通してしか結びつくことをゆるされないそらぞらしい教師と生徒の関係、たとえば生徒のほうでかつてに関をのりこえてこようとも、

上手じょうずに肩すかしをくわさねば、思いがけない落とし穴があることを知らねばならなかった。みんなの耳と目が知らず知らず人の秘密をうかがいさぐるようになっていなのだ。しかしまた時には、別のことで思いがけないいたずらに引きずりこまれたりもする。病気のためしばらく休むといったとき、小ツルなど、胸もとに手を入れるような無遠慮ぶえんりよさで、ぬけぬけといった。

「先生の病気、つわりですか？」

思わず赤くなると、やんやとはやすものもいた。子どものくせに、と思つたが、肩かたをかさずに答えた。

「そうなの。ごめんなさい。ごはん食べれないから、こんなにやせたんだもん、少し元氣になつてからくるわ」

そのときからの欠勤けつきんだった。休むと宣言せんげんしたとき、だれよりも心配そうな顔をしたのがやはり早苗だったことなど思いだし、六年前の写真をとりにだしてみた。十三枚焼きましをしておきながら、なんとなく渡しそびれてそのままになっている写真は、袋ふくろのまま写真ブックのあいだにはさまっていた。あどけない顔をならべている中で、小ツルはやはりいちばん大人おとなっぽかった。このときからずぬけて背も高い小ツルは、今ではみんなより二

つほども年上に見えた。おかつぱか横分けにしている中で、彼女ひとりしなは支那の少女のようまえがみに前髪をさげて、ひとり大人ぶっているのだ。マスノが岬みさきの道づれでなくなつてから、彼女はひとりいばっているふうであつた。高等科をおえると産婆さんば学校にゆくのが目的なのも、おませな彼女につわりの興味をもたせたのかもしれない。

岬の女子組では、あとに富士子が一人いるが、彼女の方向だけはきまつていなかった。いよいよ、こんどこそ家屋敷が人手に渡わたるといふ噂うわさも、卒業のさしせまつた富士子の動きをきめられなくしているのだらうと思つと、コトエと同様、あなたまかせの運命が彼女を待ちうけていそうであつた。やせて血のけのない、白く粉このふいたような顔をした富士子は、いつも袖そでぐち口に手をひっこめて、ふるえているように見えた。陰いんにこもつたような冷たい一重ひとえまぶたの目と、無口さだけが、かろうじて彼女の体面を保つてでもいるようだ。

そこへゆくと、男の子はいかにもはつらつとしている。

「ぼくは、中学だ」

竹一が肩かたをはるようにしていうと、正もまけずに、

「ぼくは高等科で、卒業したら兵隊にいくまで漁師だ。兵隊にいったら、下士官かしかんになつて、

曹長そうちやう ぐらいになるから、おぼえとけ」

「あら、下士官……」

不自然にことばを切ったが、先生の気持の動きにはだれも気がつかなかつた。月夜の蟹かにとやみ夜の蟹をわざわざもつてきたような正が下士官志望は思いがけなかつたのだが、彼にとつては大いにわけがあつた。徴兵ちやうへいの三年を朝鮮の兵營へいえいで過ごし、除隊じよたいにならずにそのまま満州事変に出征しゆっせいした彼の長兄が、最近伍長ごちやうになつて帰つたことが正をそそのかしたのだ。

「下士官を志望したらな、曹長までは平ちやらでなられるいうもん。下士官は月給もらえるんど」

そこに出世しゆっせの道を正は見つけたらしい。すると竹一も、まけずに声をあげまして、

「ぼくは幹部候補生かんぶこうほせいになるもん。タンコに負けるかい。すぐに少尉しょういじやど」

吉次や磯吉がうらやましがな顔をしていた。竹一や正のように、さしてその日の暮しにはこまらぬ家庭の息子むすことはちがう吉次や磯吉が、戦争について、家でどんなことばをかわしているか知るよしもないが、だまつていても、やがては彼らも同じように兵隊にとられゆくのだ。その春（昭和八年）日本が国際連盟を脱退だつたいして、世界の仲間はずれになつ

たということにどんな意味があるか、近くの町の学校の先生が牢獄ろうごくにつながれたことと、それがどんなつながりをもっているのか、それらのいっさいのことは知る自由をうばわれ、そのうばわれている事実さえ知らずに、田舎いなかの隅すみすみまでゆきわたった好戦的な空気に包まれて、少年たちは英雄の夢を見ていた。

「どうしてそんな、軍人になりたいの？」

正にきくと、彼はそつちよくに答えた。

「ぼく、あととりじやないもん。それに漁師よりよっぽど下士官のほうがえいもん」

「ふーん。竹一さんは？」

「ぼくはあととりじやけんど、ぼくじやつて軍人のほうが米屋よりえいもん」

「そうお、そうかな。ま、よく考えなさいね」

うかつにもものいえない窮きゆうくつ屈くつさを感じ、あとはだまって男の子の顔を見つめていた。

正が、なにか感じたらしく、

「先生、軍人すかんの？」ときいた。

「うん、漁師や米屋のほうがすき」

「へえーん。どうして？」

「死ぬの、おいしいもん」

「よわむしじやなあ」

「そう、よわむし」

そのときのことを思いだすと、今もむしやくしやくしてきた。これだけの話をとりかわしたことで、もう教頭に注意されたのである。

「大石先生、あかじやと評判になつとりますよ。気をつけんと」

——ああ、あかとは、いったいどんなことであろうか。この、なんにも知らないじぶんがあかとは——

寝床ねどこの中でいろいろ考えつづけていた大石先生は、茶の間にむかつて呼びかけた。

「おかあ、さん、ちよつと」

「はいよ」

立ってはずに襖ふすまご越こしの返事は、火鉢ひばちのわきにうつむいた声であった。

「ちよつと相談。きてよ」

足音につづいて襖ふすまがあくと、指ぬきをはめた手を見ながら、

「わたし、つくづく先生いやんなつた。三月でやめよかしら」

「やめる？　なんでまた」

「やめて」いちもんかしや一文菓子屋でもするほうがましよ。まい日まい日忠君愛国……」

「これッ」

「なんでお母さんは、わたしを教師なんぞにならしたの、ほんとに」

「ま、ひとのことにして、おまえだつてすすんでなつたじゃないか。お母さんの二の舞まいふみたくないつて。まつたくろうがんきよう老眼鏡かけてまで、ひとさまの裁縫さいほうはしたくないよ」

「そのほうがまだましよ。一年から六年まで、わたしはわたしなりに一生けんめいやつたつもりよ。ところがどうでしょう。男の子つたら半分以上軍人志望なんだもの、いやんなつた」

「とき世時よじせつ節じやないか。お前が一文菓子屋になつて、戦争が終るならよかろうがなあ」

「よけい、いやだわたし。しかも、お母さんにこりもせず、船乗りふなののお婿さんむこもらつたりして、損した。このごろみたいに防空演習ぼうくうえんしゆうばかりあると、船乗りの嫁さんよめ、いのちぢぢめるわ。あらしでもないのに、どかーんとやられて未亡人みぼうじんなんて、ごめんだ。そいつて、今のうちに船乗りやめてもらおかしら。二人で百ひやく姓しょうでもなんでもしてみせる。せつかく子どもが生まれるのに、わたしはわたしの子にわたしの二の舞いふませたくない

もん。やめてもいいわね」

早口にならべたてるのを、にこにこ笑いながらお母さんは聞いていたが、やがて、幼い^{おきな}子どもでもたしなめるようにいった。

「まるで、なんもかもひとのせいのようにいう子だよ、おまえは。すきできてもらった^{むじこ}婿どのでないか。お母さんこそ、文句いいたかったのに、あのととき。わたしの二の舞いふんだらどうしようと思つて。でも、久子が気に入りの人なら仕方がないとあきらめた。それを、なんじや、今さら」

「すきと船乗りはべつよ。とにかくわたし、先生はもういやですからね」

「ま、すきにしなされ。今は気が立つてるんだから」

「気なんか立つていないわ」

学校ではだいぶちがう先生である。しかしそのわがままないいかたのなかには、人の命をいとおしむ気持があふれていた。

やがておちついてふたたび学校へかようようにはなつたが、新学期のふたをあけると大石先生はもう送りだされる人であった。惜^おしんだりうらやましがると同^{どうりよう}僚もいたが、とくに引きとめようとしなないのは、大石先生のことになんとなく目立ち、問題になつてもい

たからだ。それなら、どこに問題があるかときかれたら、だれひとりはずきりいえはしなかつた。大石先生自身はもちろん知らなかつた。しいていえば、生徒がよくなつくというようなことにあつたかもしれない。

その朝七百人の全校生徒の前に立つた大石先生は、しばらくだまってみんなの顔を見まわした。だんだんぼやけてくる目に、新しい六年生の一ばんうしろに立つて、一心にこちらを見ている、背の高い仁太にたの顔がそれとわかると、思わず涙なみだがあふれ、用意していた別れのあいさつが出てこなかつた。まるで仁太が総代でもあるように、仁太の顔にむかつておじぎをしたようなかたちで、壇だんをおりた。高等科の列の中から正や吉次や、小ツルや早苗さなえのうるんだまなざしが一心にこちらをみつめているのを知つたのは、壇をおりてからだつた。お昼の休みに別棟べつむねにある早苗たちの教室のほうへゆくと、いち早く小ツルが見つけて走ってきた。

「せんせ、どうしてやめたん？」

めずらしく泣きそうにいう小ツルのうしろから、早苗の目がぬれて立っていた。あんなに女学校女学校と、まつききになつてさわいでいたマスノが、結局は高等科へ残つたというのに、その姿が見えないことについて、小ツルは例によって尾ひれをつけていった。

「マアちゃんな先生、おばあさんとお父さんが反対して女学校いくの、やめたん。料理屋の娘が三味線しゃみせんというならきこえる（わかる）が、学校の歌うたいになってもはじまらんいわれて。マアちゃんやけおこして、ごはんも食わずに泣きよる。——それからな先生、ミサ子さんの学校は女学校とちがうんで。学園で。ミドリ学園ゆうたら、生徒は三十人ぐらいで、仕立屋に毛がはえたような学校じやと。そんなら高等科のほうがよかつたのにな、先生」

思わず笑わせられた先生は、笑ったあとでたしなめた。

「そんなふうにもんじやないわ、小ツやん。それより、マアちゃんどうしたの？」

「ふがわるいゆうて、休んどん」

「ふなんかわるないいうて、なぐさめてあげなさい、小ツやんも早苗さんも。それより、富士子ふじこさんどうした？」

「あ、それがなア、先生、びっくりぎようてん、たぬきのちようちんじや」

小ツルは声を大きくし、見ひらいても大きくなりつこのない細い目を、無理にひらこうとして眉まゆをつりあげ、

「兵庫ひょうこへ行つたんで。試験休みのとき、うちの船で荷物といっしょに親子五人つんでい

つたん。ふとんと、あとは鍋なべや釜かまやばつかりの荷物。たんすも大昔のぬりのはげたん一つだけで、あとは行李こくりじやつた。富士子さんとこの人、みんな荒働こしぎきしたことないさかい、いまに乞食こしぎにでもならにやよかろがつて、みな心配しよつた。いんま、富士子さんらも芸者ぐらいに売られにやよかろがつて——」

じぶんとこの運うんちん賃、半分は売れのこりの道具ではらつたことまでしやべりつづける小ツルの肩かたをかるくたたいて、

「小ツルさん、あんたはね、いらんことを、すこし、しやべりすぎない？ あんた産婆さんばさんになるんでしょ。いい産婆さんは、あんまり人のことをいわないほうが、いいことよ、きつと。これね、先生のせんべつのことば。いい産婆さんになつてね」

さすがに小ツルはちよこんと肩をすくめ、
「はい、わかりました」

三日月の目で笑つた。

「早苗さんも、いい先生になつてね。早苗さんはもつと、おしやべりのほうがいいな。これも先生のおせんべつ」

肩をたたくと、早苗はこつくりしてだまつて笑つた。

「コトやんにあつたら、よろしくいってね。からだ大事にして、いい嫁よめさんになりなさい
つて。これおせんべつだつて」

小ツルはすかさず、

「先生も、よいお母さんになりますように、これおせんべつです」

ふざけて先生の肩をたたいた。小ツルはもうほとんど先生と同じ背の高さになっていた。
「はい、ありがとう」

思いきり声をあげて笑った。

高等科になって、はじめて男女別組になった教室には、正たちはいなかった。男の子の
ほうへいって、とくべつに岬みさきの生徒だけに別れのあいさつをするのも気がすまず、帰る
ことにした。

「タンコさんソソキさん、キッチンくんらに、よろしくね。気がむいたら、遊びにきなさい
いっていってね」

「先生、わたしらは？」

小ツルはすぐあげ足をとる。

「もちろん、きてちようだい。こいっていわなくても、昔からあんたたちくるでしょう。」

あ、そうそう」

写真を出して一枚ずつ渡すと、小ツルはきやつきやつとひびきわたる声で笑い、とびとびしてよろこんだ。

その翌日、解ときはなれたたよろこびよりも、大事なものをぬきとられたようなさびしきにながかりして、昼寝ひるねをしているところへ、思いがけず竹たけい一と磯吉いそきちがつれだつてやつてきた。あまりに早いことづけの効目ききめにおどろきながら、みだれた髪かみを結びもせず迎むかえた。

「ま、よくきてくれたわね。さ、おあがんなさい」

二人は顔を見あわせ、やがて竹一がいった。

「つぎのバスで帰るんです。あと十分か十五分ぐらいだから、あがられんです」

「あらそう。そのつぎにしたら？」

「そしたら、岬みさきへつくのが暗くろうなる」

磯吉がきつぱりいった。どうやら道々そういう相談をしたらしい。

「あ、そうか。じゃあまってて。先生おくつていくから、歩きながら話しましょう」
いそいで髪をなおしながら、

「竹一さん、中学いつから？」

「あさつてです」

その態度はもう、中学生だぞといわんばかりで、手には新らしい帽子ぼうしをもつていた。磯吉のほうも見なれぬ鳥打帽とりうちぼうを右手にもち、手織り縞ておじまの着物の膝ひざのところを行儀ぎようぎよくおさえていた。

「磯吉さん、きのう学校休んだの？」

「いいえ、ぼくもう、学校へいかんです」

そして磯吉はきゆうにしゃちこぼり、

「先生、ながながお世話になりました。そんなら、ごきげんよろしゆ」
膝ひざをまげておじぎをした。

「あら、まだよ。いまいっしょにいきますよ」

泣き笑いしそうになるのをこらえながら、つれだつて出かけた。バスの乗場までは六分かかる。まん中になつて歩きだすと、磯吉はすつぽりと頭を包んだ大きな鳥打帽の下から小さな顔をあおのけ、

「先生、ぼく、あしたの晩、大阪へ奉公ほうこうにいきます。学校は主人が夜学へやってくれま

す」

「あらま、ちつとも知らなかった。きゆうにきまったの？」

「はい」

「何屋さん？」

「質屋しちやです」

「おやまあ、あんた質屋さんになるの？」

「いえ、質屋の番頭です。兵隊までつとめたら、番頭になれるといいました」

さつきから磯吉はずつと、よそゆきのことばで固くなっている。それをほぐすように、

「いい番頭さんになりなさいね。ときどき先生にお手紙くださいね。きのう、小ツやんに

写真ことづけたでしょ。あのときのこと思いだして」

竹一も磯吉も笑った。

「これ、おせんべつ、はがきと切手なの」

もらいものの切手帖きってちようとはがきを新らしいタオルにそえて包んだのを磯吉に渡し、竹一

にはノート二冊と鉛筆一ダースを祝った。

「敷入りやぶいなんかでもどつたときには、きつといらっしゃいね。先生、みんなの大きくなる

のが見たいんだから。なんしろ、あんたたちは先生の教えはじめの、そして教えじまいの生徒だもん。仲よくしまししょうね」

「はい」

磯吉だけが返事をした。

「竹一さんもよ」

「はい」

村のはずれの曲がり角にバスの姿が見えると、磯吉はもういちど帽子をとっていった。

「せんせ、ながながお世話になりました。そんなら、ごきげんよろしゆ」

いかにも、それは鸚鵡おうちむのようななぎごちなさだった。いいおわるとすぐ帽子をかぶった。

大人おとしなものらしい鳥打帽は漫画まんがのこどものようなものではあったが、似合っていた。新らしい学生

帽と二つならんで、バスのうしろの窓から手をふっていた二人を、見えなくなるまでおく

ると、ゆつくりと海べにおりてみた。静かな内海うちうみをへだてて、細長い岬みさきの村はいつもの

とおり横たわっている。そこに人の子は育ち、羽ばたいている。

——ながながお世話になりました。そんならごきげんよろしゆ……

岬にむかつてつぶやいてみた。それはおかしきとかなしきと、あたたかさが同時にこみ

あげてくるような、そしてもっと含蓄がんちくのあることばであった。

八 七重八重

春とはいえ、寒さはまだ朝の空気の中に、鎌かまいたちのようなするどさでひそんでいて、日かげにいと足もとからふるえあがってくる。

K町のバスの停留所ていりゅうじよには、この早いのもう用たしをすましてきた客が二人、下りくだバスをまっていた。六十を二つ三つすぎたらしく見えるおじいさんと、三十前後の女客と。

「ううっ、さぶい！」

思わず出たうめき声のようにつぶやくおじいさんに、

「ほんとに」

と、女客は話しかけられもしないのに同意した。寒さは人間の心を寄りあわせるらしく、どちらからとなく親しさをみせあつた。

「ほんとに、いつまでも寒いことですか」

「そうです。もう彼岸ひがしじゃというのに」

話しかけた若い女は、四角い包みを胸にかかえこむようにしながら、おじいさんの、むき出しのまま片腕かたうでにひっかけている粗末そまつなランドセルに、親しいまなざしをおくり、「お孫さんのですか？」

「はいな」

「わたしも、息子のをこ買かうてきました」

胸の包みを見やりながら、

「今日売りだすというのを聞いて一番のバスで出かけたんですけど、昔のような品はもう一つもありませんだ。こんな紙のじやあ、一年こつきりでしょう」

おたがいの品物をなげくようにいうと、そうだというようにおじいさんは首をふり、

「ヤミなら、なんぼでもあるといな」

そして、はっはつと笑った。奥歯おくばのないらしい口の中がまっくらに見えた。女は目をそらしながら、

「きょう日びのように、なんでもかでもヤミヤミと、学校のカバンまでヤミじやあ、こまりますな」

「銭ぜにさえありやあなんでもかでもあるそうな。甘いぜんざいでも、ようかんでも、あると

「こにや山のようにあるそうな」

そういつて齒のない口もとから、ほんたによだれをこぼしかけたところは、甘党らしい。口もとを手のひらでなでながら、てれかくしのように、向こう側をあごでしゃくり、

「ねえさん、あつちで待とうじやないか。日向だけは夕ダじや」

そういつてさつさと反対側乗場の方へ道を横ぎった。ねえさんと呼ばれて思わずにやりとしながら、女客もあとを追った。——ねえさん、か。と、女客は心の中でいつてみて、背の高いおじいさんをふりあおぎ、笑いながらたずねた。

「おじいさん、どちらですか」

「わしか。わしや岩が鼻でさ」

「そうですか。わたしは一本松」

「ああ一本松なあ。あつこにや、わしの船乗り朋輩があつてな。もうとうの昔に死んだけれど、大石嘉吉という名前じやが、あんたらもう、知るまい」

それをきいたとたん、女客はとびあがるほどおどろいて、

「あら、それ、わたしの父ですが」

こんどは、おじいさんが、ひらきなおるようになかつこうで、

「ほう、こいつはめずらしい。そうかいな。今ごろ嘉吉つあんの娘さんにあうとはなあ。そういう似たところがある」

「そうですか。父はわたしが三つするとき死にましたから、なんにもおぼえとりませんけど、小父さん、いつごろ父といっしよでしたの」

おじいさんを小父さんとあらためて呼んだのも、生きていれば父もこのぐらいの年配かと思つたからだ。

いうまでもなく、大石先生の、あれから八年目の姿である。船乗りの妻としてすごした八年間には、腹をたてて教職をひいたあの時とはくらべることもできないほど、世の中はいつそうはげしく変わつていた。日華事変にっかじへんがおこり、日独伊防共協定にちどくいぼうきょうきょうていがむすばれ、国民精神総動員という名でおこなわれた運動は、寢言ねごにも国の政治に口を出してはならぬことを感じさせた。戦争だけを見つめ、戦争だけを信じ、身も心も戦争の中へ投げこめと教えた。そしてそのように従わされた。不平や不満は腹の底へかくして、そしらぬ顔をしていないかぎり、世渡りよわたはできなかつた。そんななかで大石先生は三人の子の母となつていた。長男の大吉だいきち、二男の並木なみき、末っ子の八津やっ。すっかり世の常の母親になつてゐる証し拠よつこに、ねえさんとよばれた。だがよく見ると、目のかがやきの奥おくに、ただのねえさんで

ないものがかくれている。

「小父さん、もしよろしかったら、お茶でものみませんか」

停留所のわきの茶店をさしていった。この年よりから、父親をかぎだそうとしたのである。しかし年よりは、がんこに首をふり、

「いや、もうすぐにバスがきまつそ。ここでよろしいわい」

年よりのほうもなんとなく、あらたまつた態度を見せていた。

「それで、嘉吉^{かきつ}つあん^{よめ}の嫁さんは、おたつしやかな」

「はあ、おかげさまで」

と、いったが、年とつた母が、嫁さんと呼ばれたこと思わず笑顔になった。帰ればまずそれを母にいうと思つた。ちようど上り^{のぼ}バスが警^{けいてき}笛とともに近づいてきた。上り客^{のぼ}でないことをしめすように、急いで標^{ひょうしき}識からはなれたが、バスは止^とまった。茶店の軒下に立つて、おりる客の顔を、見るともなく見ていた。バスはすし詰^づめの満員で、おりてくるのは若い男ばかりだった。ほとんどみな、ここでおりるかと思うばかり、つきからつぎへと出口にあらわれる若い顔をみているうち、ふと思いだしたのは、今日この町の公会堂^{ちようへい}で徴^{ちようへい}兵検査がとりおこなわれることだった。ああ、それかと思ひながら、若さ

ちた個々の顔につきからつきへと目をうつしていた。

「あつ、小石先生！」

思わずとびあがるほどの大声だった。ほとんど同時に先生も叫んだ。さそわれるような大声で、

「あらつ、仁太さん！」

そして、あとからあとからとつづいて出てくる顔に向かって、

「あら あら あら みんないるの、まあ」

仁太につづいて磯吉、竹一、正、吉次と、かつての岬の少年たちはみんなそろった。

「先生、しばらくです」

東京の大学をあと一年という竹一は、細長くなつた顔を、いかにも都会の風に吹かれてきたというようなようすで、まっさきにあいさつした。つづいて神戸の造船所ではたらいている正が、これはいかにも労働者らしく鍛えられた面魂ながら、人のよい笑顔で頭をさげ、きまりわるげに耳のうしろをかいた。まっていたように磯吉が前に出てきて、

「先生、ごぶさたいたしまして」

少し心配なほど青白い顔に、じよさいない笑いを浮かべた。どこへもゆかずに岬の村で

山伐りや漁師りようしをしている吉次は、あいかわらず借り猫ねこのようなおとなしきで、みんなのうしろに控え、水ばなをすすりあげながらだまって頭をさげた。仁太ばかりはれいのおりの無遠慮ぶえんりよさで、あいさつぬきだった。彼は父親を手つだつて石けん製造をしているという。経済的けいざいてきには一ばんゆとりがあるらしい仁太は、新調の国民服をきていた。

「先生、こないだ富士子に会った、富士子に」

じまんらしく富士子をかさねていう。しかし先生はわざとそれに乗らず、とりかこまれた青年の姿をあおぐようにして眺めまわした。八年の歳月さいげつは、小さな少年を見あげるばかりのたくましきに育てている。

「そう、検査だったの。もうね」

涙なみだのしぜんとにじみだす目に五人の姿はぼやけた。いつまでそうもしておられぬと気づくと、きゆうに昔むかしの先生ぶりにもどり、

「さ、いつてらつしやい。そのうち、みんなで一度、先生とこへきてくれない」

それでいかにも男の子らしくあつさりはなと離れてゆくうしろ姿を、さまぎまの思いで見おくりながら、久しぶりにじぶんの口で「先生」といったのが、なんとなく新鮮な感じで、うれしかった。

ふりかえると、年よりは茶店の横の日だまりに塵をよけてまっていた。日あたりのよい生垣のいけがきのつぼみに蕾をつけた山吹がむらがり、細い枝は蕾の重さでしなっている。その一枝を無造作に折りとり、年よりもまた若者たちを見おくりながら、小さい声で、
「えらいこつちや。あやつてにこにこしよる若いもんを、わざわざ鉄砲の玉のま的にするんじやもんなあ」

「ほんとに」

「こんなこと、大きい声じやいうこともできん。ゆうたらこれじや」

ランドセルをもったまま両手をうしろにまわし、さらに小声で、

「ほれ、治安維持法じや、ぶちこまれる」

歯のない口はにきゆうに奥歯おくばがはえたような気がするほど若がえった口調くちようだった。治安

維持法というものを、彼女はよく知らない。ただ『草の実』の稲川先生が、その治安維持法という法律ほうりつに違反いはんした行動のために、牢獄ろうごくにつながれ、まもなく出てきてからも復職ふくしよく

職はおろか、正せい当とうなあつかいもうけていないということだけが、その法律とつない

で考えられた。稲川先生の母親は、まるで気ちがいのように息子むすこをかばい、今では彼が前まへ非ひを悔くいあらためていると、会う人ごとに吹聴ふいちょうしてまわるのにいそがしいという噂うわさを

聞いた。どこまでがほんとうなのか、ただ稲川先生はひとり養ようけい鶏けいをしながら世間ばなれの生活をしていた。彼が世間をはなれたのではなく、世間が彼をよせつけないのだ。彼の卵は、毒でもはいっているかのようにきらわれ、ひところは買手もなかった。時代は人を三匹の猿さるにならえと強しいるのだ。口をふさぎ、目をつむり、耳をおさえていけばよいというのだ。ところが今、目の前にいる年よりは目や耳をふたした猿の手をはぎとるようなことをいう。朋輩ほうばいの娘むすめだとはいえ、はじめて会った女に、なぜ心の奥を見せるようなことをいうのだろうか。

半分は警戒けいかい心しんもおきて、彼女は、それとなく話題をそらせた。

「ところで小父おじさん、わたしの父とは、いつごろの朋輩ほうばいでしたの？」

「そうよなあ、十八か、九かな。二人とも大望たいもうをもつてな。あわよくば外国船に乗りこんで、メリケンへ渡ろうというんじや。シアトルにでも行ったとき、海にとびこんで泳およぎ渡わたろうという算段さんだんよ」

「まあ。でも、昔はよくあつたそうですね」

「あつたとも。メリケンで一もうけしてというんじやが、じつをいうと、徴兵ちようへいがいや

でなあ。——今ならこれじゃ」

また手をうしろにまわして笑った。

「とうとう目的成就しなかつたわけですか？」

「そういうわけじゃ。もつともそのころは、船に乗とりさえしたら兵隊には行かいてもすんだからな。そのうち二人とも船乗りがすきになつてな。同じ船乗りなら免状もちになろうというんで、これでも勉強したもんじゃ。学校へ行つたらんもんで、わしらは五年がかりでやつと乙一の運転手になつたあ。嘉吉つあんのほうが、一年はよう試験に通つてな、わしも、なにくそと思うて、あくる年にとつたのに——」

そのとき朋輩は難船して行方不明となり、ついによるこんでもらえなかつたというのだ。父の妻としての母からきくのはちがつた父の姿、涙どころか微笑さえ浮かんで想像される若い日の父の姿、語る人の親愛感からであろうか、父ははつらつとした好ましい青年であつたと知つた。その父が徴兵をきらつたといふことは初耳である。それについて一言もしない母は、父からそれをきかなかつたのであろうか。それとも例の猿になつていたのか、「嫁さん」と呼ばれたこととともに母にきいてみようと考えながら、話はずきなかつた。

「そして小父さん、いつごろまで船に乗っておいでたん？」

「十年ほどまえよ。ようやくとこんまい船の船長になつてな。——息子は学校へやつて苦
 勞させずに船乗りにしてやろうと思うたら、船乗りはいやじゃときやがる。商業学校にや
 つて、銀行の支店に出とつたけど、とられて、死んだ」

「とられてつて、戦争ですか？」

「そういな」

「まあ」

「ノモハンさあ。これは、そいつのせがれので」

ランドセルは年よりの手で強くふられ、中のボール紙がかさこそと音をたてた。

——おたがいに、せがれをもつのは心配の種ですね。といおうとしてのみこんだ。

バスでは客がたてこんでいて並ぶことはできなかった。うしろの正面に席をとつた大石
 先生は、じつと目をつぶっていた。思いだすのは、いまのさつき別れた教え子のうしろ姿
 である。けもののように素^す裸^{はだか}にされて検査官の前に立つ若者たち。兵隊墓に白木の墓^{ほひよ}
 標^{うら}がふえるばかりのこのごろ、若者たちはそれを、じじやばばの墓よりも関心をもって
 はならない。いや、そうではない。大きな関心をよせてほめたたえ、そこへつづくことを

名誉とせねばならないのだ。なんのために竹一は勉強し、だれのために磯吉は商人になろうとしているのか。子どもころ下士官を志望した正は、軍艦と墓場をむすびつけて考えているだろうか。にこやかな表情の裏がわを見せてはならぬ心ゆるせぬ時世を、仁太ばかりはのんきそうに大声をあげていたが、仁太だとて、その心の奥に何も無いとはいえない。あんな小さな岬の村から出た今年徴兵適齢の五人の男の子、おそらくみんな兵隊となつてどこかの果てへやられることだけはまちがいないのだ。無事帰ってくるものは幾人あるだろう。——もう一人人的資源をつくつてこい……そういつて一週間の休暇を出す軍隊というところ。生まされる女も、子どもの将来が、たとえ白木の墓標につづこうとも、あんじてはならないのだ。男も女もナムアミダブツで暮せということだろうか。どうしてものがれることのできない男のたどる道。そして女はどうなるのか。あの組の七人の女の子の中で、ミサ子ひとりは苦勞をしていなかった。ミドリ学園から東京の花嫁学校にはいい、在学中に養子をむかえてすぐ子どもをうんだ。苦勞の多い時代に、これは別格である。風の強い冬の日に、ひとり日光室で日向ぼっこをしているような存在である。そこへゆくとき歌のすきなマスノは、きりきり舞いをするような苦勞をした。ただ歌いたいために有頂天になり、親にそむいて幾度か家出をした。無断で応じた地方新聞のコン

クールに一等入選し、それが新聞に出たときが家出のはじめだった。そのたびにさがしだされ、連れもどされては、また出る。いつも歌がもとだった。歌をうたいたい歌のじょうずな娘が、なぜ歌をうたつてはいけないのだろう。三度目の家出のとき、彼女は芸者げいしやになつて出ようとしていたという。つれにいった母親に彼女は泣いてしがみつき、

「三味線しゃみせんなら、きこえるというたじやないかあ」

彼女の音楽へのはけ口はいつのまにか三味線のほうへ流れていつていたのだ。しかし、彼女の親たちは、そのよしあしはともかくとして、わが身は料理屋で芸者と近づきながら、娘を芸者にするわけにはゆかなかつた。マスノは今、その家出中に知りあつた年とつた男と結婚し、ようやく落ちつきをみせていた。今ではもう、年とつた母にかわつて、料理屋をきりもりしているという。たまに道で出あうと、なつかしがつてとびついてき、

「せんせ、わたし、いつも先生のこと、あいたくてエ」

涙までためてよろこぶ子どもつぽいしぐさなのに、じみ作りの彼女は二十歳はたちやそこらとは見えなかつた。

高等科へもすすめず、嫁よめにもらわれることを将来の目的として女中奉公に出たコトエはどうなつたであろうか。彼女は嫁にもらい手がつくまえに、病氣になつて帰つてきた。肺は

病いびょうであつた。骨と皮にやせて、ただひとり物置きに寝ていると聞いてから、だいぶたつ。

高等科に進めなかつたもうひとりの富士子については、いやな噂うわさがたつていた。仁太が、富士子に会うた、というのは、遊び女としての富士子との出あいにながななかつた。仁太の顔にあらわれたものでそうとさとして、わざととききかえさなかつたが、噂うわさはどうの昔に小ツルから聞いていた。富士子は親に売られたというのだ。家具や衣類と同じように、今日きの一家のいのちをつなぐために、富士子は売りはらわれたのだ。はたらくということを知らずに育そだつた彼女が、たとえいやしい商売女にしろ、売られてそこではじめて人生というものを知つたとしたら、それは富士子のためによるこばねばなるまい。しかし人は富士子をさげすみ、おもしろおかしく噂をした。

今ではもう人の記憶きおくから消えさつたかに見える松江といい、今また富士子といい、どうして彼女たちがわらわれねばならないのか。しかし、大石先生の心の中だけでは、彼女たちも昔どおりいたわられ、あたためられていた。

——マツちゃんどうしてる？ 富士さんどうしてる？ ほんとにどうしてる？……
ときどき先生は呼びかけていた。

まつとうな道とはどうしても思えぬ富士子たちにくらべると、小ツルや早苗は健康そのものにみえた。優秀な成績で師範しはんを出た早苗は、母校にのこる榮譽えいよを得てその瞳ひとみはますますすがやき、大阪の産婆さんば学校を、これも優等で卒業した小ツルとは、大石先生をまん中にして仲よしになっていた。実地の勉強をかさねたうえで、小ツルは郷里に帰るのが目的であった。わざとかうっかりか、手紙の宛名あてなを大石小石先生と書いてきたりするのだが、人間の成長の過程かていのおもしろさは、母の予言どおりおしやべりの小ツルを幾いく分ぶん控ひかえ目に、無口な早苗をてきぱき屋に育てていた。

二人はすくなくも年に二度、さそいあつておとずれてくる。たいてい夏の休暇きゆうかと正月で、もってくる土産みやげも同じだった。二人とも同じものというのではない。大阪の小ツルは栗あわおこしだし、早苗は高松で瓦かわらせんべいときまっていた。年ごろで、ますます太ふとる一方の小ツルの目は、全く糸のように細くなっていた。どちらかといえばきつい彼女の性格は、この目でやわらげられ、えへ、と笑うと、こちらもいつしよに声をあげて笑いたくなくなった。えへ、というとき、あとへドサン（土産みやげ）といつて土産みやげをおくのが小ツルのくせであった。あるとき小ツルはいった。

「いつも同じドサンで芸がなさすぎると思うことありますけどね、じぶんの子どものとき

のことを思うと、このドサンでとびとびするほどうれしかったから」

早苗も同じように瓦せんべいの包みをさし出し、

「阿呆あほうの一つおぼえということがありますからね」

大吉は、ドサンの姉ちゃんと同様に歓迎かんげいし、その日は、一日笑いくらして別れるのがおきまりになっていた。それらのドサンも戦争がながびくにつれ、手に入りにくくなったらしく、昨今は商売物らしいガーゼをくれたり、早苗のほうはノートや鉛筆を、まだ学校でもない大吉のためにもつてきたりするようになった。ようやく学がくれい齡れいにたつした大吉のためにランドセルを買いにいつての帰り、はからずも出あつた教え子に刺激しげきされてか、もろもろの思い出は胸にあふれた。

一本松でございます。お降りのかたは……。

車しゃ掌しょうの声に思わず立ちあがり、あわてて車内を走つた。例の年よりに会え釈しゃくもそこそこ、ステップに足をおろすと、いきなり大吉の声だった。

「母ちゃん」

濁にごりにそまぬかん高いその声は、すべての雑念をあなたに押しおしやうしてしまおうとする。「母ちゃん、ぼくもう、さつきからむかえにきとつたん」

いつもならば、ひとりでに笑えてくる、きれいにすんだその声が、今日は少しかなしかった。笑ってみせると大吉はすぐ甘えあまかかり、

「母ちゃん、なかなか、もどらんさかい、ぼく泣きそうになった」

「そうかい」

「もう泣くかと思つたら、ブブーって鳴つて、みたら母ちゃんが見えたん。手えふつたのに、母ちゃんこつち見ないんだもん」

「そうかい。ごめん。母ちゃんうっかりしとつた。大方おおかた、一本松忘れて、つつ走るところじゃった」

「ふーん。なにうっかりしとつたん？」

それには答えず包みを渡すと、それが目的だといわぬばかりに、

「わあ、これ、ランドセルウ？　ちっちゃいな」

「ちっちゃくないよ。しよつてごらん」

ちようどよかつた。むしろ大きいぐらいだった。大吉はひとりでかけだした。

「おばあ、ちゃーん、ランドセルウ」

すつとんでゆきながら足もとのもどかしさを口に助けてもらうかのように、ゆく手のわ

が家へむかつて叫んだ。

肩をふつて走つてゆくそのうしろ姿には、無心に明日へのびようとすけるけんめいさが感じられる。その可憐なうしろ姿の行く手にまちうけているものが、やはり戦争でしかないとすれば、人はなんのために子をうみ、愛し、育てるのだろう。砲弾にうたれ、裂けてくだけで散る人の命というものを、惜しみ悲しみ止どめることが、どうして、してはならないことなのだろう。治安を維持するとは、人の命を惜しみまもることではなく、人間の精神の自由をさえ、しばるといふのか……。

走り去る大吉のうしろ姿は、竹一や仁太や、正や吉次や、そしてあのとく同じバスをおりて公会堂へと歩いていった大ぜいの若者たちのうしろ姿にかさなりひろがってゆくように思えて、めいめた。今年小学校にあがるばかりの子の母でさえそれなのと思うと、何十何百万の日本の母たちの心というものが、どこかはきだめに、ちりあくたのように捨てられ、マッチ一本で灰にされているような思いがした。

お馬にのつたへいたいさん

てっぼうかついであるいてる

トットコ トットコあるいてる

へいたいさんは 大すきだ

気ばりすぎて調子つばずれになった歌が家の中から聞こえてくる。敷居しきいをまたぐと、ランドセルの大吉を先頭に、並木と八津がしたがって、家の中をぐるぐるまわっていた。孫のそんな姿を、ただうれしそうに見ている母に、なんとなくあてつけがましく、大石先生はふきげんにいった。

「ああ、ああ、みんな兵隊すきなんだね。ほんとに。おばあちゃんにはわからんのかしら。男の子がないから。——でもそんなこつちやないと思う……」

そして

「大吉イ！」と、きつい声で呼んだ。口の中をかわかしたような顔をして大吉は突っ立ち、きよとんとしている。ハタキと羽子板はこいたを鉄砲てつぽうにしている並木と八津がやめずに歌いっづけ、走りまわっているなかで、大吉のふしんがつている気持ちをしずめてやるように、いきなり背中に手をまわすと、ランドセルはロボットのような感かんしよく触ふで、しかし急きゅうげき激げきなよろこびで動いた。長男のゆえにめつたにうけることのない母の愛撫あいぶは、満六歳の男の子

を勝利感に酔よわせた。にこつと笑つて何かいおうとすると、並木と八津に見つかつた。

「わあつ」

押しよせてくるのを、同じようにわあつと叫びかえしながら、ひつくるめてかかえこみ、「こんな、かわいい やつどもを、どうして ころして よいものか わあつ わあつ」

調子をとつてゆさぶると、三つの口は同じようにして、わあつ わあつ と合わせた。

そこにどんな気持がひそんでいるかを知るにはあまりに幼い子どもたちだつた。

春の 徴ちよう兵へい適いて齡ぎれい者しやたちは、報告書と照らしあわされて、品ひん評びやう会かいの葉はつ葉はや大根

のようにその場で兵種がきめられ、やがて年の瀬せがせまるころ、カンコの声におくられて入営するのが古いころからの慣なわしであつた。しかし、日ごとに広がつてゆく戦線の逼ひつぱ迫くは、そのわずかな時間的ゆとりさえもなくなり、入営はすぐに戦線につながつていた。

船着き場の棧さん橋ばしに建てられたアーチは、歓かん送そう迎げい門もんの額がくをかかげたまま、緑の杉すぎの葉はは焦こげ茶ちや色しきに変わつてしまつた。歓送歓迎のどよめきは年中たえまなく、そのすきまを声なき「凱がい旋せん兵士」の四角な、白い姿もまた潮風とともにこのアーチをくぐつてもどつてきた。

日本じゆう、いたるところに建てられたこの緑の門を、数えきれぬほどたくさんの若者たちがぐりつづけて、やむことを知らぬような昭和十六年、戦線が太平洋にひろがったことで、カンコの声はいっそうはげしくなるばかりだった。天皇の名によって宣戦^{せんせん}布告^{ふこく}された十二月八日のそのずつとまえに、その年の入営者である仁太や吉次や磯吉たちは、もうすでに村にはいなかった。出発の日、いくばくかの餞^{せんべつ}別にそえて大石先生は、かつての日の写真をハガキ大に再製してもらっておくつた。もう原^{げん}板^{ばん}はなくなっていた。竹一のほかほみもなくしていたので、よろこばれた。

「からだを、大事にしてね」

そして、いちだんと声をひそめ、

「名譽^{めいよ}の戦死など、しなさんな。生きてもどつてくるのよ」

すると、聞いたものはまるで写真の昔にもどつたような素直さになり、磯吉などひそかに涙^{なみだ}ぐんでいた。竹一はそつと横を向いて頭をさげた。吉次はだまってうつむいた。正はかげのある笑顔をみせてうなずいた。仁太がひとり声に出して、

「先生だいじょうぶ、勝つてもどつてくる」

それとて、仁太としてはひそめた声で「もどつてくる」というのをあたりをはばかるよ

うにいった。もどるなどということとは、もう考えてはならなくなっていたのだ。仁太はしかし、ほんとにそう思っていたのだろうか。まっ正直な彼には、おていさいや、ことばのふくみは通用しなかったからだ。仁太だとして命の惜しきについては、人後におちるはずがない。それを仁太ほど正直にいったものは、なかったかもしれない。彼はかつての日、徴兵検査の係官の前で、甲種合格！と宣言されたせつな、思わず叫んだという。「しもたア！」

みんなが吹きだし、噂はその日のうちにひろまった。しかし仁太は、ふしぎとビンタもくわなかつたという。仁太の間髪をいれぬことばは、あまりにも非常識だったために、係官に正當に聞こえなかつたとしたら、思ったことをそのとおりに仁太はよほどの果報者だ。みんなにかわって溜飲をさげたようなこの事件は、近ごろの珍談として大石先生の耳にもはいった。

その仁太は、ほんとうに勝つてもどれると思つたのだろうか。

ともあれ、出ていったまま一本のたよりもなく、その翌年も半ばすぎた。ミッドウエーの海戦は、海ぞいの村の人たちをことばのない不安とあきらめのうちに追いこんで、ひそかに「お百度」をふむ母などを出した。仁太や正は海軍に配置されていた。平時ならば微

笑^{しょう}でしか思いだせない仁太の水兵も、いったまま使^{たよ}りがなかった。

仁太はいま、どこであの愛すべき大声をあげているだろうか――。

ひとりを思うとき、かならずつづいて思いだすのは、いつもあのK町のバスの停留所で見た若者たちである。笑うと口の奥^{おく}がくらく見えた年よりのことである。春寒^{はるさき}むの道ばたに、ただの日光をうけた蕾^{つぼみ}をふくらませていた山吹である。そうして、さらにさらに大きなかげで包^{つつ}んでしまうのは、いつのまにか軍用船となつて、どここの海を走っているかさえ分^{ぶん}からぬ大吉たちの父親のことである。その不安を語りあうさえゆるされぬ軍国の妻や母たち、じぶんだけではないというところで、人間の生活はこわされてもよいというのだろうか。じぶんだけではないことで、発言権を投げすてさせられているたくさんの人たちが、もしも声をそろえたら。ああ、そんなことができるものか。たったひとりで口に出しても、あの奥歯のない年よりがいったように、うしろに手がまわる。

ただの日光をうけて、春寒^{はるさき}むの道ばたにふくらむ山吹は、それでも、花だけは咲かせたろうに。……

九 泣きみそ先生

海も空も地の上も戦火から解放された終戦翌年の四月四日、この日朝はやく、一本松の村をこぎだした一隻の伝馬船は、紺がすりのモンペ姿のひとりのやせて年とった小さな女を乗せて、岬の村の方へ進んでいった。静かな海に靄はふかくたちこめていて、岬の村は夢のなかに浮かんでいようにみえたが、やがてのぼりはじめた太陽に醒まされるように、その細長い姿を、しだいにくつきりと、あらわしはじめた。

「あ、ようやつと晴れでした」

まだ十二、三と見える船頭は、小さなからだ全体を動かして櫓を押しすすめながら、まだ遠い岬の村に眺めいった。目ばかりかがやいているようなその男の子に、同じように岬の村に目を見はついていた女は、いとおしむような声で話しかけた。

「岬、はじめてかい、大吉？」

みかけによらず、若い声である。

「うん、岬なんぞ、用がなかったもん」

ふりかえりもせず答えた。

「そうじゃな。お母さんでさえ、ずっとくることなかったもんなあ。岬というところは、

そんなとこじや。あれから十八年！ ほう、ふた昔になる。お母さんも年よせたはずかいな」

なんとそれは、大石先生の、ひさしぶりの声と姿である。今日、彼女は十三年ぶりの教職ようしよくにかえり、しかも今、ふたたび岬の村へ赴任ふにんするところなのだ。まえには自転車に乗ってさっそうとかよっていた先生も、今ではそんな若さがなくなったのであろうか。ところが、そうばかりではなかったのだ。戦争は自転車までも国民の生活からうばいさつて、敗戦後半年のいま、自転車は買うに買えなかった。岬へ赴任ふにんときまったとき、はたと当惑とうわくしたのはそれだった。途とちゆう中ちゆうまであったバスさえも、戦争中になくなったまま、いまだに開通していない。昔でさえも、自転車でかよった八キロの道は、歩いてかようしかなかった。とうてい、からだのつづくはずがないと考えて、母子三人岬へ移ろうかといいたしたとき、一言で反対したのが大吉だった。船でおいり迎えをするというのだ。船だとして借りるとすれば、相当の礼もしなければならぬ。

「雨がふつたら、どうする？」

「そしたら、お父さんの合羽かっぱきる」

「風の強い日は、こまるでないか」

「……………」

「あ、心配しなさんな。風の日は歩いていくよ」

返事につまった大吉を、いそいで助けたものだ。あしたはあしたの風がふく。あしたのことまで考えてはいられなかった永い年月は、雨や風ぐらいでへこたれぬことだけは、教えてくれた。戦争は六人の家族を三人にしてしまったけれど、だからなお、残った三人はどうでも生きねばならないのだ。大吉は六年生になっている。並木は四年だった。出がけに渚なぎさに立って母の初出勤はつしゅつぎんを見おくつてくれた並木も、もうそろそろ学校へ出かける時分だと思つて一本松をふりかえつた。久しぶりに沖おきからながめる一本松も、昔のままに見える。なんの変化も見られぬその村にさえ、大きな変化をきたした戦争の果ての敗戦。

「大吉、つかれないかい。手に豆ができるかもしれないな」

「豆ができたつて、すぐにかたまらア ぼく、平気だ」

「ありがたいな。でも、明日からもつと早目に出かけようか」

「どうして？」

「先生の息子が、毎日ちこくじやあ、なにがなんでもふがわるい。そのうちお母さんも、また自転車を手に入れる算段さんだんするけども」

「へつちやらだあ。ちゃんと理由があると、叱しかられんもん。船で、おくつたげる」
 ゆつくりと、櫓ろについてからだを前後に動かしながら、得意の顔で笑った。

「うまいな、櫓押おすの。やつぱり海べの子じやな。いつのまにおぼえたん」

「ひとりで、おぼえるもん。六年生なら、だれじやって押おせる」

「そうかね。お母さんもおぼえよかな」

「そんなこと、ぼくがおくつてあげる」

「そうそう、森岡正という子がいてな、一年生なのに、お母さんを舟でおくつてあげるつていったことがあつた。昔むかし——。もう戦死したけんど」

「ふーん。教え子？」

「そう」

ふつと涙なみだが出た。生きていれば、もうよい若者になつたらうと、五年前、棧橋さんばしで別れたきりの正を思いだし、それが幼い日のおもかげとかさなつて浮うかんできた。あれきりついに会うことのなかつた正。そしてもう永久に会うことのできなくなった教え子たち。はげしい戦いにたおれた今、幾いくにん人がふたたび故郷の土をふみ、ふたたび会えるかと思うと、心は暗くしずむ。

悪夢あくむのように過ぎたここ五年間は、大石先生をも人なみのいたでと苦痛のすえに、小さな息子にいたわられながら、このへんぴな村へ赴任ふにんしてこなければならぬ境遇きょうぐうに追いこんでいた。わが身に職のあることを、はじめて彼女は身にしみてありがたがった。教子けうしの早苗にすすめられて願書は出してみたものの、着てゆく着物さえもないほど、生活は窮迫きゆうぱくの底をついていた。不如意ふにょいな日々の暮しは人を老いさせ、彼女もまた四十という年よりも七八つもふけている。五十といつても、だれが疑がおう。

いつさいの人間らしさを犠牲ぎせいにして人びとは生き、そして死んでいった。おどろきに見はった目はなかなか閉じられず、閉じればまなじりを流れてやまぬ涙なみだをかくして、何もかにも追いまわされているような毎日だった。しかも人間はそのことにさえいつしかなれてしまつて、立ちどまり、ふりかえることを忘れ、心の奥までざらざらに荒あらされたのだ。荒れまいとすれば、それは生きることをごぼむことにさえなつた。そのあわただしさは、戦いの終わった今日からまだ明日へもつづいていることを思わせた。戦争はけつして終わったとは思えぬことが多かつた。

原爆げんばくの残虐ざんげやくさが、そのことばとしての意味だけで伝えられてはいたが、まだほんとうの惨状さんじょうを知らされていなかったあの年の八月十五日、ラジオの放送を聞くために

学校へ召集しやうしゆうされた国民学校五年生の大吉は、敗戦の責任を小さなじぶんの肩かたにしようされでもしたように、しよげかえつて、うつむきがちに帰ってきた。

あれからたった半年、今日の前に櫓ろをこぐ可憐かれんな姿は、深い感慨かんがいをそそのめるものがある。時代に順応じゆんのうする子どもというもの。半年前の彼のことを、いえば今は恥ちずかしがる大吉のを知っている。口には出さず、ひとり思しいだすだけである。あの日、しよげている大吉の心を引ひつたててやるように笑顔で肩かたをだいてやり、

「なにをしよげてるんだよ。これからこそ子どもは子どもらしく勉強べんきやうできるんじゃないか。さ、ごはんにしよ」

だが、いつもなら大きわぎの食事を見向きせずみまきに大吉はいったのだ。

「お母さん、戦争、まけたんで。ラジオ聞きかなんだん？」

彼は声こゑまで悲壮ひそつうにくもらしていった。

「聞いたよ。でも、とにかく戦争がすんでよかつたじゃないの」

「まけても」

「うん、まけても。もうこれからは戦死する人はないもの。生きてる人はもどってくる」

「一億玉碎ぎやくさいでなかつた！」

「そう。なかつて、よかつたな」

「お母さん、泣かんの、まけても？」

「うん」

「お母さんはうれしいん？」

なじるようにいった。

「バカいわんと！ 大吉はどうなんじやい。うちのお父さんは戦死したんじやないか。もうもどつてこんのよ、大吉」

そのはげしい声にとびあがり、はじめて気がついたように大吉はまともに母を見つめた。しかし彼の心の目もそれでさめたわけではなかった。彼としては、この一大事のときに、なおかつ、ごはんを食べようといった母をなじりたかつたのだ。平和の日を知らぬ大吉、生まれたその夜も防空演習でまつくらだったと聞いている。燈火管制とうかかんせいのなかで育ち、サイレンの音になれて育ち、真夏に綿入れずきんの頭巾をもつて通学した彼には、母がどうしてこゝまで戦争を憎まねばならないのか、よくのみこめていなかつた。どこの家にも、だれかが戦争にいつていて、若い者という若い者はほとんどいない村、それをあたりまえのことと考えていたのだ。学徒は動員され、女子どもも勤勞奉仕きんろうほうしに出る。あらゆる神社の境けいだ

内は枯葉一枚ものこさず清掃されていた。それが国民生活だと大吉たちは信じた。しかし、山へどんぐりを拾いにゆき、にがいパンを食べたことだけは、いやだった。小さな大吉の村からも幾人かの少年航空兵が出た。

——航空兵になったら、ぜんざいが腹いっぱい食える。

かわいそうに、年端もいかぬ少年の心を、腹いっぱいのでとらえ、航空兵をころざした貧しい家の少年もいた。しかもそれで少年はもう英雄なのだ。貧しかろうと、そうでなかりと、そこへ心を傾けないものは非国民でさえあった時世の動きは、親に無断で学徒兵をころざせば、そしてそれがひとり息子であったりすれば英雄の価値はいつそう高くなつた。町の中学では、たくさんの少年志願兵のなかに親に無断のひとり息子が三人も出て、それが学校の榮譽となり、親たちの心を寒がらせた。そのとき、小さかった大吉は、じぶんの年の幼なさをなげくように、

「ああ、早くぼく、中学生になりたいな」

そして歌った。

ナーナツ ボータンハ サクラニイカーリ……

人のいのちを花になぞらえて、散ることだけが若人の究極の目的であり、つき

ぬ名誉であると教えられ、信じさせられていた子どもたちである。日本じゅうの男の子を、すくなくもその考えに近づけ、信じさせようと方向づけられた教育であった。校庭の隅で本を読む、二宮金次郎にのみやきんじろうまでが、カンコの声でおくりだされてしまった。何百年来、朝夕を知らせ、非常を告げたお寺の鐘かねさえ鐘しょうろう楼からおろされて戦争にいった。大吉たちがやたら悲壮ひそつがり、いのちを惜おしまなくなったこともやむをえなかったのかもしれない。しかし大吉の母は、一度もそれにさんせいはしなかった。

「なああ大吉、お母さんはやつぱり大吉をただの人間になつてもらいたいと思ふな。名譽の戦死なんて、一軒にひとりでたくさんじゃないか。死んだら、もとも子もありやしないもん。お母さんが一生けんめいに育ててきたのに、大吉アそない戦死したいの。お母さんが毎なみだ日なきの涙でくらししてもえいの？」

のぼせた顔にぬれ手ぬぐいをあててもやるようにいったが、熱のはげしさはぬれ手ぬぐいではききめがなかった。かえつて大吉は母をさとしてもするように、

「そしたらお母さん、靖国やすくにの母になれんじゃないか」

これこそ君に忠であり親には孝だと信じているのだ。それでは話にならなかつた。

「あああ、このうえまだ靖国の母にしたいの、このお母さんを。『靖国』は妻だけでたく

さんでないか」

しかし大吉は、そういう母をひそかに恥じてさえたのだ。軍国の少年には面子めんつがあった。彼は、母のことを極力世間にかくした。大吉にすれば、母の言動はなんとなく気になった。ずっとまえにもこんなことがあった。病気休きゅうか暇でかえっていた父に、ふたたび乗船命令が出たとき、大吉がまっさきにいきおいづいて、並木たちとさわぎたてると、母は眉根まゆねをよせて、おさえた声でいった。

「なんでしよう、この子。馬鹿かしら、ひとの気もしらずに」

そういつて額ひたいをつんと指さきで押おした。ひよろひよると倒たおれかかった大吉は、腹を立ててむしやぶりついてきた。しかし、母の目に涙なみだがこぼれそうなのを見ると、さすがにしゅんとしてしまった。父は笑って大吉をなぐさめた。

「いいよ、なあ大吉。まだ八つや九つのおまえらまでがめそめそしたら、お父さんも助からんよ。さわげさわげ」

しかしそういわれるともう騒げなかった。すると、父は三人の子どもをいっしょよくたに抱かかえて、

「みんな元気で、大きくなれよ。大吉も並木も八津も、大きくなって、おばあさんやお母

さんを大事にしてあげるんだよ。それまでには戦争もすむだろうさ」

「えっ、戦争すむの。どうして？」

「こんな、病人まで引っぱりださにやならんとこみると——」

だが、大吉たちにはその意味はわからなかった。ただ、じぶんの家でも父が戦争にゆくという事で肩身かたみがひろかったのだ。一家そろっているということが、子どもに肩身のせまい思いをさせるほど、どこどこの家庭も破壊はかいされていたわけである。

戦死の公報がはいったのは、サイパンを失う少しまえだった。さすがの大吉もそのときは泣いた。肘ひじを胸のほうにまげて、手首のところところで涙をふいている大吉の肩を、母は抱きよせるようにして、

「しつかりしようね大吉、ほんとにしつかりしてよ大吉」

じぶんをもはげますようにいい、そのあと、小さな声で、どんなに父が家にいたがったかを語った。

「行ったら最後まで帰れないこと、分かってたんだもん。それなのに大吉たち、大きわぎしたろう。気のどくで、つらくてお母さん……」

しかし大吉はそのときでさえ、なぜ母はそんなことをいうのだらうと思った。父はよろ

こび勇んで出ていったのだといつてもらいたかった。戦死は悲しいけれど、それだとて、父のない子はじぶんだけではないのにと、そのことのほうをあたりまえに考えていた。となり村のある家などでは、四人あつた息子が四人とも戦死して、四つの名誉めいよのしるしはその家の門にずらりとならんでいた。大吉たちは、どんなにか尊敬そんけいの目でそれをあおぎ見たことだろう。それは一種の羨望せんぼうでさえあつた。

その「戦死」の二字を浮かした細長く小さな門標もんびょうは、やがて大吉の家へもとどけられてきた。小さな二本の釘くぎといつしよに状袋じょうぶくろに入れてあるのを手のひらにあげて、しばらくながめていた母は、そのまま状袋にもどして、火鉢ひばちの引出ひきだしにしまった。

「こんなもの、門にぶちつけて、なんのまじないになる。あほらしい」

怒おこつたような顔をしてつぶやき、しよきしよきと米を搗つきはじめた。米はビール瓶びんの中なかで搗くのである。病気で寝ていたおばあさんのおかげのためで、大吉たちの口には入らなかつた。防空演習でころんで、それが病みつきになつたおばあさんは、もうどうていなおる見こみもなく、寝ているだけだつた。ころんだのがもとで病みついたのではなく、病みついてきたからころんだのだろう、と医者はいつた。八十すぎて、髪かみもひげもまっ白となり村の医者は、なおる見こみのない病人のところへは、なかなかきてくれなかつた。ほ

かにたのむ医者はなく、せめてうまいものでもと心がけたが、なかなか手にはいらなかった。海べにいて、魚さえ手に入らないのだ。魚はありませんか、卵はありませんかと、一びきのめばる、一つの卵に三度も五度も頭をさげねば手に入らなかった。そのために母がひとりでかけまわった。

そしてある日、名譽の門標はいつのまにか火鉢ひばちの引出ひきだしから、門の鴨居かもいの正面に移っていた。母の留子るすに大吉がそこへ打ちつけたのである。小さな「名譽の門標」は、しかるべき位置に光っていた。「門標」の妻は、しばし立ちどまってそれを眺ながめた。ひとりの男の命とすりかえられた小さな「名譽」を。その名譽はどこかどぐちの家の門口をもちぎって、恥をしらぬようにふえていった。それをもっともほしがっていたのは、幼い子どもだったのであろうか。

そうして、ついに迎むかえた八月十五日である。濁流だくりゅうが、どんな田舎いなかの隅すみまでも押しよせたような騒ぎの中で、大吉たちの目がようやくくさめかけたとしても、どうしてそれを笑うことができよう。笑われる毛ほどの原因も子どもにはない。

戦争の残飯ざんぱんをあさる人たちも多いなかへ、生きのこった兵隊が毎日のようにもどってきた。生きてはいてももどれぬ兵隊、永久もとに戻ることのない父や夫や息子や兄弟たちの、

かつての名誉の門標は家々の門から、いつせいに姿を消し、ふたたび行方不明になった。それで戦争の責任をのがれでもしたかのように。

同じようにそのなくなつた家で、思いがけなく大吉は、妹の八津のとつぜんの死をむかえねばならなかつた。おばあさんがなくなつてから一年目のことである。わずか一年そこそこのうちに、三人の死を迎えたわけだつた。父のように大海の泡沫ほうまつのなかに消えて姿を見せない死、おばあさんのように病やみほうけて枯木かれきのようになつてたおれた生しやう涯がい、昨日きのうまで元気だつたのが一夜のうちに夢のように消えてしまった、はかない八津の死。そのなかで八津の死はいちばんみんなを悲しませた。急性腸カタルちやうだつた。家のものにだまつて、八津は青い柿かきの実をたべたのである。もうひと月もすればうれるのに、澁しぶくはないということだ。八津はそれを食べたのである。いつしよに食べた子もあるのに、八津だけが命をうばわれた。

戦争はすんでいるけれど、八津はやつぱり戦争で殺されたのだ。――

母がそういつたとき、大吉はきゆうには意味がのみこめなかつたが、だんだんわかつてきた。近年、村の柿の木も、栗くりの木も、熟うれるまで実みがなつていたことがなかつた。みんな待ちきれなかつたのだ。

子どもらはいつも野に出て、茅花つばなをたべ、いたどりをたべ、すいばをかじった。土のついたさつまをなまで食べた。みんな回かいちゆう虫むしがいるらしく、顔色がわるかった。そんななかで病気になつても村に医者いしやはいなかった。よくきく薬もなかった。医者も薬も戦争にいつていたのだ。おばあさんの亡なくなつたときには、村の善法ぜんぼうじ寺じさんまでが出征して留守るすだった。近村の寺の坊さんは、戦死者でいそがしかった。終戦のちよつとまえに帰つた善法ぜんぼうじ寺じさんは、帰るとすぐ供養くようにきてくれたが、今また、つづけて八津のためにお経きようをあげてもらふことになるなど、どうして考えられたろう。

おばあさんは死ぬまえ、菩提ぼだい寺じにお坊さんもないことをくやんだが、小さな八津は坊さんのことなど考えたこともなかつたろうと思うと、大吉は、声はりあげて経をよむ坊さんまでがうらめしかった。お母さんの話では、八津が生まれたときにお父さんはもう、からだのぐあいが少し悪くなりかけていて、船をおりて養ようじよう生せいするつもりだったという。永年、世界の七つの海を渡わたりあるいたお父さんは、今はもう家に帰つて休みたいといい、八つ目の港をわが家にたとえて、そのとき生まれた女の子に八津という名をつけた。しかし、病気のお父さんもわが家の港に病気をやしなうことができず、希望をかけた八津もまた死んでしまった。……

ものがとぼしく、八津のなきがらをおさめる箱も、材料をもってゆかねば作れないといわれ、少しこわれかけていた昔のたんすでつくることにした。花までが人間の生活のなかから追いだされていた。大吉は並木と二人で墓場へゆき、ジャノメ草やおしろい花をとってきて八津をまつた。もとは花もたくさん作っていたという庭は、大吉たちの記憶のかがり、大根やかぼちや畑で、せまい軒のきさき先にまでかぼちやは植えられて、屋根にはわせていた。八津がなくなるとお母さんは、泣きながら軒のかぼちやをひきちぎるようにしてぬきとつた。うらなりの実が三つ四つ、長い蔓つるに引きずられて落ちてきた。そのなかの丸いのを盆ぼんにのせて仏壇ぶつだんに供えたのだったが、疫痢えきりという噂うわさが立って、だれもきてくれぬ通つ夜の枕やまくらもとにすわって、いつもの停電がすんだあと、お母さんはふと気がついたように、
 枕 刀まくらがたなにした小さなゾーリングンの庖丁ぼうちようをとりあげ、いきなり、ぐざりとかぼちやの横腹につき立てて、大吉たちをおどろかした。ゾーリングンはお父さんが買ってきたものだった。もしも、お母さんが笑っていなかったなら、日ごろ、こわいと教えられているゾーリングンである。大吉たちは悲鳴ひめいをあげたかもしれない。しかしお母さんは笑っていたのだ。泣きはらした顔の笑顔は、ちがった人のように見えたが、なんでもない、なんでもないという目の色は大吉たちを瞬しゅんかん間で安心させた。

「いいもの、八津にこしらえてやろう。こんなこと、お前たち、知らないだろ。八津はとうとう知らずじまいじゃ。かぼちやはうらなりでも食べるものと、大吉ら、そう思ってるだろう。お母さんらの子どものときは、かぼちやのうらなりは、子どものおもちや。ほら、これが窓——」

かぼちやの横腹は四角にきりぬかれた。

「こつちは、丸窓まるまどといたしましょう。少々むつかしいな。手塩皿てじおざらもつてきて大吉、型をとるから。それとお盆ぼんもな。わた出すから」

大吉と並木は目を丸くしてみていた。できたのは提灯ちようちんだった。窓に紙をはり、底に釘くぎをさすとうそくの座もできた。配給のろうそくをともすと、いかにもそれは、八津のよろこびそうな提灯であった。悲しみを忘れて大吉はいった。

「お母さん、工作、満点じゃ」

小さな棺かんができてくると、提灯ちようちんは八津の顔のそばに入れてやった。八津がもつて遊んでいた貝がらや紙人形もそばにおいた。悲しみがきゆうにおしよせてきて、大吉も並木も声をあげて泣いた。おんおん泣きながら大吉は、八津がいつもほしがっていたチエノワを思いだし、かしてやらなかつたじぶんの不親切をじぶんでせめながら、いまあらためて、

それを八津にやろうと思つた。胸むねに組みあわせた手にもたせようとしたが、冷たい手はもうそれをうけとつてはくれず、チエノワはすべて棺かんの底に落ちた。並木も泣きながら、彼もまた八津の目にふれぬようにしまいこんであつた大事な色紙をもつてきて、鶴つるや奴やつこや風船ふうせんを折つて入れた。そんなものをもつて、八津は死出しでの旅路たびじについたのである。

こういうことがあつて、大石先生はきゆうにふけたのである。白髪しろがさえもふえた。小さないながらも大吉はどきんとし、腰こしでもまげると、おばあさんそっくりになつた。人のちの尊とつとさを、しみじみと味わえる年になつてきた。

お母さんを大事にしてあげるんだぞ――

お父さんのことばが生きてきた。

「お母さん、薪まきはぼくがとつてくる」

そういつて並木といつしよに山へゆく。

「お母さん、配給は、ぼく、学校の帰りにとつてくるから」

遠い配給所へゆくのも彼の役になつた。並木もまけてはいられなかつた。

「お母さん、水やこい、みんなぼくがくんであげる」

涙なみだもろくなつたお母さんは、

「きゆうにまあ、二人とも親孝行になつたなあ」

これほどよわり、いたわられている彼女が、ふたたび教職にもどれたのは、かげに早苗さなえの尽じん力りよくがあつたのだ。早苗はいま、岬みさきの本村ほんむらの母校にいた。

「四十じゃあね。現職げんしやくにいても老ろう朽きゆうでやめてもらうところじゃないか」

首をかしげる校長へ、再三たの頼たのんで、ようやく、岬ならばということ話がきまつた。しかもそれは大石先生のもつている教員としての資格ではなく、校長いちぞんで採決さいけつできる助じよ教きやうであつた。臨時りんじ教師きしなのだ。かわりがあれば、いつやめさせられるかもしれないのだ。早苗は、気のどくさにしおれて、それを報告した。大石先生の目は、異様いさむにかがやいたのである。

「岬なら、願つたり、かなつたりよ。まえの借りがあるから」

条件じょうけんの悪あくさなど気きにもかけず、心の底そこからつきあげてくるような笑顔えんごをした。そのとき大石先生の心には、忘れていた記憶きおくが、いまひらく花はなのような新鮮しんせんさでよみがえつていたので。

せんせえ またおいでエ……

足がなかつたら またおいでエ……

やくそく したぞオ……

あのとき、じぶんのあとへ赴任ふにんしていった老ろうきゆう朽くの後藤先生と同じように、じぶんもまた人にあわれまれているとも知らず、いや、大石先生がそれを知らぬはずはなかった。しかし幼おきない二人の子をかかえた未亡人の彼女もまた、やはり後藤先生と同じく、よろこんで岬へゆかねばならなかったのだ。しかし彼女はいま、近づいてくる岬の村の山々の、夜気に洗われた緑のつややかさを見ると、じぶんもまた若わかがえつてくるような気がした。昔むかし、洋服も自転車も人にさきがけた彼女も、今では白髪しろがみまじりの髪かみの毛けを無造作むぞうさくにひつつめ、夫こんの着物の紺こんがすりで作ったモンペをつけ、小さな息子むとに舟ふねでおくられている。昔のおもかげを強つよいてさがせば、きゆうにかがやきだした瞳ひとみの色いろと、若々しい声であるかもしれぬ。なまいきといわれてけなされた彼女の洋服や自転車は、それがきつかけになつてはやりだし、いまでは村に自転車に乗れぬ女はないほどだ。だが二十年近い歳さい月げつは、もうだれも若い日の彼女をおぼえてはいまい。

陸地りくちがすうつとすべるように近づいたと思うと、船はもう渚なぎさちかく寄っていた。ふなれな手つきで水棹みづさおを押す大吉と、見なれぬ大石先生に、昔どおり村の子どもはぞろぞろ集

まつてきた。しかし、そのどの顔にもおぼえはなかった。永い年月の衣料の不足は、質素しつそな岬の子どもらのうえにいつそう哀あわれにあらわれていて、若布わかめのようにさけたパンツをはき、そのすきまから皮膚ひふの見える男の子もいた。笑いかけるとおびえたような目をしたり、無感動な表情のまま深い関心を見せて道をひらいた。珍めずらしげにじろじろ見るのは昔のままであった。その好奇の目にとりかこまれながら、大石先生はずみをつけてとびおりた。石ころ一つにさえ昔のおもかけが残っているようななつかしき。少し船に酔よつたらしく、頭がふらついた。ゆつくり歩いていると、うしろにささやく声がした。

「たいがい、せんせど、あれ」

「ほんな、おじぎしてみるか、そしたらわかる」

思わずにつとした顔の前へ、ばたばたと三、四人の小さな子どもが立ちふさがり、ぴよこんと頭をさげた。新学期に近づいて新入生におじぎがとり入れられたのをしおに、まだ学校ではないらしい小さな子らも、まねているのであろう。会え釈しゃくをかえしながら、大石先生は涙なみだぐんでいた。まず、幼い子らに歡かんげい迎むかえられたような気がしてうれしかったのだ。そつと目がしらを押おさえ、笑顔を見せた。あらためて見たが、すぐに思いだす顔はなかった。道ゆく人もそうだった。昔ながらの村の道を、なんと変わった人の姿であろう。とは

いえ、そのなかでもつとも変わっているのがじぶんだとは、気がつかなかった。その大石先生を追いぬき追いぬき、三々五々と走ってゆく生徒たちもたえなかつた。ちらりちらりと、こちらをぬすみ見しては走りさつてゆく。それらの姿から、わざと目をそらしたのは、見られたくないものが光ってこぼれそうだったからだ。

ひとり帰ってゆく大吉のほうへ手をふつてみせてから校門をくぐつた。古びてしまった枚舎の、八分どおりこわれたガラス窓をみたとき、瞬間、絶望的なものが満ち潮のように押しよせてきたが、昔のままの教室に、昔どおりに机と椅子を窓べりにおき、外を見ているうちに、背骨はしやんとしてきた。なにもかも古いこの学校へ、新らしいものが出てきはじめたからだ。古い帯おび、芯しんらしい白い布で作つた新らしいかばん。まん中に一本縫い目のあるらしい銘めい仙せんのふろしき、そのなかには、新聞紙を折りたたんだだけのような、表紙のないそまつな教科書がはいっているだけでも、子どもたちは希望にもえる顔をしていた。昔どおりの岬みさきの子の表情である。十八年という歳さい月げつを昨日きのうのことに思い、昨日につづく今日のような錯覚さつかくにさえとらわれた。大げさな始業式もなく教室にはいると、さすがにかあつと顔に血がのぼるのを感じた。それでも、なれた態度で出席をとつた。若く、はりのある声で、「名前をよべば、大きな声でハイと返事をするのよ」と前

おきをして、

「川崎覚さん」

「ハイ」

「加部芳男さん」

「ハイ」

「元気ね。みんな、はつきりお返事ができそうですね。加部芳男さんは、加部小ツルさんのきょうだい？」

いま、返事をほめたばかりなのに、もう加部芳男はだまってかぶりをふる。名前をよばれたときでなければ、ハイとはいえないもののように。しかし先生は笑顔をくずさずに、

「岡田文吉さん」

それは明らかに磯吉の兄の子どもとさっしられたが、盲目めくらになって除隊された磯吉につらい兄であると聞いて、ふれずにつきに移った。

「山本克彦さん」

「ハイ」

「森岡五郎さん」

「ハイ」

正ただしの顔が大きく浮うかんで消えた。

「片桐かたぎりマコトさん」

「ハイ」

「あんた、コトエさんの家の子」

マコトはほかんとしていた。彼女は小さいときなくなつた姉のことなどおぼえていなかつたのだ。それでもう、古いことはきくのはやめた。西口ミサ子の娘は、勝かつこ子といつた。

そのほか三人の女の子のなかに、赤い新らしい洋服をきた川本かわもと千里ちさとという子どもがいた。がまんできず、休み時間のとき、それとなくきいてみた。

「ちさとさんのお父さん、大工だいくさんね」

すると千里は、松江そつくりの黒い目を見はつて、

「ううん、大工さんは、おじいさん」

「あら、そうだつたの」

しかし彼女の学籍簿がくせきぼには、彼女の父は大工とあつた。

「松江さんて、だあれ、姉さん？」

「ううん、お母さん。大阪におるん。洋服おくつてくれたん」

どきんとした。そして、この組に仁太にたやマスノがいないことにほっとし、またそれで、さびしくもなつた。仁太がいれば今ごろはもう、十人の新入生の家庭事情はさらけだされ、めいめいのよび名やあだ名までがわかつているだろう。その仁太や竹一や正は、そして、磯吉や松江や富士子は、と思うと、彼らのときと同様、いちずな信頼しんらいをみせて今日新しい門をくぐつてきた十人の一年生の顔が、一本松の下に集まつたことのある十二人の子どもの姿にかわつた。思わず窓の外を見ると、一本松は、昔のままの姿で立っている。そのそばに、二人の男の子が、じつと岬みさきを見ているかもしれぬ、そんなことも知らぬげな姿である。

大石先生はそつと運動場の隅すみにゆき、ひそかに顔をとのえねばならなかつた。そういう彼女に、早くもあだ名ができていたのを、彼女はまだ知らずにいた。岬の村に仁太はやっぱりいたのである。だれが先生の指一本の動きから目をはなそう。

彼女のあだ名は、泣きみそ先生であつた。

十 ある晴れた日に

四月とはいってもまだ寒さの名残なごりは午後の浜べにみちていた。砂の上に足をなげだしていた大石先生は、思わず立ちあがって、はたはたとモンペのひぎをはたいた。そのうしろ姿へ呼びかける者があつた。

「先生、そんなところで、なにしておいでますか？」

西口ミサ子であつた。

「まあ、ミサ子さん」

はでな花模様はなもようの銘仙めいせんの袷あわせにきちんと帯つきで、ミサ子はこれからどこかへ出かけそうなかつこうに見えた。あらたまつたあいさつのあと、きゆうに親しさをみせて、

「先生にお目にかかりたくて、いま、学校へゆくところでしたの」

そういつてから、もう一度あらためて腰こしをこごめ、

「先生、このたびはまた、ふしぎな御縁ごえんで勝子がお世話になることになりました、どうぞよろしく願いもうします」

そのゆつくりとしたものいいぶりや、ていねいなものごしは、二十年前の彼女の母親にそっくりであつた。しかしミサ子のほうは、さすがにあつさりきじと生地をみせ、なつかしそ

うにいった。

「先生がまた岬みさきへおいでるといふのを聞いて、わたし、うれしくて涙なみだが出ましたの。母子おやこ二代ですもの。こんなこと、めずらしいですわ、ほんとに。でも先生、お達者たっしゃで、よろしかったこと」

「おかげさまで。でも、みんな、いろんな苦勞をくぐりましたね」

それには答えず、あたりを見まわしながら、ミサ子は、

「先生が怪我けがをしたところ、こちらへんでしたかしらん？」

なつかしそうな目をしていった。

「そう、でしたね。よく思いだしてくれたこと」

「そりやあ忘れませんわ。ときどき思いだしては早苗さなえさんと話していたんですもの。わたしのクラスは、岬に学校がひらかれていらいの変わりものの寄り集まりらしいって。ほら、あのとき、先生とこまで歩いていたりして」

そういいながら、はるかな一本松に目をやり、ちょうど近づいてきた大吉の舟を、けげんな顔でながめた。舟はもう目の前にその姿を見せていたのだ。そのほうを、顔をふつてしめしながら、大石先生は笑顔でいった。

「ミサ子さん、あれ、わたしの息子むすこですよ。ああして毎日、わたしを迎えむかにきてくれますの」

それを聞くとミサ子は驚おどろきを声に出し、

「まあ、そうです。それで先生、浜においでたんですか」

もう三日つづいている大吉の出迎えを、ミサ子はまだしらなかったのだらうか。昔からあまり人とまじわらない家風をミサ子もうけついでいるようにみえた。しかし時代の風はミサ子の家の高い土塀どべいをも忘れずにのりこえて、彼女の夫をもさらっていったまま、まだ帰らぬ兵隊のひとりに加えていた。だが目の前に見るミサ子は、くったくのない娘むすめのように大らかに、昔ながらの人のよい顔つきでにこにこしていた。そまつなモンペから足をぬくことができないでいる村人のなかで、彼女ひとりは大衆の若奥さまなのだ。永い年月の昨日から今日につづくさまざまな苦勞を、どのようにしてミサ子はくぐってきたのであるうか。終戦のときには、西口家の倉庫そうこにも、軍の物資ぶつしが天てん井じょうまで積みあげてあるという噂うわさもあったが、ほんとうかうそかさえも分からずにすぎている。その物資でミサ子の家はふとついているという噂も聞いたが、ミサ子の顔つきには、そんな悪のかげりはみえなかった。

今も彼女は大石先生と肩かたをならべ、大吉の舟のひとゆれごとに本気な心配をみせた。

「この風では、子どもには少し無理ですわ、先生。あ、あぶない！」

大吉の小さなからだは櫓ろといつしよに、海にのめりこみそうに見えたりする。そのけんめいさは、小舟とともに大吉の小さなからだにあふれていて、見ているこちらもしぜんに力りきんできた。おかでは寒くさえあるのに、大吉は汗あせみずくにちがいがなかった。

「自転車は、もうお乗りにならないんですか、先生」

ミサ子から声をかけられてもそれに耳をかすゆとりもなく、大石先生は、波にもまれる大吉を小舟もろともたぐりよせたい気持で見っていた。ミサ子はかさねて、

「雨や風の日は、舟はむりでしょう。自転車のほうが、かえって早いでしょうに」

「ええ、でもねミサ子さん、自転車なんて、きょう日はび、買うに買えないでしょ。もしも買えるとしても、ふところが承しやうち知ちしない」

舟から目をはなさずにいいながら、以前でさえも月賦げつぷで買ったことを思いだした。それをしてくれた富子という自転車屋の娘は、そのあと結婚して東京でくらししていたのだが、はがきさえも品切れがちの戦争中に消しょうそく息そくもたえ、そのままになっている。東京の本ほんじ所で、やはり自転車屋をしていた彼女一家が、今どこにどうしているか、おそらくは三

月九日の空襲で一家全滅したのではなからうかと考えだしたのは、戦争も終るころだった。わが身のあわたましい転変に心をうばわれ、人のことどころではなかったのだ。

K町の富子の父たちの住んでいた家はいまも自転車屋であるが、どんないきさつからか戦争中に店主がかわつて、今では、いつ見ても貧相な感じの年とった男が一人、きたない古自転車をいじくつているだけだった。そこでも、あととり息子が戦死したのだ。新しい自転車など、どこにあるのだろう。だのにミサ子は、しごくかんたんにいった。

「先生、もしも自転車をお買いになるんですしたら、ご相談にのりますから」

それがどういう意味なのか問いかえすひまもなく、大吉の舟はきゆうに速力をまして近よつてきた。陸地のかげにはいつて、風がなくなつたのであろう。大吉は母親にだけにと笑つて、そつぽをむいてすましていた。水棹を押しつづつていづつに舳を砂浜によせ、母親の乗りこむのをまつている大吉の横顔に、いつもとちがったことばがいち早くとんできた。

「さ、坊ちゃん、つかまえてますから、あがつてらっしゃい」

おどろいてふりかえる大吉に、こんどは大石先生が笑いかけ、

「大吉、ひと休みしたら？」

だまつてかぶりをふる大吉へ、かさねて、

「ちよつとお母さん、この方に、お話があるの。だから、そのあいだけ待つて」

大吉はおこつたような顔をして、だまつて浜にとびおりた。大きな石にとも綱づなをとるのをまつて、

「大吉も、ここへおいで」

大吉もいる前で、ミサ子に自転車の話をききたいと考えたのだが、もうそのことは忘れてような顔をしているミサ子と、大人おとなつぽく膝ひざをだいて沖おきを見ている大吉とにはさまれて坐すわると、どうしたのか自転車のことは口に出したくなくなつた。どんな方法がミサ子にあるというのか。いずれは、おたがいの心をよごすほかに道がないことがわかるように思えたからだ。重くるしくだまつていると、それをほごすように、ミサ子は氣がるに話した。た。

「早苗さんと、こないだ話したんですけど、わたしらのクラスだけで、先生の歓迎会かんげいかいをしようかつて」

「まあうれしいこと。でも、歓迎していただくほど、わたしは役立ちますかどうか。ここへくるまでは、昔むかしのまま元気なつもりでしたのにね、きてみると泣けて泣けて。泣けるこ

とばかりが思いだされましてね……」

そういつてもう涙ぐなみだんでいる先生だった。それをいそいでぬぐい、思いさだめたようすを声のひびきにこめて、

「しかしまあ、うれしいことですね。クラスの人、何人いますの」

「男が二人、女が三人。でも女のほうは小ツルさんやマツちゃんも呼ぼうと、いつてますの」

「マツちゃんて、川本松ちゃん？」

「え、ながいこと、どこにいたやらわからなかったのが、戦争中にひよっこり、もどってきたんですの。ほんのちよつと居ただけで、またどこかへ出てゆきましたけど、マスノさんが所を知ってるそうです。マツちゃん、きれいになって先生、みちがえそうでしたわ」
 そういいながら、ミサ子の顔に異様な表情が走つたのを、わざと気づかぬ顔で大石先生は、おとといの教室を思いだしていた。

——ちさとさんは、お父さんもおじいさんも大工さん？

——ううん、大工さんは、おじいさん。

——松江さんて、お姉さんでしょ？

——ううん、お母さん。大阪におるん。洋服おくつてくれたん。

松江そつくりの黒い目をかがやかせた川本千里であった。それについて、ミサ子に聞く気はおこらなかつた。しかし、別のことできかずにいられないことがあつた。

「それよりか、富士子さんはどうしてるか、わかんないの？」

ミサ子は松江のときの表情をいつそう強めていった。

「あの人こそ先生、かいもく行方不明ゆくえですわ。なんでも戦時中、成金なりきんさんにうけだされて出世したという噂うわさもありましたけど、どうせ軍需ぐんじゆ会社でしょうから、今はどうなりましたか……」

知らず知らず顔色に出たミサ子の優越ゆうえつ感つかんにも、人生の裏道を歩いているらしい松江や富士子のことにも、わざと目をそらすかのように大石先生はうつむいて、じぶんにでもいつて聞かせるように小声でつぶやいた。

「生きていれば、また会うこともあるけれど、死んでしまつちやあね」

ミサ子もしんみりと声をおとし、

「ほんとですわ。死んで花実はなみが咲くものか……。コトやんが死んだのは、ござんじですか？」

だまつてうなずく先生に、ミサ子は立てつづけて、

「ソソキさんのことは？」

おなじようにうなずく先生の目に、またも涙はあふれていた。磯吉が失明して除隊になったと早苗から聞かされたとき、早苗といっしょに声をあげて泣いた先生であったが、あのときの悲しみは今も心の底に沈しずもっている。早苗が見舞みまいにゆくと、磯吉は眼帯がんだいをした顔を膝ひざにつくほどうつむきこんで、いつそ死んだほうがよかつたとしよげきつていたという。質屋の番頭をころぎしていた彼が、貧しい実家にかえつての立場を思うと死にたかつた磯吉の気持もさつしられて、泣いたのだが、今はもうちがってきている。その後の磯吉が、町のあんまの弟子でし入りをしたと聞いて、彼のそのおそがけの出発にほつとしていたからだ。たつた一つの生きる道、その暗黒の世界を磯吉はどのように生きぬくであろうか。しかしミサ子は、じぶんの心の貧しさをさらけだすようなことをいった。

「生きてもどつても、めくらではこまりますわ。いつそ死ねばよかつたのに」

だれが磯吉をめくらにしたか、そんなことはちつとも考えてはいないようなミサ子のこ
とばに、もう逃にげてはいられないとばかりに、大石先生はいった。

「そんなこと、ミサ子さん、そんなことどうしていえるの。せつかく立ちあがろうとして

いるのに。ことにあなたは同級生よ」

叱しかられた生徒のようにミサ子はあわてて、

「でも、でも、ソソキさんは、人にあうと死んだほうが、ましじゃ、ましじゃというそうですもの」

じぶんの考えの浅さに目がさめたように、あかい顔をしてミサ子はいった。

「それを、気のどくだと思わないの。死にたいということは、生きる道がほかにないということよ。かわいそうに。そう思わないの」

「そりや、思いますとも。かわいそうですわ。なんといったって同級生ですもの。でも、だいたい、わたしたちの組はふしあわせものが多いですね、先生。五人の男子のうち三人も戦死なんて、あるでしようか」

ならんでいる大吉に肘ひじをつつかれて、大石先生はきゆうに気がついてふりかえった。六、七人の子どもが、三人のすぐうしろを、みだれた半円形にとりまき、珍めずらしそうにながめていた。きゆうにふりむかれて子どもらは、飛びたつ鳥のように走りだしたが、走りながら叫さけんだ。

泣きみそ　せんせ

泣きみそ せんせ

すぐうしろの丘の共同墓地のほうへ逃げてゆくのをみると、

「ちよつと、お墓へまいりましょうか、ミサ子さん」

「え、水もらつていきましよう」

ミサ子はすばやく立つて小走りに、道ばたの家へはいつていった。まもなく手桶をもつて出てくるのを見ると、大石先生はあごをしゃくつて墓地のほうをしめしながら、

「すぐそこ、ほんの十分かそこらだから、まつてね。お母さんの教え子の墓まいりなんだから。いっしょに、きてもいいけど」

なんとなく不服らしい大吉を残して、二人はならんで歩きだした。

「まあ、ノツポになつたことミサ子さん。あんた一ばんちっちゃかつたでしょう」

「いいえ、コトやんです。そのつぎがわたしでしたわ。……先生、コトやんの墓」

道ばたから二足三足はいつたところに、そのコトエの墓はあつた。雨風にさらされ、黒くなつた小さな板屋根の下に、やはり黒っぽくよごれた小さな位牌が一つ、まるで横になつて寝ているように倒れていた。生前のコトエが使つていたのであろうか、浅い茶碗に茶色の水が半ば干からびていた。それになみなみと水をそそぐそのわきで、大石先生は位

牌をとって胸にだいた。これだけが、かつてのコトエの存在を証明するものなのだ。俗名コトエ 行年二十二歳 ああ、ここにこうして消えたいのちもある。医者も薬も、肉親のみとりさえもあきらめきつて、たつたひとり物置きの間で、いつのまにか死んでいたというコトエ。——もしもわたしが男の子だったら役にたつのにというて、お父さんがくやむんです。わたしが男の子でなかったから、お母さんは苦労するん……

男に生まれなかったことをまるでじぶんや母親の責任であるかのようにいった六年生のコトエの顔が浮かんでくる。希望どおり彼女が男に生まれていたとしても、今ごろは兵隊墓にいるかもしれないこの若いいのちを、遠慮もなく奪ったのはだれだ。また涙である。「去に。めずらしげにつきまわらんと」

そういつたミサ子の叱り声で、子どもたちに見られていることに気がついた。

「ほんとに、いよいよ泣きみそ先生と、思うでしょう」

そういつて笑うと、ミサ子もいつしよに笑いながら、うながすように柄杓をさしだし、「先生、さ、お水」

いつのまにまつたのか、摘み花のマユミの葉が茶碗に青くもりあがっていた。兵隊墓は丘のてっぺんにあった。日清 日露 日華 と順をおって古びた石碑につづいて、新

らしいのはほとんど白木しらぎのままの朽くちたり、倒たおれているのもあった。そのなかで仁太や竹一や正のはまだ新あらしくならんでいた。混乱こんらんした世相はここにもあらわれて、罪つみもなく若い生命いのちをうばわれた彼らの墓ほぜん前に、花をまつるさえ忘れていることがわかった。花立ての椿つばきはがらがらに枯かれて午後ひの陽ひをうけている。きちんと区画くかくした墓地に、墓標ぼひょうだけならんでいる新らしい兵隊墓。人びとの暮くしはそこへ石の墓を作つくって、せめてものなぐさめとする力も今はなくなっていることを、墓地は語かたっていた。

それは大石先生の心にもひびくことであつた。同じような夫おつとの墓を思いながら、あちこちと春草もの萌もえだした中からタンポポやスマレをつんで供そなえると、二人はだまって墓地を出た。もう泣いてはいなかつたが、うしろからぞろぞろついてくる子どもたちは、あいかわらずよびかけた。

「泣きみぞ　せんせえ」

すると、うてばひびくように、大石先生はふりかえりざま答えた。

「はアいい」

おどろいたのはミサ子だけではなかつた。子どもたちのやんやと笑う声をうしろに、先生も笑いながら、まだ知らぬらしいミサ子にいった。

「どうも、へんなあだ名よ。こんどは泣きみそ先生らしい」

若葉の匂うにおような五月はじめての朝、大石先生は校門をくぐるなり、一年生の西村勝子の待ちかまえていたらしい姿に出あった。

「せんせ、ゆうびん」

ほこらしげに勝子は、一通の手紙をつきだした。

——たまの日曜日、先生も御用の多いことおさっしいたしますが、どうぞどうぞお出かけくださいませ。一度御相談してからと思つていますうちに、だんだんむぎ麦も色づきだしましたし、むぎか麦刈りが近づくにつれ、しだいにむつかしくなりそうでしたので、大いそぎ私たちでとりきめました。この日ですと、たいていの顔がそろはずですから、どうぞお出かけくださいますよう……

例の歓迎会かんげいかいの案内あんないである。ミサ子やマスノの名も書いてあったが、早苗の字なのは、はじめからわかつていた。読みおわった先生は、勝子にむかつて、

「お母さんに、先生が、ハイっていつてたといつてね。わかった。ただね、ハイっていえばいいの」

だが、ひとりじぶんの机つくえの前に腰こしかけると、さて困った、とつぶやいた。というのは、ちようどその日にあたるあさつての日曜日には、少し早いが八津の年忌ねんきをしようと、昨夜大吉たちと約やくそく束そくをしたばかりなのであった。いなりずしでも作ろうというのと、

「わあっ!」

と、並木はからだごと歓かんせい声をあげ、大吉は大吉で兄らしい思慮しりよをめぐらしていたのである。

「お母さんお母さん。八津の墓はかにもいなりずしもつてつてやろう。ぼく、明日あした学校の帰りにK町のやみ市であぶらげ買ってきとく。お母さんお母さん、あぶらげ何枚なんまいたのむん？ お母さんお母さん、やみ市でも大豆だいず持つていくん？ 何合なんごうもつていくん？ お母さんお母さん、ぼくたち、今日から瓶びんで米つこうか——」

こんなときやたらお母さんお母さんとかさねていうのが大吉のくせであった。よほどうれしかったのだ。それをのぼすといつたら、どんなにかがっかりするだろう。年忌ねんきとはいつても、時節じせつがら客をまねいたり、坊さんをよんだりするのではない。いわば、いつも留る

守番すばんをしたり、送り迎えむかをしてくれる二人の息子をなぐさめるための計画であり、久しぶりに月給をもらったひそかな心祝いでもあった。それを八津に結びつけたのは、八津と同じ年の一年生を見るにつけ、八津が思いだされたのもあったし、ミサ子といっしょに仁太や竹一たちの墓へまいったりしたことからの思いつきでもあったろう。

その日先生は家へ帰ってから、二人の子どもの前で話した。

「なあ、君たち、こまったことができたんだけど、あさつての日曜日、お母さん用事ができたの。八津の年忌ねんき、一週間のばそうよ」

「いやっ」

「いやだっ」

二人はま正面から反対した。

「そう。こまったな。お母さんの昔むかしの教え子がね、歓迎会かんげいかいをしてくれるというのよ。歓迎会かんげいかいって、よろこんでむかえてくれる会よ。それをことわるわけには、いかんだろ」

「いやっ。やくそくしたもん」

いつも留守番の時間の多い並木はひるまずそうだったが、大吉はさすがにだまっていた。しかしその顔には、失望の色がはつきりあらわれていた。

「そうよ。おまえたちと約束したから、お母さんこまったのよ。いっしょに考えてよ、並木も大吉も。お母さん、歓迎会にいかないで、家にいたほうがいい？」

そして、手紙をよんで聞かせた。二人ともだまりこんで、顔を見あわしていたが、やがて並木は、ぶつぶつとつぶやいた。

「やくそくしたもん。ぼくらのやくそくのほうが、さきだもん。民主主義だもん」

民主主義に思わずふきだしたお母さんは、それと同時に一つの考えがうかんだ。

「じゃあね、これはどう。八津の年忌ねんきはのぼすのよ。そして、あさっては本村へピクニックとしようや。お母さんの会は水月楼すいげつろうよ。ほら、香川マスノって生徒のやつてる料理りょうり屋や。そこで、歓迎会がすむまで、おまえたち、本村の八幡さまや観音さんで遊ぶといい。お弁当べんとうは、波止場はとばでも食べなさいよ。そうだ、釣竿つりざおもってって波止場で釣りしたつておもしろいよ。どう？」

「わあつ、うまい、うまい」

並木がまたさきに歓声かんせいをあげ、大吉もさんせいらしい笑顔でうなずいた。

日曜日は朝から曇くもっていた。ふりさえしななければ、一本松から一里の道を歩くにはかえって都合がよかった。歓迎会は一時からというので、十二時にはもう家を出た。以前なら

ば十五分ほどバスにのればゆけた道を母子はてくてくと歩きだした。珍らしいことなので、めず出あう人がきいた。

「おそろいで、どちらへ？」

返事をするのは並木ときまっていた。並木は少しふざけて、

「ぴくにいくんだよ」

それはピクニックというのをわざとそういつたのであるが、だれにも通じなかった。きかえすものもなかった。それがまた、二人にはおもしろくてたまらなかった。向こうから知った人の姿があらわれるたびに、

おそろいでどちらへ、

と二人は、母子三人だけに聞こえる声でいう。すると、かならずそれはあたった。

「おそろいでどちらへ？」

「ぴくにいくんです」

並木はすぐ早口でいって、とつととゆきすぎた。大吉がおつかけていって、二人はしやがみこんで笑う。こんなことは生まれてはじめてなので、二人はうきうきしていた。何度も同じことをくりかえしているうち、もうたずねる人もなくなったころには、隣りの村とな

にさしかかっていた。本村にさしかかり、お母さんと別れねばならぬ場所が近づくと、さすがのきょうだいも少し不安になったらしく、かわるがわるきいた。

「お母さん、ぼくらのピクニックのほうが早くすんだらどうしよう」

「そしたら水月の下の浜で、石でも投げてあそんどればいい」

「本村の子が、いじめにきたら」

「ふん、並木もいじめかえしてやりやあい」

「ぼくらより強かったら」

「かいしようのない、大きな声でわあわあ泣くといい」

「笑われらア」

「そうだ、笑われらア。泣き声聞きこえたら、お母さんも水月の二階から手たたいて笑ってやらア」

「お母さんの歓迎会かんげいかい、浜の見える部屋？」

「たぶんそうだろう？」

「そんなるときどき顔出して見てなあ」

「よしよし、見て、手をふってあげる」

「そしたら、大石先生とこの子じやと想着、いじめんかもしれん」

並木に大石先生といわれたことで、大石先生は思わずにやりとなり、

「へえ、大石先生か、このお母さんが……」

岬^{みさき}では泣きみそ先生といわれているといおうとしてやめた。別れ道へきていた。そこか

ら二人は八幡山へ登るのだった。十間^{じっけん}ほどもいつてから、大吉が叫^{さけ}んだ。

「お母さん、もしも、雨降つてきたら、どうしようか？」

「あんぽんたん。二人で考えなさい」

水月まではもうあと十分たらずだった。まっすぐに歩いてゆくと、向こうから早苗とミサ子^{みさこ}が子どものように走つてきた。

「せんせえ」

ろくにあいさつもしないで、両側からとびついてきた。

「先生、めずらしい顔、だれだと思えます？」

早苗がいった。

「めずらしい顔？」

「一ぺんにあてたら、先生を信用するわ。な、ミサ子さん」

二人はいたずらっぽくうなずきあつて笑つた。

「ああこわい。信用されるかされないか、二つに一つのわかれ道ね。さてと、めずらしいといわれると、さしずめ、ああ、ふたりでしよう、富士子さんに松ちゃん？」

「わあ、どうしよう！」

早苗は子どものように大声をあげた。

「あつたの？ 二人ともきたの？」

「いいえ、ひとりです。ひとり。あてて？ わあ、もうわかつたわ。いるんだもん」

三人はもう水月の前にきていた。見ていたのか玄関げんかんには小ツルやマスノをまん中にして、ずらりとならんでいたのだ。黒めがねの磯吉にどきんとしている大石先生の肩かたへ、いきなりしがみついて泣きだしたのは、マスノの横に立っていた、どことなくいきなつくりの着物をきた女だった。

「せんせ、わたし、松江です」

名のられるまえに、先生もすぐ気がついた。

「まあ、ほんとに珍めずらしい顔。よくきたわねマツちゃん、ほんとに、よく。ありがとうマツちゃん」

松江はしやくりあげながら、

「マスノさんから手紙もらいましてな、こんなときをはずしたら、もう一生仲間はずれじやと思つて、恥はじも外聞がいぶんもかなぐりすててとんできました。先生、かんにんしてください」
それこそ恥も外聞もなく泣きだすのをみると、マスノはわざと衿えりがみをつかんでひきもどしながら、

「これ、マツちゃんひとりの先生じゃありませんぞ。さ、いいかげんで、上へ行こう、行こう」

やっぱり海に向かった座敷ざしきだった。

「ソNKさん、こんにちは」

先生は磯吉の手をとつて、いっしよに階段かいだんをあがろうとした。

「あ、先生、しばらくでした」

「七年ぶりよ」

「そうですね。こんなざまになりましたな」

磯吉は、ちよつと立ちどまつてうつむいたが、ひかれるままに先生とならんで階段をあがった。曇くもっていた空は少しずつ晴れまを見せ、ま昼の太陽は海の上にきらきらしていた。

二階はまぶしいほどのあかるさなのに、山に面した北窓のほうは今にも降ってきそうな、奇妙な空模様である。しかし、八畳を二つぶつとおした部屋に、さわやかな風はみちわたり、肌はだにこころよくしみとおるようだった。

「ああら、眺ながめのいいこと、ちよつとオ……」

てすりのそばからだれにともなくふりかえった小ツルは、きゆうに口をおさえてあとをいわなかつた。磯吉を見たからだ。そのまの悪さをすぐに、ふつ消すように、マスノはれのゆたかな声で、

「さ、先生はここ。ソソキさんとならんでください。こつちがわがマツちゃん。ふたりで先生をはさんで、堪たんのう能するだけしやべりなさい。あとはめいめい勝手にすわつて」

投げだすようにいつてはいるが、それはじつに思いやりのあるマスノのはからいであることを、先生はひそかに感じた。

「先生を、一年生みんなでおむかえしたつもりですの。ですから……」

ちらりと磯吉を見て、マスノもやはりあとをいわずに床とこの間まを指した。そこにはハガキ型の小さな額縁がくぶちにいれた一本松の下の写真が、木彫きぼりの牛の置物おきものにもたせかけてあった。早苗がkantandではあるが、あらたまつた挨拶あいさつをすまずと、マスノはまたまを置かずに

いった。

「さ、あとは無礼講ぶれいこうでいきましようや。昔の一年生になったつもりで、なあ、ソソキ」
きちんとかしこまった磯吉はにこにこしながら膝ひざをさすった。さつきから、きつかけをつかもうとあせっていた松江は、先生にすりよって行って、その顔をのぞきこむようにながら、

「せんせ、千里ちさとがお世話になりました。それ聞いたときわたし、うれしいてうれしいて。わたしはもう先生の前に出られるような人間ではありませんけど、でも、たとえばどんなにけいべつされても、わたしは先生のこと忘れませんでしたの。あの弁当箱、今だって持つてますから、大事に」

そういつて、ハンカチーフを目にあてるのを見ると、マスノはませかえすような調子で、「なーにをマツちゃんがまた、酒ものまんうちにひとりぐだまいてるの。やめた、やめたそんなぐち。先生の前でいうこつちやないわ。昔むかしにかえつて！」

ぽんと松江の肩をたたくと、松江はむきになり、しかし陽気さをくわえていった。

「だから昔話してんのに。なあ先生、わたし、あの弁当箱、戦争中は防空壕ぼうくうごうにまで入れて守つたんですよ。あの弁当箱だけは、娘にもやりたくないんです。わたしの宝たからでしたの。

今日もお米入れて持つてきたんですよ、先生」

それを聞くと吉次が、あ、そうじゃ、といいながら、国民服の脇わきポケットから小さな布ぬ袋のぶくろをとりだし、

「はい、うら（私）の食いぶに」

と、マスノのほうへさしだした。

「ええじゃないかキッチン、おまえ、魚もつてきてくれたもん」

どうやら今日の会はもちよりであるらしいと思いつながら、大石先生はしきりに松江の話
を聞こうとした。松江のいう弁当箱とはいったいなんだろうと思つたからだ。防空壕ぼうくうごうに

まで入れた宝の弁当箱とは。

先生はあの百合ゆりの花の弁当箱のことをすっかり忘れていたのだった。

「マツちゃん、弁当箱つて、なあに？」

小声できくと、松江はとんきような声を出し、

「あら、先生、忘れたんですか。そんならもつてくる」

とんとん音立てて階段を走りおりにいったと思うと、やがてまたとんとんかけあがつて
きた松江は、みんなの前に、からの弁当箱を、赤ん坊のするあるまいあるまいでしてみせ、

「どうですこれ、わたしが五年生になったとき先生にもらったんですよ皆さん。どうです、どうです」

わあと歓声^{かんせい}があがり、

「先生、見そこないました。先生がマツちゃんだけにそんなひいきをしたの、知らなんだ、しらなんだ」

マスノの抗議^{こうぎ}にまた笑声があがった。しかし、先生は涙ぐんでそれを見ていた。

見せられて思いだしたその弁当箱に、いちども弁当をつめて学校へはこなかつた松江のことが、修学旅行^{しゅうがくりょ}のとき、棧橋前^{さんばしまえ}の小料理屋で、てんぷらうどん一^{いち}丁^{ちやう}ツと叫^{さけ}んでいた松江の姿が、久しぶりに生きて動いて、いま目の前にいる松江とむすびつこうとしている。かわいそうだった松江、そのかわいそうさをくぐってきたことをじぶんの恥のように卑下^{ひげ}しているような松江……。

ぼつぼつ料理が運ばれ出すと、松江はいち早く立ちあがった。ビールとサイダーを両手にもって、なれた手つきでついだまわる。それを見さだめてからマスノがいった。

「さ、先生のために、乾杯^{かんぱい}！」

マスノはまつさきにコップを干^ほした。松江がつぐのをつづけて干^ほしてから、大きなため

いきをし、

「ああ、ここに仁太やタンコがおつたらなあ。そしたらもういうことないですな先生。ソ
ンキにタンコにキツチンに仁太と、人の好いのがそろとつたのに。竹一じやとて、上の学
校へいきだしてからは少しすましとつたけど、人間はよかった。わたしらの組、お人好し
ばっかりじゃないですか。それが、男はみんなろくでもない目にあい、女は海^{うみせん}千山^{やません}千
になつてしもた。小ツやんや早苗さんじやとて、やつぱり海千山千よ。ただその筆^{ひつとう}頭^{とう}が、
わたしとマツちゃんかな。でもやつぱり、人はわるうないですよ。苦労しただけ、もの分
かりもええつもりです。ミイさんのような賢^{けんぶじん}夫人^{ふじん}や、小ツやんや早苗さんのオールド・
ミスのおえら方にはできませんこと、わたしらはするもん。なあマツちゃん、大いにやろう」
そういつて松江のコップにビールをついだ。ビールをのんでいるのは二人だけなのだ。
小ツルははじめから磯吉のそばにすわりこんで、いちいち食べるものの世話役をしている
し、松江は松江で、ここがじぶんの持場だというように、小まめに立つたりすわったりし
て料理をはこんでいた。昔^{むかし}ながらのおとなしきで、だまってのんだり食ったりしている吉
次とならんで、早苗はふきだしながら、先生のほうを見、

「な先生、そう思いませんか。こういうところに出ると一ばん役に立たんのは学校の先生

だと」

肩かたをすくめて笑うと、

「わたしこそ」

と、ミサ子がもじもじしたので、そこで笑いが渦うずまいた。だいぶ酔よってきたマスノは、磯吉のそばによつてきて、コップを手てににぎらせ、

「さあ、ソンキ、あんまになるおまえのために、も一ぱいいこう」

気がつくと、磯吉ははじめから膝ひざもくずさず、きちょうめんにかしこまっていた。

「ソンキさん、みんな行儀ぎようぎわるいのよ。あんたもつとらしくすわったら」

大石先生にそういわれると、磯吉は少しななめにまげた首くびのうしろに手をやり、

「いやあ先生、このほうがじつは、らくなんです」

質屋の番頭が目的だった彼の十代の日の膝ひざの苦行くぎようはもう身みについてしまっているといふのだ。彼はいま、三十に近くなつて、こんどは腕うでをかためねばならないのだ。もうすでにかたまつた彼の腕うでがどこまで、あんまとして成就じようじゆできるか。しかもそれよりほかに生きる道はないのである。あんまの師匠ししやうは、そういう弟子でしをとりたがらないのだが、マスノの骨折こせつりで、彼のばあいは首尾しゆびよく住みこめたという。その磯吉に、マスノはまるで

弟あつかいの口をきき、

「おまえがめくらになんぞなつて、もどつてくるから、みんなが哀れ^{あわ}がって、見えないおまえの目に気がねしとるんだぞ、ソンキ。そんなことにおまえ、まけたらいかんぞ、ソンキ。めくらめくらといわれても、平氣の平ぎでおられるようになれえよ、ソンキ」

ビールは磯吉^{いそきち}の膝^{ひざ}にこぼれた。それを手早く磯吉はのみほし、マスノにかえしながら、「マアちゃんよ、そないめくらめくらいうないや。うらア、ちゃんと知つとるで。みな気がねせんと、写真の話でもめくらのことでも、大っぴらにしておくれ」

思わず一座は目を見あわせて、そして笑つた。ソンキにそういわれると、今さら写真にふれぬわけにもゆかなくなつたように、写真ははじめて手から手へ渡つていった。ひとりひとりがめいめいに批評^{ひひよう}しながら小ツルの手に渡つたあと、小ツルは迷うことなくそれを磯吉にまわした。

「はい、一本松の写真！」

酔いも手つだつてか、いかにも見えそうなかつこうで写真に顔を向けている磯吉の姿に、となりの吉次は新らしい発見でもしたような驚^{おど}ろきでいった。

「ちつとは見えるんかいや、ソンキ」

磯吉は笑いだし、

「目玉がないんじやで、キッチン。それでもな、この写真は見えるんじや。な、ほら、ま
ん中のこれが先生じやろ。その前にうらと竹一と仁太が並んどる。先生の右のこれがマア
ちゃん、こつちが富士子じや。マツちゃんが左の小指を一本にぎり残して、手をくんど
る。それから——」

磯吉は確信をもつて、そのならんでいる級友のひとりひとりを、人さし指でおさえてみ
せるのだったが、少しずつそれは、ずれたところをさしていた。相槌あいづちのうてない吉次に
かわつて大石先生は答えた。

「そう、そう、そうだわ、そうだ」

あかるい声でいきをあわせている先生の頬ほおを、涙なみだの筋すじが走った。みんなしんとしたなか
で、早苗はつと立ち上った。酔よったマスノはひとり手すりによりかかつて歌っていた。

はるこうろうのはなのえん

めぐるさかずきかげさして

じぶんの美声に聞きほれているかのようにマスノは目をつぶって歌った。それは、六年生のときの学芸会に、最後の番組として彼女が独唱し、それによって彼女の人気をあげた唱歌だった。早苗はいきなり、マスノの背^せにしがみついてむせび泣いた。

青空文庫情報

底本：「二十四の瞳」角川文庫、角川書店

1961（昭和36）年9月30日初版発行

1989（平成元年）年7月10日66版発行

初出：「ニューエイジ」

1952（昭和27）年2月1日～11月1日

※誤植を疑った箇所を、「二十四の瞳」角川文庫、角川書店、2007（平成19）年6月25日
改訂初版発行の表記にそって、あらためました。

入力：sogo

校正：みぎた

2018年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二十四の瞳

壺井栄

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>